

324  
669

5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

始



田中晴川居士講演

京都眞宗大谷大學に於ける講演草稿を訂補し  
極めて平易に彌陀教の眞理を闡明ならしむ

# 佛說大無量壽經眞義

(彌陀法としての法華經研究別卷)

324-669



大正  
新刊  
志  
義

海  
陸  
陸  
軍  
法  
律  
研  
究  
會



## 緒言

この巻を標して法華經研究別卷としたは、最初からの豫定ではなく、中途からの思ひ付きであるから、辞遣ひにも治りの宜くない處もあるが、末尾に至るまでの間に於て、愚見の本末を知らるゝことの出来るように、注意を用ひて説述して居るのである。尤も出世本懷談は、前卷の卷首から始めてあるから、併せ見られて、其完きを得らるゝことを希望する。

出世本懷談より發足しての法華無量壽兩經の比較研究は、其れは此講録の原因を爲す大谷大學の講演に於ても、此問題には觸れない程であつた、第一其時間さへもなかつたのである。併し今は大無量壽經眞義と銘打つての講演となつたので、責任上

勢ひ法華經の秘關を開いて、私の眞義という所謂眞義に強味を著け、且つ有力なる裏書を求めんとして事のここは至つたのである、然り實際講録の上に大に訂補を試みたのである。

所が斯う書き上つて願ると、場内の議事よりも或は大問題であるものを、一寸戸外へ連れ出しての立話で決了せうとか、つたも同然で、僅に此卷の所述で以て、法華經が悉く彌陀法であり、且つ其が徹頭徹尾、大無量壽經と表裏したものであることの理解を得んとしたは、余りに勝手に過ぎた考であつたかも知れぬ。一千五百年因襲で築上げた法華八軸二十八城が、假りに蘇張の辯があつたとしても、そう脆く明渡を聴くものでもなからう、又おいそれと受取る譯に往くものでもなからう。

且つ此の講録は、極めて平易に彌陀教の眞理を闡明ならしむ

と標榜した如くて、専門外の方々へも涉りを付けて、大無量壽經は是の如きものであるとお知らせして、各の安心立命の上に、新しく意義ある貢献をもなさんとしたので、勢ひ二兎を追ひ三兎を追ふの形となつたは、此亦失敗の増上縁となつたのである。

重ね重ねの失敗ではあるが、是も私の心持の上には、同情の求めたい所がある。申せば限のない事であるが、要之佛教其物の現状が如何にも私の意に満たないので、素養の資するなき老軀を駈て、曾て佛の聖典に向つては可なり熱烈に研究の歩を進めて見たのである。夫は惟り個人の安心立命の上に付てのみならず、社會的に人世生活を充實し、尙進むでは、國民と國民との間に於て自主ある平和を堅固ならしめんとするにも、我宗教の上に統一と改良とが望ましく想ふたからであつた。所が昨秋不

思議の縁に催されて、大無量壽經の上に默契する所があつて、多年是の如き信條の上に立つ宗教があつたならば、と理想しつゝあつた筋が、悉く大無量壽經の上に顯れて居るに氣付くことを得せしめられ、夫から兩三年前に、二三度通讀したところのある法華經で、臚氣の如く頭裏に残て居る節が、大無量壽經と同旨趣であるように思はるゝので、更めて法華經を讀て見ると、案の條大無量壽經と氣脈を通じて居ることが判り、十回二十回と熱讀の功を積むに従ふて、全く同一法門であつて、彼は根、此は幹なることが明瞭となつた。餘りに苦心した末にこの結果を得たので、嬉さと悦ばしさが先に立て、遂には隼夫の二兎を追ひ三兎を追ふの愚を演じ、戸外の立話で、二十八城を口説き落さんとする輕卒を敢てすることゝなつた。

右の如きであるから、私の所作の愚なりし所は同情を戴くの外はないが、併し法華無量壽兩經の經義の解釋の上に付ては、今も初の如く必ず後も今の如くであらう、夫は如何にも未成品である、勿論飽がけのしてあるものとは言はないが、大體に於て私の所見は金輪際錯りのないものと確信する。大無量壽經は一千七百年、法華經は一千五百年、何れも年を閱する少とせず、和漢幾多高僧の手に玩ばれたが、此眞義を透見したものは一人もなかつた、考へれば理解の出來難ひ珍事であるが、事實は事實である、全く世界の文化史上に於て無比の奇蹟である。茲に於て又私の嬉さと悦ばしさが先に立つといふは、大戦争から延ひての、世界民族の上に澎湃として疊みかゝつた思想革命の時に際つて、宗教聖者としての第一人者、其第一人者たる釋迦が、降世の第

一義として説法したる法華無量壽兩經に於て、久しく湮没の眞義が発見され、而して其眞義が現代の思想を調和し、民衆を救拯する上に於て、極めて適切なる金科玉條たるものあるに至つては、時も時、希望以上の授りものをしたので、全く一の威神靈力の潜むものがある。とまでおもうたは、實の所今も尙そう思ひつゝあるのである。

之を家屋に喩へんか、表に輪奐の美を究めたる本邸あり、而して裏に洒灑に數寄を凝したる別棟が建てられてあつた。この家屋を買取るものあつて、解きこわして他所に運んでおいたが、買取つた人も運搬した人も、死去した後となつたので、以前の事が能く分らない、唯其材料が繩張して二ヶ所に積み重ねてあつたのを見て、二軒の家屋であつたものと早合點し、兄弟で分ける

ことゝなつて、兄は大嵩の方を取り、弟は小嵩の方を貰ふて、早速組立直して再建した。成程孰れも外觀立派な家と出来上つた。併し引移て棲んで見ると、兄の宏壯なる方は、何んだか寢心地の宜くない缺點がある、之に反して弟の洒灑なる方は、臺所から客室へかけて物足りない所がある。そこで孰どらも種種と手入れをなし、無理に理屈をつけて、玄關脇の應接間を寢室と取極めた如き、没常識のことも演ぜられたが、何にしてもそれ相當に座敷飾も調ふて、どうにか棲むに差支がないことゝまでには出来上つた。所で以前は同家屋の別棟で、同戸主が住んで、同時代の建築とは知るよしもないから、兄弟で自慢のしくらが始まつて、己の家が手が込んで居るとか、いや己の家が材料が良いとか、寄ると障ると口諍ひをする。

これは無論一つの喩であるが、古來の法華無量壽兩經の關係が之に能く似て居る。

其所へ折能く己前の事を知つたものが出て來て話すには、夫は本來同戸主に屬する本宅と別棟である。こんな二戸として別世帯にすべきものに設計されたのではない、兄君の方が比較的能く間取の調ふて居るに拘はらず、寢心地の宜くないは、此家の主人は多く別棟の方で寢るの趣向になつて居たからである。又弟君の方が支關口が手狹で客室等の都合の宜くないは家事に屬する事は多く本宅で取扱うの目論見であつたからである。能く氣を付けて見られよ、此方の家に梅と櫻の彫刻のあるが、大書院大廣間で、彼方の家に萩と桔梗の繪襖のあるが、寢室と化粧の間である、其他此が夫人の間、此が女中部屋、と其構造と

由來を詳く説聞せた。兄弟の二人は其説明を聞き、そう心得て見直すと、如何にも間取其他の事に於て申分はない、家事の取扱にも便利なれば、夜の寢心地も宜さそうである、客を引受るにも、子供を育てるにも、何に一つ申分なく設計されてある、材料も同じであり、大工も同じ手で出來て居る、如何にも一戸主の下に於ける別棟であつたことに了解が出來て、疑を容るゝ餘地のないものとなつた。こゝに至つては、以前の家の結構を目撃したものは今一人もゐないにしても、何處までもこれは別戸主に屬してあつたものと争ふことは出來ないであらう、といふものは事實が証據立ることゝなつた、議論の範圍を超脱したものととなつた。

私が法華無量壽兩經の上に於て確信する關係は右の譬喩の



如きで、全く阿彌陀一佛の同戸主の下の本宅(法華經)と別棟(無量壽經)である。吾人成佛の自然道義を説かれたる、寢室の眞實之利は大無量壽經にあり、吾人成佛の根本意義を説かれたる、大書院の一大事因縁は法華經にあるといふ次第となるので、此等の間取關係を可なり委しく説明して、本來一戸主の下に於けるの別棟であつたことを證據立てたのが、この法華經研究別巻と前巻に當る眞義第二巻であるのである。併しこの企が半ば失敗に了つたは前述べた如くであるが、夫れにしても讀む方に於て引取る積りで熟讀して下さつたならば、漸々にして必ずや合點せらるゝ所があるであらうとおもう。何としても佛教の上にての一大事件である、愚意を迎へ取り、愚見を育成しつゝ、不文を咎めず、冬の夜の燈火に親しまれつゝ、巻を了へて戴きたい。

現在我朝の佛教で、宗教的生命のあるのは、何としても法華經を正依としての天台日蓮大無量壽經を正依としての淨土一門眞宗の如きとて、其大部分を占めて居る。所で宗派宗派の各に於て、夫々宗祖の定められた信條の動すべからざるものがあるから、宗派に屬する人としては、法華無量壽兩經の解釋がどうなつて居らうと、そんなことに關係はないと言はるゝかも知れないが、抑宗祖の信條なるものは何を目標として定められたか、一面に時代思想を考慮しつゝ、専ら佛の聖典に據り、佛の威神功德を後循とせられたのであらう。して見れば、其信條の源泉たる佛典の解釋の上に付ては常に研究を怠るなく、而して宗旨なるものは民衆信仰の上に立つものであるとして、十分に割引して考へた所で、其研究より得たる新資料を以て、徐に宗祖の定めた

る信條綱領の下に於て、之が調和を計るといふことは、夫々宗門の棟梁たる人達の責任であつて、佛祖の恩を報ずる最善なるものであらう。況んや宗祖が信條を組織せられた、半面の基礎となつた時代の現象は、平安朝時代や鎌倉時代と今日と比較したら、社會結合の上にも、民衆思想の上にも、似ても似つかぬものも化して、桑田變じて海となつて居るのではないか。若夫れ徒らに信施の下に一日の安を偷み、羊頭を掲げて狗肉を沾る如き心得の宗門があつたならば、鼓を鳴らして責むべきであらう。誠に十萬の僧侶達の目覺めねばならぬ曉は迫つたのである。

本年の初夏、初めて此講録の第一巻を發行した時の豫定では、年末までに全部完成の積りであつた、尤も法華經へ斯くまで深入の考は更になかつたのであるが、何にしても甚しき豫定の相

違となつて申譯はない。併し此巻を能く讀んで下さつたならば、大無量壽經に對する愚見の大綱も、略御承知が出来るであらうと思ふのと共に、常に佛天の加護を得つゝ、豫定には違ひたりと雖も、事のここまでに進みたるを感謝しつゝ、彼此取束ねて特に別卷としての緒言を副へた次第である。

壬戌臘月下旬

晴

川

誌

法華經

廿八品中法師品、見寶塔品、提婆達多品、勸持品、安樂行品、如來壽量品、分別功德品の七品を本卷講演の次に抄録せり。

講演中

經文一頁一行と言ふは大無量壽經々文にして其全本は第一卷に載せたり。

前卷法華經文一頁一行と言ふは第二卷に抄録したる序品、化城喻品及び藥王菩薩本事品を指す。

末尾經文一頁一行と言ふは本卷講演の次に載せたる七品の經文を指せり。

次回講録

即ち第四卷の刊行は大正十二年五、六月頃の豫定なり。

佛說大無量壽經眞義 三卷

田中晴川居士講演

文義講演

四 出世本懷 其八

出世本懷から出發した大無量壽經と妙法華經との比較研究は、夫れから夫れと枝葉を生じ、遂に前卷で終を告ることが出来ないで、此の第三卷に跨ることゝなつたが、此の卷では必ず始末をつけて、第四卷よりは、大無量壽經の文義を逐ふて講演を進むることにするから、其お積りで見て頂きたい。

誠に此の妙法華經と大無量壽經の關係は、私に於ても意外とする所で、曾てはこれが親戚の間柄である、續合であると思ふてゐたが、全く同じ家の裏表であるとは考へなかつた。讀誦すれば讀誦する度毎に其意義が闡明になるので、二千

文義講演

此卷では必ず始末をつけて

同じ家の裏表である

年來誰れも氣附くことなしに、深き佛意を湮歿の裏に葬り去つて居たことは恐懼に堪へない。

廬山の慧遠  
は如何。

廬山の慧遠の傳を讀んで見ると、彌陀の奉信者でありながら、大無量壽經を講義せられたことは見へないで、周易を談ぜられたことや、法華經を講ぜられたこと等が記されてある。此講録の第一卷(八頁)で、慧遠と陶淵明の干係、及び陶淵明の歸去來の辭の意義と、大無量壽經の聯絡に付てのお話をして、之もまだ尻がむすばれてないが、其後此の講録の尾に副へてある江畔漫錄に、慧遠傳を書て居られる小澤打魚翁から、古詩源に廬山東林雜詩と題する慧遠の詩があることを聞き、調べて見ると、如何にも題名の如き詩があるが、能く詩意を剖判すると、全く大無量壽經に因せて東林を詠じたもので、慧遠の大無量壽經に對する見解も略窺ふことが出來、陶淵明の歸去來の辭と相待つて、大無量壽經研究の好材料を得たことであるが、此等のことは此次の第四卷では、第一卷に續いて總論も載せる積りであるから、其折に委しくお話をする。彼此のことを綜合して見ると、慧遠は法華、無量壽兩經の干係に付き、必ず一見識を持ち、深く佛意を得て居たものかとも想像することが出来る。

但し残念なことには、慧遠の書かれたもので今日殘て居るものが少ない爲めに、明らかに夫れを知ることが出来ない。

安心立命に  
一ついて。其

夫等のことは兎も角として、大無量壽經と妙法華經の干係が上述の如きものとすれば、此干係を能く調べて、大無量壽經の足らざるは法華經を以て補ひ、法華經に隠れて居る所は大無量壽經から窺ひ見るといふ如くしなくては、深奥なる佛意を知ることが出来ない譯である。とせねばならぬ。苟且かまにこゝに擷摘けつさくしてお話しては、少し淺墓に失した言となるを虞れるが、試に現代的から考へて、例へば人ありて、佛と成るには如何に心得て然るべきかと問ふものがあつたとせられよ、法然流の淨土宗の方、若くは親鸞流の眞宗の方であつて、如何に之れに答へて満足を與へらるゝか、或は一心專念に南無阿彌陀佛を唱へよとか、或は只管に阿彌陀佛の不思議の佛智を信心歡喜せよとか答へられ、次では人世の萬事が期待に反し勝であつて頼み甲斐のなきこと、或は人世のすべてが罪惡で充ちて居ること、或は各自の生命は朝露の如きことを敷演し、結局我々罪惡の民衆は丸裸となつて、宇宙に充ちたる大威力たる阿彌陀佛の不思議の佛智に憑托する外はない、阿彌陀佛はその可憐無

枯の衆生を攝取すべく、倦怠なく無限の光明を放たれて居ると説教せらるゝであらう。其説き方の巧みなると、其聽く人の境遇次第で、乃ち其周囲の事縁の次第に由りては、其處に安心立命を得て、彌陀光明の攝取中の人となるものもあらうが、久しき經驗の間には魔のさすこともあつて、或は智識的に懷疑的に、遂には其處に何かしら物足らぬ虧隙が生じ來て、折角の安心立命にヒビが入りはしないか、現にこれから十まで知り抜かれた僧侶の間に於て、却つて不安心不立命に悩み居られる方がありはしないか、居常私が竊かに懸念に堪へない所であるが、此等の解決に付て至極剴切なる教訓は、私は法華經の普賢勸發品から見出し度いと思ふ。

安心立命に  
二ついて。其

夫れは斯うである、釋尊の靈鷲山に於ける、法華經の説法が將に終りを告んとする時、息き迫き駆け著けられたは普賢菩薩である、普賢菩薩は釋尊に對し、どふか法華經の第一義が承りたい、佛滅後の善男善女が法華經を我物とするには、如何なる運び方に心得べきであるか、お聞かせが願ひたいと請はれた。所が釋尊は之に對して四法を以て答へられた。

一 諸佛に護念せらるゝ事 (佛に見棄られぬよふ、佛の慈愛護念を受けべき心懸

に怠りなきこと)

二 衆の徳本を植ゆる事 (佛の教を宣傳するの施設等に力を盡すこと)

三 正定聚に入る事 (佛の道に志を立てたる以上、其主義を變更せざること)

四 一切衆生を救ふの心を發すること。

法華八軸廿八品の第一義は右の四法にある、善男子善女人是の如く四法を成就せば如來の滅後に於て必ず是經を得んと答へられた。

右の釋尊の答は、此の法華經は菩薩(僧侶)を對手として説かれるのであるから、僧の職分を以て答へられた。約り僧は僧の職分を盡す所に於て、法華經の第一義は得らるゝのであると答へられたのである。

安心立命に  
三ついて。其

されば其佛意を擴張して考へて見ると、其時若し一般の民衆が法華經の第一義如何とお尋ねしたならば、必ず左の四法を以てせられたであらう。

一 社會に見棄てられぬよふ、社會一般の護念を受くるの心懸を怠らぬ事 (諸佛護念の意味の歸著は社會の護念となる)

大無量壽經には曰く、宜く自ら決斷し、身を端し行を正しくし、益諸善をなし、己を修め

二 慈善、教育、宗教其他公共の施設に力を盡す事（植衆徳本）

大無量壽經には曰く、汝等是に於て、廣く徳本を植え、恩を布き施惠し、道禁を犯すことなけれ、忍辱精進、一心智慧、轉た相ひ教化し徳を爲し善を立てよ。（經文七一頁十  
一行）

三 現世の事にも來世の事にも、一定の主義方針を固守する事（入正定聚）

大無量壽經には曰く、深思熟計して、自ら端正にし、專精に道を行じ、世事を決斷すること能はず、便旋として竟に至る。（經文五七頁十四行）但しこれは反説にして即ち不定聚の弊を説かれたるものである。

四 世界民衆の幸福に心を注ぐ事（救衆生心）

大無量壽經には曰く、世間の人民、父子兄弟、夫婦室家、中外親屬、當に相敬愛し相憐愍することなく、有無相通じて貪惜を得ることなく、言色常に和して相違戾することなかるべし。（經文五五頁十行）或は曰く、人能く自ら度し轉た相ひ拯濟し、精明に求願し善本を積累せよ。（經文六〇頁十三行）

安心立命に

此の法華經の宗趣とする所は、阿彌陀佛の淨土へ往生を遂ぐることにあるので

四ついて。其

あるが、その往生を遂ぐるの要諦即ち法華經の第一義は、右の四法を成就するに於て法華經を我物にすることが出来る、と答へられたことに由ると、夫々身分に應じ、己が職分を盡すところにあるといふことに歸著する、下女は下女、髮結は髮結、貴賤貧富を問ふことを須ひない、各々其職分を盡し、周圍の事情を善からしむる所に法華經の第一義は得られる、といふ譯になる。（大無量壽經亦同じ）

こゝに於て、安心立命の解決に合點の往く所はないであらうか、私は此の四法を以て普賢菩薩の間に答へられたことは、極めて之に好解決を與へられたものと思ふのである。尙この四法のこととは、後に至つて述べねばならぬ場合があるから、委細は其折に譲るとして、安心立命の心行如何に付て惱みつゝある人に對しては、千金にも價する好教訓であると思ふのである。

五つ安  
心立命に  
ついて。其

斯の如き好教訓の彬々たることは、法華經に須つ所が頗る多いよふに思ふのである。併しながら、又一般民衆との交渉に付ては、大無量壽經に依らないと捌きの付き兼ねる場合がある。例へば今の四法の如きでも、私の述べた如く民衆的に解釋すると、垢拔けのしない官僚氣分の濃い、小乘式宗門の人からは、佛法はそんなも

のでない、右の如き解釋は世善と佛法善を混茶交にしたもので、今の如き世善を以て淨土往生の遂げられるものでない、といふ如き批難があるであらう。此等の解決は法華經にも見へて居るが、大無量壽經が一層明晰である。夫等のことの説明に代ゆる爲めに、大無量壽經に説かれてある文節を、参考の爲めに前の四法の一に添載して置いたのである。其他大無量壽經の經文五三頁十三行以下は、殆んど全文に亘つて世善と度世泥洹（泥洹とは佛果のこと）との融通が説かれてある。

六つ安ん立命に  
ついで其に

尤もついでにお話しておくが、世善でも佛善でも、夫は孰にしても構ひなしとして、其行ふた善が鼻の先へ著いて居るよふでは淨土往生は遂げられぬ、どこかで行き詰る所が出来、彼の善導が雜毒の善雜毒の行といふも、此等を指してのことである。日日忠孝を行ひながら、忠孝を行ひ且つ忠孝を行ふの心のない所に、眞の忠孝は存するのである。佛法では之を空無相無願三昧といふのである。こゝまで垢抜けのすることは、百鍊研磨の後にあらざれば至り得られぬことであるが、是亦畢竟するに、己が職分を勵み盡し、盡し抜いた所に自ら開けて來るの境界である。法然が南無阿彌陀佛を唱へつゝ、唱名往生を遂げたも、親鸞が疑ひを去りて佛智に

八

七つ安ん立命に  
ついで其に

信心往生を遂げたのも、日蓮が妙法圓慈の功力に題目往生を遂げたのも、其根底に於て孰れも畢生の健闘、寒雨疾風を厭はずして、其職とする所に忠なりしことが、如何に彼等の安心を支持したかに注意するを忘れてはならぬ。

以上は多少の御参考にもと存じて、私の領解の一端をお話した譯である、實は斯様なことを文筆を介してお話するといふことは頗る至難のことで、多くの場合沈黙の優れるに如かざるものがあるであらうと思ふ。早や吞込を爲さないで、尙有徳に就いて御研究を必要とする。

教菩薩法

之もお話して置くが、法華經は具さにいへば妙法蓮華教菩薩法、佛所護念經といふべきであるが、この教菩薩法とは、此經は菩薩を教へるのであるといふ意味なのである、そうすると一般民衆とは、何の關係もなきものであるかのように聞へるが、之はそうではない、菩薩を教化したまふは、佛の知見を以て衆生に示さんと欲するが故なりとあつて、所謂道は智者の爲めに傳ふ、苟も其人に非ざれば道貴からずであつて、其道が賤まれては天下後世を害すことは出來ない。且つ廣く宣傳の任に當るものは菩薩である、即ち僧侶であるから、佛は主として菩薩を教へらるゝので

ある、其教菩薩法の極意は、一切民衆を救拯するに在るの次第である。大無量壽經も同じく教菩薩法である、併し是は阿難若くは彌勒菩薩を對手として説かれながらも、主として民衆の日常と淨土往生との融和點を説かれてゐるので、其教語が直に民衆を教へらるゝ、即ち教凡愚法となつて居る。例へば前に述べた四法でも、法華經は教菩薩法であるから、對僧侶的に説かれてゐるが、大無量壽經は四法といふ如く、割切には説かれないが、上の四法の一一に添載しておいた如く、同じ意味が民衆的即ち通俗的に説かれてゐる。此邊に付て大無量壽經と法華經とは、説相の上にて於て多少の相違を見出すことが出来る。併し究竟する所は、兩經とも一般民衆の救済にあることは申すまでもないことであつて、相依り相待て益佛意を明瞭ならしむるのである。

#### 四 出世本懷 其九

扱てこれから大無量壽經と妙法華經との聯絡に付てお話するが、夫には先づ第二卷の講演に次いで化城喻品に依て爲すべきであるが、此卷から始めて見らるゝ

先づ妙法華經の全體から見て

方の便利を圖つて、こゝには先づ妙法華經の全體から見て、法華經と無量壽經が如何なる關係であるかをお話して、而して後に前卷に次いで化城喻品のお話をするの順序が取りたい。若し化城喻品のことから見たいと思はるゝ方は下の三一七頁の其十六から以下がそれであるから、先づ其十六から讀始められたなら第二卷との聯絡の都合は宜き譯である。

其中の樞軸はと見るべき

法華經の全體から見ると申しても、夫では餘りに廣くなつて、逆も此卷でも終を告げることは出来ないことゝなるから、法華經中の樞軸と見做さるゝ部分から、更に要所を摘萃してお話する。法華經は八卷で廿八品に分れて居るが、其中樞軸と見るべきは法師品以下藥王菩薩本事品に至る十四品で、其品名を列記すれば法師品、見寶塔品、提婆達多品、勸持品、安樂行品、從地涌出品、如來壽量品、分別功德品、隨喜功德品、法師功德品、常不輕菩薩品、如來神力品、囑累品、藥王菩薩本事品の十四品である。尤も其他の品と雖も、必要といへば悉く必要であつて、例へば阿彌陀佛が法華經の本尊たるを知るの根底は、序品と化城喻品にあるが如きである。併又此の樞軸の十四品あつて、始めて夫を確めることが出来、又法華經の上に顯はるゝ阿彌陀佛の



作用を窺ふことが出来るといふ如きである。要之必要といへば廿八品悉く必要で、孰れ劣らぬ花あやめであるは申迄もない。

三寶のことについて

尙こゝで三寶のことに付て、一往の理解を求めて置きたい。聖徳太子の十七憲法にも、其の第二に篤く三寶を敬へ、三寶とは佛法僧なりとあるが、佛法では佛と法と僧とを三寶と名けて崇敬することになつて居る。尤もこれは惟り佛教のみではない、キリスト教でもマホメット教でも、苟も吾人が認めて宗教と名付け得るものならば、名前こそ變はれ佛法僧の三寶を立てないものはない、分けて此の法華經は三寶に重きを措き、三寶の區別に於て整然たるものがある。先づ經題に見ても、前にも言へる如く、此の經題を具には妙法蓮華教菩薩法、佛所護念經といふべきであるが、妙法蓮華は法であり、教菩薩法は僧であり、佛所護念は佛である。

對告者の區別

従つて對告者即ち説法の對手となる人に付ても、暗に區別のあることが見へて居る、即ち佛の事を説かれるには彌勒菩薩が對手となり、法の事を説かれるには文殊菩薩が對手となり、僧の事を説かれる場合は藥王菩薩が對手となられるのである。この佛法僧の三事に付て、對告者が夫々區別されて居ることを能く腹に入れ

て見ないと、佛の眞意の在る所を見逃す虞がある。尤も佛法僧と區別されるといふた所で、佛の事を説かれる折柄法もあれば僧もあり、僧の事を説かれる場合に佛もあれば法もあるはいふまでもないこと、唯其主とする所に付て、佛法僧と別けたままでの事であると意を得べきである。夫から上に擧げた三菩薩以外の菩薩方が、對手となられる場合もあるが、其時には其名前に於て暗示があるから、その暗示に著眼せねばならぬ。天台初め章安荆溪杯も、無暗に大難刀を振り廻すことのみ熱中して、どうも經を見る上に於て佛意如何と、佛意を探るの親切が缺けて居て此等のことに更に注意した蹟の見へぬは遺憾である。

暗示を以て充されて居る。

暗示といへば、此の法華經は一切暗示を以て充されて居る。之には二重の意味があることであらう、暗示の方法に由ることが、甚深微妙の妙法の幾分を顯示するに付て、従つて生ずるの弊害即ち錯謬を拒く上に於て便益がありと見られたからと、又一つには法華微妙の最上彌陀法は、大信力を以てせざれば窺ひ知ることの出来難ひ様に、態と暗示の法を採られたことであらうとも窺ふべきである。方便品に於て舍利弗に對して、法華一部の網格を説かれるに際して、是法は示すべからず

方便品とは法華經の第二の品名なり

言辭の相寂滅せり、諸余の衆生の類能く得解あることなし、諸の菩薩衆の信力堅固なる者をば除くと告げられたは、此邊の意味を物語られたのであらう。

すべての根底は覆された。

前巻でお話した、日月燈明佛の八王子と大通智勝佛の十六王子との關係の如き、周易を應用して一往のお話をしたが、而して夫が大無量壽經の十四佛國の往生者と結び付て居る如きは、最も大なる暗示であつて、既に此の一事に於て、法華經に對する從來の解釋のすべての根底は、覆されたものといふて然るべきである。前巻に於て本多日生、清水龍山二師の法華經講要の數節を抄録して置いたが、彼の講要に切言せられたる條件の如き、八王子と十六王子と十四佛國の關係の上から見ると、誠に以て力抜けのしたことで、惡夢に襲はれた夢物語のようなものであると評する外はない。併し私とても暗示を悉く摘發することは、或は此の講録の上にては、其意を盡すことが出來ないことを虞れて、避けた場合が多々あるから、夫は豫めお斷りしておく、現に私が摘發しない所に、幽玄なる意味の存することは多々である。

先づ法師品について。

先づ法華經の樞軸として前に列擧した十四品に付てお話するとして、其最初に

妙光は文殊菩薩のことである。

ある法師品に付て彌陀法との關係を調べて見やう。此の法師品は卷末に其全文が掲載されてあるから、先づ之を熟讀して而して後此の講録を見られることにしたい。此法師品は樞軸中に於けるの要品で、佛法僧の三寶では僧の事を説かれたのである、即ち藥王菩薩を對手とされて居る。經文に見へて居る如く、劈頭に、爾の時世尊藥王菩薩に因せて、八萬の居士に告げたまはくとある、この藥王菩薩に因せてとある、因せての字が字眼である、この文字がこの廣い法華經に二回使つてある。其一回は序品に於て日月燈明佛が法華經を説かれる時に、妙光に因せて説かれてある。(この事は第二卷一七三頁説法の儀様以下に詳なり)夫れとこゝに藥王菩薩に因せて説かれると、二回使つてあるのみである。即ち僧の行事に付ての體得者は藥王菩薩であり、法華の法門の體得者は妙光の文殊菩薩である。但し僧の體得者は自然法華法門の體得者であり、法華法門の體得者は自然僧寶の體得者であるは無論のことである。

法華一經の目的。

早速こゝで注意すべきは、既に經題に於て教菩薩法といへる如く、法華一經の目的は菩薩即ち僧を教成するにある。惟り此經の目的といふのみならず、釋迦出世

の目的がこゝにあるのである、其菩薩即ち僧は、如何なる内含のあるのを以て理想とせらるゝかといへば、即ち藥王菩薩である。藥王菩薩が釋迦理想の頂天に達した菩薩である。其藥王菩薩に因依し、藥王菩薩を標本として、八萬の居士に告げらるゝのが此の法師品である。そして見ると、既に此の劈頭に於て、此品に法華一經の第一義を顯示するの佛意が表現されて居ると見ねばならぬ。されば前に法華の中心として指摘した十四品も、此の法師品を淵源としてそれからそれへと引出されてある、此ことは次に寶塔品のお話をするとき自からお分りになるであらう。

法華經一貫の大精神。

それで此の法師品は、法華八軸廿八品中の要品であつて、此の法華一經の代表的のものである。古來方便品、安樂行品、壽量品及普門品を法華の四要品と稱して、この法師品あるを忘れて居るが、粗漏千萬のことで恐懼に堪へない。而して此の要品であり代表的であるの法師品が、藥王菩薩に因せて説かれてあつて、そして最後の藥王菩薩本事品に於て、

宿王華若し人あつて是の藥王菩薩本事品を聞かん者は、亦無量無邊の功德を得

ん。若し女人あつて、是の藥王菩薩本事品を聞いて能く受持せん者は、是の女身を盡くして後に復受けし。若し如來の滅後後の五百歳の中に、若し女人あつて是の經典を聞いて説の如く修行せば、此に於て命終して、即ち安樂世界の阿彌陀佛の大菩薩衆の圍繞せる住處に往いて、蓮華の中の寶座の上に生ぜん。

と宣言せられたのは、首尾相照應して、法華經を一貫するの大精神が顯示されてあることに氣付かねばならぬ。經文に「女人」とあるが、之は女人すら往生す、況んや男子に於ておやと解すべきである。斯く申すと、一貫するの大精神とは何事か、自分勝手を取極めであると批難せらるゝ方もあらうが、之は決してそうでない、此品は殊に大切な所であるから稍綿密にお話しよう。

普賢勸發品の四法。

此話の發端は、前に安心立命談の所で述べた、普賢菩薩との問答に於ける四法であるので、事が重複するが夫に構はず先づ普賢勸發品に於ける經文を掲げよふ、

佛告普賢菩薩若善男子善女人成就四法於如來滅後當得是法

華經

一者爲諸佛護念二者植衆德本三者入正定聚四者發救一切衆生之心

善男子善女人如是成就四法於如來滅後必得是經

と説かれてある。されば此の四法は之を押擯れば法華の全體となるので、これを一法づゝ引放して、之が法華經の第一義とはいふことは出来兼ねるとしても、此四法の切組まれた所に、法華の第一義があるとせねばならぬのである。惟り法華の第一義といふでない、古今を通じ東西に亘り、苟も向上的果報を贏得せんとするには、此の四法を鹽梅よく切組みたる所に、其第一義が自生するので、仰げば彌高く鑽れば彌堅き、金言であるといふべきであらう。

前の安心立命談の所で、此の四法は各自の職分を盡すのであると述べたが、それでは周圍の事情に由り、或は無智無産の輩の如き、職分を盡すことの出来ない者は、佛の救の手から洩れるのであるかといふ、疑が起るであらうが、こゝに到ると卻て無智無産こそは好位置に立つので、キリストの謂ゆる「心の貧乏者は福なり、天國は即ち其人のものなればなり。哀なるものは福なり、其人は安慰を得なければなり。」はよくこゝの消息を道破した文字で

あると思ふ。即ち阿彌陀佛が、殆んど無條件に四十八願の第十八願に於て「十方衆生、心に至し信樂して、乃ち十念に至らん、若し生れずば正覺を取らず」と誓はれた所以である。併し足腰の立つものであつて、唯我儘に阿彌陀佛を頼む如きでは、信心一念の支持の出来よう苦がない。こゝに於て各々職分を盡しつゝ、心を安んじて信心一念を支持せねばならぬこととなる。信心一念は四法に由つて支持せられ、又四法の努力に由つて、其處に信心一念の要諦が叩き出されるともいへる。前言に足らざる所があつたように思ふから、こゝに一言補足しておく。

四法の細説

所で普賢菩薩の問に對して答へられた四法なるものは、廣くいへば法華經廿八品に説かれた法門が、此の四法を出でないと云ふべきであらうが、之を要約して説かれたは即ち法師品である。法師品は末尾に抄録した經文に就て見らるれば分る譯であるが、更に重複を厭はずこゝに四法を説かれた部分丈けを原文の儘に抄出する。(末尾經文四一頁一行以下)

藥王當知如來滅後其能書持讀誦供養爲他人說者如來則爲以衣覆之又爲他方現在諸佛之所護念是人有大信力及志願力諸

善根力當知是人與如來共宿則爲如來手摩其頭

以上が「一」には諸佛に護念せらるるに當る。衣を以て之を覆はんといひ、諸佛の護念する所と爲るといふ如きは其れ。

藥王在在處處若說若讀若誦若書若經卷所住之處皆應起七寶塔極令高廣嚴飾不須復安舍利所以者何此中已有如來全身此塔應以一切華香瓔珞繒蓋幢幡伎樂歌頌供養恭敬尊重讚歎若有人得見此塔禮拜供養當知是等皆近阿耨多羅三藐三菩提

以上が「二」には衆の德木を植ゆに當る。七寶の塔を起つべしといひ、供養恭敬すべしといふ如きは其れ

藥王多有人在家出家行菩薩道若不能得見聞讀誦書持供養是法華經者當知是人未善行菩薩道若有得聞是經典者乃能善行菩薩之道

其有衆生求佛道者若見若聞是法華經聞已信解受持者當知是

人得近阿耨多羅三藐三菩提

藥王譬如有人渴乏須水於彼高原穿鑿求之猶見乾土知水尙遠施功不已轉見濕土遂漸至泥其心決定知水必近

菩薩亦復如是若未聞未解未能修習是法華經當知是人去阿耨多羅三藐三菩提尙遠若得聞解思惟修習必知得近阿耨多羅三藐三菩提

所以者何一切菩薩阿耨多羅三藐三菩提皆屬此經此經開方便門示眞實相是法華經藏深固幽遠無人能到今佛教化成就菩薩而爲開示

藥王若有菩薩聞是法華經驚疑怖畏當知是爲新發意菩薩若聲聞人聞是經驚疑怖畏當知是爲增上慢者

以上が「三」には正定聚に入りに當る。能く菩薩の道を行するなりといひ、阿耨多羅三藐三菩提

龜三菩提に近くことを得たりといひ、其心決定して水必ず近しと知らんが如しといふ如きは其れ

藥王若有善男子善女人如來滅後欲爲四衆說是法華經者云何應說是善男子善女人入如來室著如來衣坐如來座爾乃應爲四衆廣說斯經

如來室者一切衆生中大慈悲心是如來衣者柔和忍辱心是如來座者一切法空是安住是中然後以不懈怠心爲諸菩薩及四衆廣說是法華經

以上が四には一切衆生を救ふの心を發すに當る。大慈悲心といひ、柔和忍辱の心といひ、一切法空といふ如きは其れ

此の經文は殆んど説明するの必要を認めない、佛經に素養なき方と雖も、熟讀せられたならば、如何にも四法を説かれたものであることに、合點せらるゝであらう。

法師品の詳

此の法師品に於て、四法を説かれた前後には、如何なる事が説かれてあるか、此亦

末尾に掲げてある經文を讀まれたなら直に分かることではあるが、こゝに其要を摘録すれば

第一に 法華經の隨喜者即ち奉信者と、それが成佛得道の事。

次に 法華經を讀み、若くは法華經に由つて説法する僧と、それが成佛得道のこと、及び其僧と奉信者との關係。

次に 僧と如來との關係、即ち僧は如來の所遣であり、如來の代理人であること、従つて奉信者たるものは、僧を大切に取扱ふべきを反覆せらる。

次に 法華經の優秀なる、難信難解なり諸佛の秘藏なり諸佛の所護なりと結論されて、而して上來述べ來つた四法の文に移ることゝなつて居る。

次に 其四法を説かれての後は、説法者たる僧を保護撫育せらるゝことに付て、恰も家居の慈母が遠く他郷にあるの愛兒を念ふが如き、憐しみを以てせらるゝの熱情が、溢るゝばかりに注がれて、此品の終りとなつて居る。

此始あり終りある、誠に法華經一部の要を盡して剩す所なく、拜誦する度毎に阿耨多羅三藐三菩提に近づくかの思ひあるは、其所以のあることゝおもふ。

普賢勸發品  
と照應

是の如きで、普賢菩薩に答へられた四法なるものが、法師品に順序正しく説かれて、普賢勸發品と照應して居るのである。照應するとか、當嵌まるとかいふことは、兎角牽強附會になり勝のものであるが、私が第一卷より能く照應と當嵌を談ずるのは、すべて必ず薄弱なる空想を弄して得たものではない、熟讀數回尙不審の點あらば、江畔書屋に宛て、質疑して下されたい。

大精神の伏  
在

「善男子善女人、是の如く四法を成就せば、如來滅後に於て必ず是經を得ん」と説かれた四法なるものが、此の法師品に説かれ、而してそれが摸索的に散漫にではない、整然と順序立つて説かれてあるの邊から窺ふて、此には極めて重大な暗示が含まれたもので、此の法師品が法華經中尤も有力なる代表的のものであり、法華一經の結晶であるの佛意が明々と見へて居るとせねばならぬ。而して其終極の目的は、法華經を擧げて藥王菩薩本事品に持込んで、法華經の奉信者が悉く彌陀佛國に往生を遂ぐべきの、一貫の大精神の伏在する處と窺はねばならぬ所である。

此所の經緯

尙この經緯を委しくいへば、法師品は藥王菩薩に因依して八萬の大衆に告られるのである、本當の聞き手は八萬の大衆である、藥王菩薩はモデルにされたのであ

る、標本にされたのである、或は又法華經僧寶の體得者として、理想的に書き出された化菩薩である。されば教菩薩法たる法華經であつて、藥王菩薩が右の如きとすれば、藥王菩薩は法華の體得者である、即ち法華經のモデル法華經の標本、要之、法華經である。されば藥王菩薩本事品を聞いて、彌陀の淨土へ往生を遂ぐと説かれたるは、取りも直さず法華經を聞いて、如説に修行したものは、彌陀の淨土へ往生を遂ぐと説かれたると同様であると意を得べきであらう。

代表と歸結

法師品が法華經の代表品たると同時に、藥王菩薩本事品は法華一經の歸結となるのである。重ね重ね五月繩いふが、法華經の奉信者法華經の如説修行者が往生する淨土は、余他の淨土ではない、阿彌陀佛の淨土であるのである。

優勝特説

されば法華經が釋迦一代の諸經に優れたことは、此の法師品と藥王菩薩本事品とに説かれてある、他の廿六品には絶對に説かれてないといふのではない、必要に應じて丈けは説いてあるが、此の二品の如く法華經其物に付て特説してはない。先づ法師品に於ては

藥王今汝に告ぐ、我が所説の諸經あり、而して此の經の中に於て、法華最も第一な

り。

と標榜されて、其委細に亘らずしていきなり文章が截つてあるが、此の次ぎが藥王菩薩本事品に出されて、自ら之と聯絡が取つてある、藥王菩薩本事品には

譬へば一切の川流江河の諸水の中に、海爲れ第一なるが如く、此の法華經も亦復是の如し。諸の如來の所説の經の中に於て最も爲れ深大なり。又土山、黒山、小鐵圍山、大鐵圍山及び十寶山の衆山の中に、須彌山爲れ第一なるが如く、此の法華經も亦復是の如し。諸經の中に於て最も其の上なり。又衆星の中に、月天子最も是れ第一なるが如く、此の法華經も亦復是の如し。千萬億種の諸の經法の中に於て最も爲れ照明なり。又日天子の能く諸の闇を除くが如く、此の經も亦復是の如し。能く一切不善の闇を破す。又諸の小王の中に、轉輪聖王最も爲れ第一なるが如く、此の經も亦復是の如し。衆經の中に於て最も爲れ其の尊なり。又帝釋の三十三天の中に於て王たるが如く、此の經も亦復是の如し。諸經の中の王なり。又大梵天王の一切衆生の父なるが如く、此の經も亦復是の如し。一切の賢聖、學無學及び菩薩の心を發す者の父なり。

とある、此の以下まだ續いて數倍の讃揚がある、詳しくは前卷法華經文三二頁四行以下を見られよ、單に讃揚であるといひながら、讀むの價值ある處である。此等のことも矢張法師品引いては藥王菩薩本事品が、法華經の代表品たることを顯はすの一の暗示であつて、若し古來いふ如く方便、安樂行、壽量、普門の四品が法華の要品であるならば、其四品の内に於てこそ、法華經の優勝を高調せらるべき筈であるといふことが出来るであらう。

釋迦の努力  
は法華經の  
流通にあり

斯く述べ來ると、三寶中佛寶若くは法寶を説かれたるものこそ、尤も敬崇すべきものであり、且つ一經の代表的のものでなければならぬ、夫に僧寶を説かれた法師品を以て法華一經の結晶である代表であるとは、如何なる理由に基くかと、難詰せられる方もあらうが、之は議論をすれば際限のないことで、見方に由つて種々に見られるのである。今釋尊が法師品を以て法華一經の代表的要品となし、藥王菩薩を以て法華一經の立役者中の立役者とせられたのは、法華一經を通じて釋尊の努力は、法華經の流通即ち永久的普及にあるので、法華經の永久的普及如何が、一切萬事の禍福の繫るところ、即ち國の盛衰も、民衆の幸咎も、現在に於て、未來に於て、地獄



の沙汰も、極樂の交渉も、約り法華經的精神の消長如何にあるのであると、こゝを押へて居らるゝので、その自然の歸結は、此の大法の宣傳を擔任する、法師即ち僧侶ほど大切なるものはない、僧寶あつての法寶であるといふことになるのである。一面からいへば、法は佛に由つて作爲せられて、始めてあるの法ではない、阿彌陀佛の大慈大悲は、宇宙法界に無縁法爾として、無始無終遍在儼存ましますので、僧寶正念の最高努力の處に於ては、強て求めざるも、自ら妙法實相の契會を來すのである、努力の在る處は法は必ず之に伴ふといふが、法華經及大無量壽經の綱格となつて居ると、私は窺ふのである。釋迦が菩提樹下に結跏趺坐して、博厚高明悠久無疆の或物に虚徹靈通されたのも、約りは釋迦正念の最高努力の裏に、自然に叩き出されたのである。彼の無量義經には、是の經(法)は本と諸佛の室宅の中より來り去て一切衆生の發菩提心に至り、諸の菩薩所行の處に住すと説かれてあるは、誠に意義の深く味ふべきものがあると思ふ。

其實は藥王如來。

されば藥王菩薩の如きも、身是因位の菩薩に在るも、其實は藥王如來であると思ふ。ねばならぬ、惟り藥王菩薩が然るのみならず、今日現在の僧侶諸君と雖も、法華經的

僧寶に重きが掛いてある。

精神を以て、彌陀法の廣布に努力せらるゝ方は、一步を進むれば、直に佛である、如來であるといふべきである。法華一經到る處其意義に充ちて居るが、分けて此の法師品に於て、法華經の受持者が、阿耨多羅三藐三菩提に近きことを切言されてある。要するに、斯の如き次第からして、法華經では佛寶よりも法寶よりも僧寶即ち法華經の受持者に重きが掛いてあると窺ふべきである。従つて藥王菩薩が最も實力あるものとなり、法師品が法華經正宗の劈頭に置かれて、大法雨の淵源を爲すこととなつて居るのである。

次品に移る

法師品ではまだお話ししたいことはいくらもあるが、此位の所で次品に移ることにする、兎も角要品であるから、僧侶の方は毎に此品を奉讀されんことを希望する。

#### 四 出世本懷 其十 (寶塔品)

寶塔品。

寶塔品のお話であるが、法華經が終始一貫彌陀法なるを證據立てるに付て有力なる一品であるので、此亦可なり詳しくお話をせねばならぬ。此品も末尾に全文

多寶塔は法華經に擬らへたもの。

が掲載してあるに依つて、可成は其を熟讀されて後に、此の講録を讀まれたい。是亦古來全く眞意の所在を見失ふて、經文の裏面の意義を取ることが出来なかつたのである。裏面の意義といふは、この多寶塔は法華經に擬らへたもので、在世及び滅後の奉信者が、法華經の深意なる義趣の所在を窺はんとするには、如何なる態度を以てすべきかを、寓言的に暗示されたのである。尤も惟り此事のみではない、夫と同時に多寶如來を種々の方面に働かせて、佛意の所在が暗示されてあるので、古來の説を悉く非認する譯ではない。併し各方面の意義があるとしても、其第一義は多寶塔を法華經に擬らへ、多寶如來を法華經の神髓に見立てたものであることは、疑なきものとせねばならぬ。

寶塔の莊嚴

であるから、説かれてある寶塔の莊嚴を吟味して見ると、是れが法華經であるといふことに、氣付くことが出来る。此品の初めに、寶塔の莊嚴が斯く説かれてある。爾の時に、佛前に七寶の塔あり、高さ五百由旬、縱廣二百五十由旬なり、地より涌出して空中に住、種々の寶物をもつて之を莊校せり、五千の欄楯あつて、龕室千萬なり、無數の幢幡以て嚴飾と爲し、寶の瓔珞を垂れ、寶鈴萬億にして、其上に懸た

り、四面に皆な多摩羅跋耨檀の香を出して世界に充徧せり、其諸の幡蓋は金銀瑠璃、磔磔、瑪瑙、真珠、玫瑰七寶を以て合成せり、高く四天王宮に至る。

此の經文を、多寶塔が法華經であるとして見ると、五千の欄楯とあるは、經卷の欄郭、罰線に、龕室千萬なりとあるは、經卷幾萬の文字に擬したのである。無數の幢幡以て嚴飾と爲しとは、經義理趣の優勝なるを、寶の瓔珞を垂れ、寶鈴萬億にして、其上に懸けたりとは、經義の終始を貫穿したるは、瓔珞の線絲に依て穿かれたる如く、經義の聲音は萬億の寶鈴の鳴るが如きに、擬したるものであらう。四面皆な多摩羅跋耨檀の香を出し、世界に充徧せりとは、法華殊勝の法香世界に充徧して、衆生の心垢を薰淨するに喩へ。其諸の幡蓋は、金、銀、瑠璃、磔磔、瑪瑙、真珠、玫瑰七寶を以て合成せりとは、法華經所詮の勝法義趣は、聞くものをして愛慕渴仰せしむるに足るを示し、高く四天王宮に至るとは、斯經の諸經に卓絶したるを形容したるものと窺ふべきであつて、懸に咀嚼せられたならば、成程と首肯せらるゝ所があるであらう。

尤も此の多寶塔が、法華經に擬せられたものであるといふの導きは、今の寶塔の莊嚴の割出に由つて初めて得たのではない、此の源は前の法師品にあるので、法師

此の伏線は法師品あり

品の首に、此の經卷に於て敬ひ視ること佛の如くにしての文字がある、こゝが伏線の第一で、次には、所以は何ん此の中には已に如來の全身有ます（末尾經文四一頁六行）の文字である。此の事は、こゝで悉く腹入のするよふには説明し難いが、兎も角先づ寶塔涌出の概要を寶塔品に由つて搔摘んでお話をしよう、さすれば自然其理由も分ることになるであらう。

・寶塔涌出の  
一伍一什。

それは斯ふである前に經文に見へた如き寶塔が現れて、其寶塔の中から大音聲が出て、釋迦が法華經を説かれるを讚歎するといふ不可思議の現象が突發した。其時に大樂説といへる菩薩が出て、寶塔の涌出及び其寶塔の中から讚歎の聲の起つた因由を問はれる。此間に對して釋尊の答がこうである。

爾の時に佛、大樂説菩薩に告げたまはく、此の寶塔の中には如來の全身有ます、乃往過去に東方の無量千萬億阿僧祇の世界に、國を寶淨と名け、彼の中に佛有ます、號を多寶と曰ふ、其佛菩薩道を行ぜし時、大誓願を作し、若し我れ成佛して滅度の後、十方の國土に於て法華經を説く處あらば、我が塔廟是の經を聽かんが爲の故に、其前に涌現して爲に證明と作つて、讀めて善哉と言はん。

三三

三三

彼の佛成道し己て、滅度の時に臨んで、天人大衆の中に於て、諸の比丘に告げ給はく、我が滅度の後、我が全身を供養せんと欲せん者は、一の大塔を起つべし。

其佛神通願力を以て、十方世界の在在處處に、若し法華經を説くあれば、彼の寶塔皆な其前に涌出して、全身塔の中に在まして、讀めて善哉善哉と言ひ給ふ、大樂説今ま多寶如來の塔、法華經を説くを聞き給はんが故に、地より涌出して、讀めて善哉善哉と言ひ給ふ。

（こゝで尤し注意すべきは、全身の二字を連發されてあることである。その初めには「如來の全身有ます」と法師品其儘の五文字が使はれてある）

釋尊から、以上の答を聞かれた大樂説菩薩は、更に多寶如來の佛身が拜見したいと願はれる。

すると釋尊の言はれるには、それはなかなか面倒なことで、それには多寶佛の一の望みがある、其望みといふは、若し我が佛身を人に示したいとならば、孰の佛であれ法華經を説かれる佛の分身が、十方世界に散在して居らるゝであらうから、夫を皆な呼び集めた上で、我が寶塔を開かれないといふのである。是非に多寶

の佛身が見たいとならば、先づ我が分身を集めることにしよう。そこで釋尊は白毫の光を放ちて、東方五百萬億那由他恒河沙の國土にある、分身の諸佛を照される。夫から夫と四方上下を照されると、無量千萬億の菩薩に圍繞されたる、無量千萬億の諸佛は、其意を領して此娑婆へ集まられることとなる。所で娑婆世界では、此の無量無數の佛菩薩を集めねばならぬので、三たび土田を變じ、即ち三回に亘つて大掃除が行はれ、目出度滞りなく分身の諸佛が集まられたので、釋尊は起つて寶塔を開かれる。其模様は斯ふである。

爾の時に、釋迦牟尼佛、所分身の佛の悉く己に來集して、各各に師子の座に坐し給ふを見そなはし、皆な諸佛の寶塔を開かんと與欲し給ふを聞しめして、即ち座より起て、虚空の中に住し給ふ。一切の四衆起立し合掌し、一心に佛を觀たてまつる。是に於て釋迦牟尼佛、右の指を以て、七寶の塔の戸を開き給ふ。大音聲を出すこと、關鑰を却て大城の門を開くが如し。

なかなか莊嚴を極めたことであるのであるが、寶塔涌出のお話は此位に止めておくとして。

寓言の眞意を捜るべく

扱て如上の寶塔涌出の一伍一什の出來事を、一の寓言として其眞意を捜るべく先づ手短にお話すれば、要之此の法華經の神髓を窺ひ見んとするには、散亂の氣を引締め、一切胸裏にわだかまる諸念の塵芥を掃ひ清め、而して能く丹田に凝集したる、大信力を以てすべきを示されたものである。

尙委しく説明すれば

尙委しく説明すれば、分身の諸佛を集めよとは、百千萬と果しなき見思の諸惑の散り亂れたる氣分を、一處に集中すべきの意味を寓したるもの。白毫の光を放たれたるは、一心專注のことを特に暗示されたので、白毫放光のことは、度度あるが、此所では特に白毫の光としてあるに氣を付けねばならぬ。三回に涉りて、土田を變ぜられたるは、心の塵垢を去りて、適も無く莫も無き一切法空に坐するの鄭重を諷したもので、三たび思を致すと旨趣を同じくするの懇誠と意を得べきである。右の指を以て七寶の塔の戸を開き給ふは、信力凝集の形を示されたのである。試みに敬虔の心を持ち、右の指を以て戸扉を押して見られよ、そこに一心專注の態趣は現はるゝであらう。

寶塔の淵源

尙前に抄録した經文に於て、如來の全身有ますの文字、及び全身の二字の連發に

注意されたことであらうが、之に注意されたと同時に、中に於て多寶如來の全身有  
 ます、寶塔の淵源は前の法師品にあることに氣付かれたであらう、然れば法師品に  
 は既に法華經を以て、如來の全身とせられてゐるのであつて此の寶塔及び多寶如  
 來が法華經であるといふことは、法師品に於ける經文の上にも基く處があること  
 ねばならぬので、只だ無暗に飛放れた想念を逞して初めて得たのではない。

注意すべき  
 要節。

其他、此の寶塔が法華經であるといふことを窺ふに付て、一二の注意すべき要節  
 を示せば

其一は此の寶塔品の對手が大樂說菩薩となつて居ること、此の菩薩の名前か  
 ら見てもそうである、寶塔が法華經であり、多寶佛が法華經の神髓であるから、法  
 華の法門を樂說するの、大樂說菩薩が對手となられた次第であるとするべきであ  
 る。前に對告者たる菩薩の名前に由つて、佛意を窺はねばならぬと述べたは、か  
 らる場合を指したのである。

其二は後に至つて經文に左の一節がある、

諸佛を坐せしめんが爲めに、神通力を以て無量の衆を移して、國をして清淨な

らしむ、諸佛各各に寶樹の下に詣り給ふ、清涼の池の蓮華莊嚴せるが如し。其  
 寶樹の下に諸の師子の座に、佛其の上に坐し給うて、光明嚴飾せること、夜の闇  
 の中に大なる炬火を然せるが如し。身より妙香を出して、十方の國に徧し給  
 ふ、衆生薫を蒙つて喜び自ら勝へず、譬へば大風の、小樹の枝を吹くが如し。是  
 の方便を以て、法をして久しく住せしむ。

此一節は集られた分身諸佛に約して、即ち分身諸佛の上から見て、法華經を頌讚  
 されたものである。即ち、清涼の池の蓮華莊嚴せるが如しとは、謂ゆる妙法蓮華  
 經の文義理趣の清淨微妙を頌し、夜の闇の中に大なる炬火を然せるが如しと  
 は、法華經の能く末代の暗黒を照破するの慧燈なるを頌し、譬へば大風の、小樹  
 の枝を吹くが如しとは、法華經の普く小根小機をまで教化し盡すを頌せられた  
 ものである。而して最後に、是の方便を以て法をして久しく住せしむと結ばれ  
 たる二句は、愚見の如き意義あることを、力強く裏書されたものである。

其他指摘すれば、全品に涉つて多寶塔が法華經であるの言趣に溢れて居るので  
 ある、末尾に附したる經の原文を熟讀せられたならば、更に發明せらるゝ所がある

結頌と藥王  
 本事品

であらう。尙是は別廉の義となることであるが此品の最後に至つて、左の如く結願されてゐるは、特に注意すべき所である。

此經は持こと難し、若し暫も持つものは、我れ別ち歡喜す、諸佛も亦然り、是の如きの人は諸佛の歎じ給ふ所なり。是れ則ち勇猛なり、是れ則ち精進なり、是を戒をもち、頭陀を行ずる者と名く、則ち爲れ疾く無上の佛道を得たり、能く來世に於て、此經を讀持せんは、是れ眞の佛子、淳善の地に住するなり、佛滅度の後に能く其義を解かんは、是れ諸の天人世間の眼なり、恐畏の世に於て能く須臾も説んは、一切の天人皆な供養すべし、

これが寶塔品の結願となつて居る、之が注意すべき所であるといふは、この結末一節の偈頌を以て、彼の藥王菩薩本事品に結び付けてあるのである。是れ則ち勇猛なり、是れ則ち精進なりの邊、如何にも惰夫をして起たしむるの痛切なるものがあるが、彼の天台大師が慧思禪師の教に由つて、法華三昧に心を研き、法華經を熟讀しつゝ、二七日を過ぎて、藥王菩薩本事品の

其の中の諸佛同時に讚て言く、善哉善哉善男子、是れ眞の精進なり、是を眞法を以

て如來を供養すと名く。

といへる處に至て、豁然として法華三昧を得られたといふことであるが、此の本事品の至痛至切の文字は、寶塔品のここに基いたものである。此の是の如き人は、諸佛の歎じ給ふ所なり、是れ則ち勇猛なり、是れ則ち精進なり、と最高調に究達したる文字を、法華經中の中心として指摘したる十四品中に於て、最も重大の意義ある、即ち私が法華一經の歸結であると絶叫する、藥王菩薩本事品へ持出して、諸佛同讚の下に、是れ眞の精進なり、是を眞法を以て如來を供養すと名くと切言せられたるは、深き佛意の存する處であると知ねばならぬ。即ち寶塔品は多寶佛を以て法華經の神髓に擬したるものであるとして、其の法華經の精神の宿る所の寶塔品の歸結となつた偈頌の要節を、彌陀淨土の往生を宣言された、法華一經の最要歸結たる、藥王菩薩本事品に於て、熱烈沈痛に再拈せられたは、深き佛意のあるものと恐懼する外はない、前の法師品に法華經の優秀を説かるゝに當つて、法華最も第一なりと標榜しておいて、其委細は藥王菩薩本事品に説かれて、自ら聯絡が取つてあるのと考へ合せて見れば、益々餘音の孺々たるものがあるに氣付かるゝであらう。

多寶佛が認められた法華經

尙ほ寶塔品の意義に付て彌陀法として研究する立場から尤も大切であると思ふ點をお話すれば、言ふまでもなく多寶如來は此品に於て初めて涌出されて、下の囑累品に至つて寶塔の扉を閉ぢられたのであるが、囑累品最終の經文は斯ふである。

爾の時釋迦牟尼佛十方より來り給へる諸の分身の佛をして、各本土に還らしめんとして是の言を作し給はく、諸佛各々所安に隨ひ給へ、多寶佛塔還つて故の如くし給ふ可し。

此の次第から眺めて論決すると、法華一經に於ける諸佛秘要の藏なるものは、寶塔品から起つて提婆達多品勸持品等の十品を過ぎ、囑累品に至る十二品で盡きて居る、即ち多寶佛が認めて法華經とせられたものは、私が法華の中心であると指摘したる十四品の中、前後を挟む法師、藥王二品を除きたる、他の十二品であるのであるとせねばならぬ。何故ならば、多寶佛の本願は、何れの國に於ても、佛が出世して法華經を説かれる場合には、寶塔に乗じて其場處に往詣して、法華經の説法が聞きたい、そして法華經の所説が眞實である、萬々間違がないことに向つて證明が與へた

NO.

沈黙無言の説法ならざるか。

い、といふにあつたからなのである。此の法華の中心たる十四品と多寶如來の關係は、彌陀法として法華經を研究する上に於て、忽緒に付することの出来ない要關である、輕卒に看過してはならない所であるから、私の筆の至り及ばぬ所は諸君のお考を以て補足されて、御精讀を請ひたいのである。

國土の掃淨及び分身集中のこと等は、前に述べた如く心識の專注を意味したのであると爲し、且つ寶塔は法華經であり、多寶佛は法華の神髓でありとすれば、此の寶塔の扉が開かれ、多寶佛の佛身が空中に懸り、釋尊亦多寶佛と膝を並べ、蓮臺を分ちて其塔内に坐せられ、河沙の參聽者亦一切の雜念を去り、虚空の中に安住して説法を謹聽するの、此高遠幽深を極めたる空前絶後の大説法は、或は沈黙無言の説法であつたかとも推想さるゝのであるが、少くも我らが今日に於て法華經を窺はんとし、殊に寶塔品以下囑累品に至る、諸佛秘藏の極説を搜らんとするには、一心專注恰かも釋尊が寶塔を開かんとして、右指を以て塔戸を押されたが如くにして、初めて法華秘關の大城門は開けるものと心得ねばならぬ。

されば此の寶塔品以下囑累品に至る十二品に於ては、阿彌陀佛の事に付ては、一

要部の文字彌陀法ならざるばなし

辭の之に及ぶものはないが、眞法を以て如來を供養するの意氣を持ち、我が心血を傾注して見ると、十二品に於ける要部要部の文字、悉く彌陀法ならざるはなきことなるのである。而して尤も注意すべきは、寶塔品以下囑累品に至る、多寶佛身示現の中に於ける十二品を包むに、法師品と藥王菩薩本事品とを以てせられてあるの一事である。而して單に之が前後を擁して居るといふ計りでない、其生起本末の始終する處が、法師藥王二品にあることを知らねばならぬ。寶塔涌出の策源地が、法師品の「此中には已に如來の全身有ます」の處にあることは、前に詳しくお話しした如くであるが、終に至り囑累品に次々に藥王菩薩本事品を以てし、こゝでは寶塔の扉は閉ぢ、多寶の佛身は隠れさせられたと反對に、諸佛秘要の藏は僅に欄を排して、彌陀佛國の往生を顯說せられ、釋迦出世の本懐こゝに將に盡きなんとして、口を極めて受持者の功德を稱揚せられたが、既に扉を閉ぢたる多寶佛は、法華一經の神體たる即ち法華經である所の多寶佛は、釋迦の彌陀佛國の顯示に滿腔の共鳴を浴せられ、善哉善哉宿王華汝、不可思議の功德を成就して、乃ち能く釋迦牟尼佛に此の如きの事を問ひ奉りて、無量の一切衆生を利益すと證明し、讚言せられたる

は、偉大微妙を究めたる牟尼大聖善巧の方便、何とも筆にも言ひ盡されぬ、謂ゆる不可思議の功德なるに、合點せられねばならぬ所である、茲に至つて法華一經一貫の大精神が何處に在つたかは、殆んど問題でなからうと思ふのである、私が多寶佛身示現中の十二品と、夫に前後の二品を加へて、法師品以下藥王菩薩本事品に至る十四品を以て、法華一經の正宗要品であるといふ所以も、こゝにあるのである、(妙音品に於ても、多寶の讚言があるが、これは又別意の深きものがある、此事は藥王菩薩本事品に至つた時にお話する。)

#### 四 出世本懷 其十一 (提婆達多品)

提婆達多品

次ぎは提婆達多品であるが、此亦輕輕に看過することの出来ない所である。のみならず此經中、尤も意味深く織爲されたる大切な要品で、古來一向に其玄扁を發くことなしに過ぎ去たといふことは、言語道斷といふの外はない。

寶塔品に次に提婆達多品を以てしたのは、品の名前からいふも、木に竹を接いだやうであり、又經に顯された文義から見ても、強て此品をここに置かねばならぬ程の

在るべき筈の所に在る



必要もなさそうであるが、寧ろ此次の勸持品こそ、寶塔品に次がせたいやうにも思はるゝ程であるが、天台の文句を見ると、此品をここに置いたに付ては、滿法師が何うしたの、南嶽禪師が斯うしたのと、傳説が載せられてあるが、此等の傳説を受け續ぐ人と共に、約りは誰もが經の眞意が分つて居らぬから、種種の傳説が編出されたものであらう。此品がここに在るは、あるべき筈の所にあるので、一點の疑問もない、前の寶塔品で縷々お話しした如く、寶塔品なるものは法華經を寓言したもので即ち法華經である。であるから、此の提婆品では、吾過去無量劫の中に於て、法華經を求しに懈倦あることなし、と法華經の文字を以て承けてある。

且つ一段入込で考へて見ると、僧寶の標本たる藥王菩薩の精進に由つて、法華經が打出されたから、此に次では、法寶の體得者たる文殊菩薩の智慧に由つて、法華經の法が顯示されねばならぬ順序である。そこで釋尊が先づ無問自說的に、法の所在及び法の大用を説かれることゝなつたが此の品の前半である。すると法寶のことは自分責任の範圍であると、暫時龍宮に姿を隠して居られた文殊菩薩が、再び千葉の蓮華に坐して乗込まれるといふ段取になるので、寶塔品に次々に此品を以

精進に次ぐ  
に智慧。

てしたのは、至極の好順序を爲して居るのである。尤も法華經の品の排列方は、序品より最終に至るまで、鈎鏤的に出來て居るので、三段に分れて居るとか二段に分れて居るとかといふて、重箱へ物を詰めたような區分は、出來ないことになつて居るから、其含みで見に行かねばならぬ。前十四品は迹門で、後十四品は本門であるといふ如き、大錠で割たよふな科段の切方は、品の排列が鈎鏤狀に出來て居ることに氣付かない人のいふことで、結局無理なる科段の切方と評する外はない。

拾薪汲水。

この提婆品は前後二段に分れて居る。前段が釋尊の昔話、後段が文殊の化導に由る八歳の龍女成佛のことである。前段の釋尊の昔話の大要は、釋尊が無量劫の過去に於て國王であつた時に、法華經が聞きたいと云ふので、國中に觸れを出して、鐘太鼓で法華經の法門を心得たものを求められた。折柄其國人の壽命は無量であつて、死の畏はなかつた、何一つ不足はなかつたのであるが、夫にも拘らず、此の法門を心得たものが居たならば、其人の爲めには薪を拾ひ水を汲むをも、厭ふまいといふ決心を以てせられたのであつた。(提婆品の此物語は、我國中古の文學を賑はしたもので、彼の行基菩薩の「法華經をわがえしことは薪こり菜つみ水くみつかへて

ぞえしといへる詠歌と相待て、謠曲の如きにまで好んで用ひられた故事である。所が、我こそ法華經を心得て居る者であると名乗り出たるは、阿私仙といへる仙人であつたが、釋尊の國王は一身を犠牲とし、専ら一切衆生救済の念に駆られ、仙の說法に依り修行功を積み、遂に成佛を得られた。

奇妙に搦んだ  
奇縁である

こゝで意外なるは、其阿私仙なるものは、提婆達多の前身であつたことである。經文には

佛、諸の比丘に告げ給はく、爾時の王とは我身是なり、時に仙人とは今の提婆達多是なり。提婆達多善知識に由るが故に、我をして六波羅密、慈悲喜捨、三十二相、八十種好、紫磨金色、十力、四無所畏、四攝法、十八不共、神通道力を具足せしめたり。等正覺を成して、廣く衆生を度すること、皆な提婆達多善知識に因るが故なり。と説かれてある。提婆達多は世の俗諺にも、釋迦にも、提婆と言はれてある如く、釋迦とは從弟の續合であり、且つ初の程は釋迦の弟子となつて、弟子中でも比肩するものゝない程の大善知識であつたに拘はらず、後には釋迦唯一の讎敵となつて、おらん限りの手段を盡して、釋迦を迫害したもので、遂には生きながら地獄へ落ちた

四六

提婆成佛の  
懸記

といふ傳説が残て居るの始末である。其の讎敵の提婆の前身が、釋迦成佛の恩師であるといふ、妙に搦んだ奇縁である。

のみならず、更に進んで、釋尊はこゝに提婆成佛の懸記即ち豫言をされてある。後に提婆は天王如來となつて、廣く衆生の爲めに法華經を説き、無量の衆生を濟度し、剩さへ涅槃の後には、全身の舍利に七寶の塔を建て、其塔を禮拜供養するものあれば、悉く成佛の道に入るの功德を残したものであると説かれてある。委しくは末尾經文二〇頁一〇行以下を見らるべし。

寓言の文字

扱以上の所で、此亦一の寓言的暗示である。私がこゝに寓言といふ、前の寶塔品でも度度寓言といふたが、之は講説の便利の上から、寓言の文字を使ふので、其事實を非認する意味ではない。佛の神通不思議力は、我々の分際で校計すべきものではないから、多寶塔の出現も亦此の提婆關係の事實もあつた事であらう。併し既に其事實の有無を問題にすることから、聖典を窺ふものとしては、至極未熟なる考とせねばならぬ。そこで私は、私の知見の範圍に於て、佛の真意即ち經文の裏面に隠されてある、玄扃を叩くに便利の爲めに、寓言の文字を用ひ、之を寓言として講

説するのであるから、その意味を履き違へないようにされたい。輕輕しく寓言の文字を用ゆるの罪は、容赦されたいのである。

提婆品は法華經の全體である。

是が寓言であるといふは、此の提婆達多品が前の寶塔品と同じく、法華經であるのである。前の寶塔品は、寶塔を法華經として、そして法華經の神髓に見立てたる多寶佛身を見んとするには、極度の一心專注を以てすべきを教へられたのであるが、此の提婆品は、法華經を求むる人の身業を教へ、且つ法華微妙法の所在を指摘されたのである。而して夫が直に法華經全體であるとして、法華經は提婆達多品である提婆達多品は法華經であると見るのである。

妙法要諦は罪惡の裏に潛在す。

即ち法華微妙の法、法華實相の根本所在は、紫磨金色の佛身中にあるのでない、金殿玉樓の庭にあるのでない、斯の如き所に妙法要諦を搜り求めんとするは、砂漠に魚を網せんとするに似たるものである。妙法要諦は、提婆五逆の罪惡の裏に潛在し、顰蹙厭惡の巷に搜り求むべきを示されたのである。夫と同時に百折不撓身、國王の貴さを以て、尙且つ謂ゆる千歳拾薪汲水の勞をも辭せざる程の、勇猛を以てせざるべからざるを示されたのである。(尤も是は此品の立場から立言したので、

廣き意味に於ける諸法實相は諸佛の上にも將た鬼畜の身にも、遍在せざるなきは無論のことである)

宇宙の實相諸法の幾微

這般の經緯は、千萬億の諸佛に供養し、諸の徳本を植へた人、寧ろ實から謂へば、惡戰苦闘百鍊千磨を重ねた人であつて初めて破顔し得らるゝので、兎も角宇宙の實相、諸法の幾微を道破したるの、大教訓であると窺はねばならぬ。

百鍊千磨。

されば布施を以て奮闘し、持戒を以て奮闘し、忍辱を以て奮闘し、精進を以て奮闘し、禪定を以て奮闘し、智慧を以て奮闘し、百鍊千磨その罪惡厭惡、提婆五逆の裏から、法華の妙法を體得した所に、六波羅密、慈悲喜捨、三十二相、八十種好、紫磨金色、十力、四無所畏、四攝法、十八不共、神通道力は得らるゝので、如何に阿彌陀佛の慈悲でも、金殿玉樓に安居し、煖衣飽食、お珠數を爪繰るのみで、之を贏ち得らるゝ譯のものではないのである。此等の委曲をお話すれば、際限のないことであるが、惟り是は法華經の要諦といふ計りではない、政事家も實業家も、此の要諦の心得がない様では、決して成功を齎すことは出来ないものとせねばならぬ。

法華經の全體

要之上來申述べた所に由つて能くお考になつたなら、妙法の所在と、妙法を求むる

の身業とが、此の提婆品に説かれてあること、尙深く廣く謂へば、諸法の幾微即ち宇宙の實相に觸れたものが、説かれてあることに氣付かれて、それが直に法華經其物の全體であるといふことに合點せらるゝ所があるであらう。

全身の舍利に七寶の塔

此の提婆品が法華經であるといふことは、彌陀法關係の上に極めて必要の事件であるから、尙一二頁を費すを容されたい。此品が直に法華經の全體であるといふの暗示は

時に天王佛般涅槃の後、正法世に住すること二十中劫、全身の舍利に七寶の塔を起て、高さ六十由旬、縱廣四十由旬ならん(末尾經文二一頁四行)

の經文にあるのである。前の多寶佛が法華經であるから、多寶佛全身の舍利に七寶の塔を起てたのであると同様に、此の提婆達多の天王佛も法華經であるから、全身の舍利に七寶の塔を起てたのである。多寶佛と同じ次第となつて居るのが、彼れも法華經なれば、此も法華經であるからである。且つこゝに秘中の秘ともいふべきは、高さ六十由旬、縱廣四十由旬の文字である、此の縱廣四十由旬とあるは、縱が四十に廣が四十と見て、八十由旬となるのである。尤も四十由旬づゝが四方にな



るから、四四の百六十由旬であるといふが本當のやうであるが、孔子も説卦傳に、地を兩として數を倚つといはれてある如く、四角のものは廣さの二を一と見縱の二を一と見て、即ち四方を兩のものとして數を倚てるのが、天理(易理)の數を計へる通則となつて居る、そこで縱廣四十由旬は八十由旬と見ねばならぬ、而して其六十由旬と八十由旬とを之を掛算すると、六八四十八となる、此の六八四十八の數は、彌陀四十八願の暗示であると窺はねばならぬ、即ちこゝでは法華經が彌陀法なるを暗示されたものである。尤も斯く説明した處では、其第一義ではない、其根本は五十の數から出るのである、此の法華經において、五百とか五十とか、乃至は五百萬億とか、五の數が澤山遣はれてゐるのは、右様の關係で、深き意義の寓せられた所であるが、此等のことは大無量壽經に於て、五十三佛の下で委しく述べねばならぬこと、なるのであるから、今は省略して分り易く、四十八願として結び著けて置くのであるから、其舍を以て見られたい。

尙注意すべきは、天王佛の全身の舍利の七寶の塔を禮拜した利益と、天王佛の説法を聞きたる利益と寸分違はぬ同じ利益が擧げてある、之が約り孰らも法華經を

聞法の利益と拜塔の利益

寓言したのであるといふ暗示である。此等はほんの淺慕な形式を以て示されたのであるが、甚だ無邪氣千萬なことで極めて面白い所がある。

(参考) 聞法の利益には曰く、恒河沙の衆生阿羅漢果を得、無量の衆生緣覺の心を發し、恒河沙の衆生無上道心を發し、無生忍を得不退轉に至らん。

拜塔の利益には曰く、無量の衆生阿羅漢果を得、無量の衆生辟支佛を悟り、不可思議の衆生菩提心を發して、不退轉に至らん。

以上五月蠅此品が即ち法華經の全體であるといふことをお話ししたが、之は大に入用のあつたことで、直ぐ次の經文に

妙法華經の  
提婆達多品  
を聞いて

妙法華經の提婆達多品を聞いて、淨心に信敬して疑惑を生ぜざらん者は、地獄餓鬼畜生に墮ちずして、十方の佛前に生ぜん、所生の處には常に是經を聞かん、若し人天の中に生ぜば勝妙の樂を受け、若し佛前に在らば蓮華より化生せん。

とある。此の經文の暗示を搜るべく、提婆達多品が法華經であるといふことを、能く腹に入れて置かねばならぬ必要があつたからなのである。この妙法華經の提婆達多品を聞いて、云々の經文に就ては、嘉祥といふ人が不徹底なる解釋を附して

居るが、古來右の嘉祥を除いては、天台初め誰もが臭ひ物には蓋をするの量見かし、て丸で筆を著けて居らぬ。併しこゝはなかなか深き佛意の籠つた所で、前にいふ如く提婆達多品は即ち法華經全體であるから、經文に妙法華經の提婆達多品を聞いてとあるは、廣き妙法華經も約りは提婆達多品に外ならざるものである、提婆達多品即ち妙法華經を聞いての意味であると解すべきであつて、夫れが即ち佛意を得たものであるが、若し提婆達多品が法華經の全體であるの理解がなかつたならば、提婆達多品を聞いての意味は甚だ難解のことゝなるであらう。古來嘉祥を除いては、誰も筆を著けぬのはこゝに基いた譯である。法華經中にこんな事がこゝと他に一ヶ所ある、他の一ヶ所といふは、藥王菩薩本事品に於ける、藥王菩薩本事品を聞かんものは、阿彌陀佛國に往生す云々の所である、提婆品と藥王品と約り同じ經緯であるのである。彌陀法として研究するには深く思を沈めねばならぬ所である。

而して次の淨心に信敬してといへるからが注意すべき所で、悉く大無量壽經の關係となるのである、此一節の前後を擁して居る淨心に信敬して疑惑を生ぜずの

大無量壽經  
との關係

前二句と若し佛前に在らば蓮華より化生せん、後の二句は大無量壽經經文七五頁一行の爾の時慈氏菩薩とあるより同頁十行の具足し成就すまでの要旨と義趣を同じくするもので尙委しくは大無量壽經を繙いて玩味されたい。ナニ無理に引張つて來れば何處へでも引き寄せられるものであるといふ如き、粗略な取扱は無用である。

四十八願照應。

特にこゝで注意すべきは、下に並べられた得益である。一には地獄餓鬼畜生に墮ちず、二には十方の佛前に生ぜん、三には所生の處には常に此經を聞かん、四には若し人天の中に生ぜば勝妙の樂を受けんの四つであるが、此の四ヶ條の得益が悉く彌陀四十八願に誓はれて居ることである、此の暗示の筋を手繰には、前の高六十由旬縱廣四十由旬の所に、伏線の在つたことは無論であるが、こゝでの直覺は、地獄餓鬼畜生に墮ちずの文字である。これが四十八願の第一願となつて居るので、こゝでも眞つ先に置いてある。第二の十方の佛前に生ぜんが、第十八第十九第二十の三願であるが、分ては十八願であるは申までもない事である。第三の所生の處には常に此經を聞かんは第四十六願に當り。第四の若し人天の中に生ぜば勝妙

五

最後の歸結は藥王本事品へ。

の樂を受けんは、第四十三願に當るのである。四十八願の經文はこゝに出さないが、第一願は經文十四頁四行、第十八願は同十六頁十一行、第四十六願は同廿二頁十行、第四十三願は同廿二頁三行にあるのであるから、披見せられたい。

以上は大無量壽經との關係に付て述べたことであるが尙夫よりも深き意味ありとして鑽仰せねばならぬのは、此經即ち法華經中に於ける照應である。前二句の「淨心に信敬して疑惑を生ぜず」とあるは、此經の分別功德品の「其れ衆生あつて佛の壽命の長遠なること是の如なると聞て、乃ち能く一念の信解を生ずるに至る、得る所の功德限量あること無けん」の要文を睨んでみて、而して後二句の「若し佛前にあらば蓮華より化生せん」とは、藥王菩薩本事品の「即ち安樂世界の阿彌陀佛の大菩薩衆の圍繞せる住處に往て、蓮華の中寶座の上に坐せん」の最後の歸結の所へ、結び著けられてあることである。前來法師品は言を待たず、寶塔品及此の提婆品が、最後の要文となると、必ず藥王菩薩本事品に結び著けられてあるは、蓋し深き佛意の潛む所で、法華經を彌陀法として研究する上に於ては、快心に堪へない所である。次に文殊出現龍女成佛の段となるが、此一段こそは法華一經に於ける難解難入

文殊出現、龍女成佛。

の要關である。前にもいふ如く法華經の中心が佛法僧の三ツに區分されて僧の體得者は藥王菩薩法の體得者は文殊菩薩となつて、夫れ夫れ其說法の對手となつて御坐る。佛は體得者といふ譯には行かないが佛は慈悲を以て體とせられるので、慈氏たる彌勒が對手となられる。且つ彌勒は此の娑婆に於て、釋迦に次で佛となられる方であるから、其邊の意味もあつて對手となられるのであらう。然るに法師品から起つて、寶塔品及此品の前半の提婆成佛に至るまでは、藥王菩薩の勢力範圍とでも申さうか、尤も寶塔品は法華經を寓言したものとすれば、藥王菩薩には關係がないようであるが、是れ則ち勇猛なり是れ則ち精進なりの、僧の一心精進の上に約した法華經であり、又此品の前半の提婆成佛の法華經も、藥王菩薩に關係はないようであるが、是亦釋尊の因時に於ける、即ち曾て僧たりし時代に於て、法華經を懇求せられた有様を説かれたもので、詳しくいへば罪惡厭惡の巷に法華の妙法を搜り、拾薪汲水の精勤に倦せられざりき、一心精進の上に約した法華經であるから法寶を説かれながらも、此等は悉く藥王菩薩の繩張内の法華經とすべきであらう。されば初め法師品の此の中には已に如來の全身有ますの文字に兆を發して、彼の

當に本土に  
還り給ふべし。

寶塔の涌出となり、遂に此品に來り、若し佛前に在らば蓮華より化生せん、の文字に結ばれ、之を一束として藥王菩薩本事品に投込まれた次第であるから、即ち以上の二品半は藥王菩薩の勢力範圍といふべきである。而して此の後半からは文殊菩薩の繩張となるのであつて、即ち純ら智慧を先きに立てた、法寶の說法となるのである。

所でこゝで多寶佛のお伴の智積菩薩が、多寶佛を促して本土に還らうといはれる、經文には、  
時に下方の多寶世尊の所從の菩薩名を智積といふ、多寶佛に白さく當に本土に還り給ふべし。

と記されてあるが、此の一條がほんの一些事の如く見へてゐて、實は之が殊の外緊要なる一件である。智積はこゝで法華經の說法は、終りを告げたるものと見做されたから、多寶佛を促して、當さに本土に還り給ふべし、と言はれたのである。コハ固より智積の早合點で、これから文殊關係の法寶、且つ佛の大慈悲を宣揚せられる壽量品、並に分別功德品の如き大說法あるを、氣付かれなかつたのであるが、智積が

こゝで法華經が終りを告げたと見られたに付ては、深き理由のあることで、多寶佛のお伴をして來られる位の菩薩であるから、なかなか鋭い所がある。彼の妙法華經の提婆達多品を聞いて、淨心に信敬して疑惑を生ぜざらんものは、中略、若し佛前に在らば蓮華より化生せん」と説法を結束された所で、智積菩薩は、法華經の第一義はこゝに盡きたるものと見られたのである。如何にもこの見方は叡智ある見方で、文殊菩薩の法寶といふも、佛寶宣揚の慈悲といふも、要約するところ悉く此所に歸著するのである。此所に歸著するとは、勇猛精進の下に妙法實相を叩き出して、淨心信敬蓮華化生に歸著するのである、之が法華一經の綱格である、大無量壽經も亦然りである。此事は諸君に於ても能く記憶されて、今後の品品を讀みたい。そして又自然これが法師品が法華經の代表であつて、藥王菩薩本事品が法華經の歸結であることを暗示するの有力なる一件となるのである。如何となれば、藥王菩薩の勇猛精進の歸結たる、淨心信敬蓮華化生は、即ち法華一經の歸結と見るの義理あることが、智積菩薩の舉動に由つて、吾人に告知せられたからである。

意匠の凝つた圖案を。

而して又、提婆達多とは何の關係もない、文殊出現龍女成佛が、此品の中に入られ

てあることに付ても、深き佛意を搜らねばならぬ。文殊關係の法寶を説かれるに付ては、尙後に安樂行の一品があるにはあるが、尤も力の這入つたは此の龍女成佛の一段であるとせねばならぬ。而して其力の這入つた龍女成佛の段が、思ひがけもない此の提婆達多品中に入れられ、妙法華經の提婆達多品を聞いて「と一束に束ねあげられ、約りは法師品の精進と手を握らして、若し佛前に在らば蓮華より化生せんと、藥王菩薩本事品に投入せられたは、斯經一貫の義諦を遺憾なくさらけ出しての、なかなか意匠の凝つた圖案を畫き出されたものと窺ふべきであらう。夫と同時、智積菩薩が、妙法華經の提婆達多品を聞いて「云々の要節を聴取されて、法華經の第一義はここに終りを告げたものと合點して、本土に還り給ふべし」と多寶佛を促されたは、一分の透も無い智積菩薩の如才なさが顯はれて、何とやらん奥深く阿彌陀佛の溫容慈眼までがほの見へて、そこに千鈞の重みあることゝなつたであらう。尤も提婆達多品の中へ龍女成佛を入れられたは、五逆の罪惡も五障の女身も、法華經即ち彌陀の誓ひに洩れざるを示された邊もあるものであらうが、今私は主として法華經一貫の大精神から解釋を下すのであつて、換言すれば大無量壽經との聯絡



に付てのみ論議するの目的であるから、自然義路が偏狹に失する嫌あるは止を得ない。前にも言へる如く、此法華經は堅に見れば、容易に科段を截ることの出来ないやうに鈎鎖狀に説かれてあると同時に、横に見るとそれには幾多の義相が織り出されて、巧緻を極めて居る。その傍系に屬する幾多の義相は、天台初め諸師に於て見られた所に、敬服すべきものが多々あるので、卒爾に私の所見を以て、經の義趣が盡きて居るといふのではない、此邊は吳吳もお含を請ふておかねばならぬ。

文殊智積の問答

扱て文殊出現の有様等に付ては、末尾經文二一頁一四行以下を見られたら分ることであるから、こゝに述べることは省略して、ここには智積菩薩との問答の所から始めて、重要な意義を拾ふてゆかう。智積が、仁は龍宮で幾何の衆生を化益せられたかと問はれると、文殊が答へらるゝようは、それは數量りのないことで、且く待たれよと言はるゝが早いか、そこへ無數の菩薩が寶蓮華に座して、海より涌出して靈鷲山の虚空に住せられる。智積菩薩よ、海中において教化せること其事は、此の如きものであると得意の一瞥を與へられる。智積も全く感心せられて、偈を以て讚嘆される。

六〇

六一

大智徳勇健にして、無量の衆を化度せり、今此の諸の大會、及び我れ皆己に見つ。實相の義を演暢し、一乗の法を開闡して、廣く諸の衆生を導きて、速に菩提を成せ令めよ。と斯ふである。

八王子の象義は法華の實相

こゝでお話して置かねばならぬことは、序品の日月燈明佛の八王子のことである。此の八王子のことは、前卷法華經文四頁二行、又は前卷講錄一〇三頁以下を披見せられたならば、委しく説述してあるが、要之彼の八王子の象義なるものが、法華經の謂ゆる實相であるので、文殊菩薩が體得して居られる微妙法なるものは、八王子の象義に外ならぬのである。それでここの八歳の龍女といふが、即ち燈明佛の八王子と照應することゝなるのである。

演暢實相義開闡一乘法

序品の終りに於て、燈明佛の詞に、諸法實相の義、已に汝等が爲に説きつ前卷經文八頁三行とある、之は文殊菩薩の八王子の談とは、一概に聯絡して居るとは申されぬが、已に實相の義は説かれてあると、暗に文殊の説を指示して、法華經の謂ゆる妙法實相なるものは、文殊の談中に説かれてあるぞと余所ながら注意されたもので

ある。次に文殊の詞に、是れ諸佛の方便なり、今の佛の光明を放ち給ふも、實相の義を助發せんとなり、(前卷經文九頁九行)とある、これは稍明かに實相の義は八王子の象義にあることを指示されたものである。夫でここに智積の偈に、實相の義を演暢しとあるが、遙に序品の實相の義を助發せんとするの頌句に應じたものと見たいのである。序品では八王子の象義を以て實相の義を助發せられたが、今ここでは實相の義を演暢して、一乘の法が開闡されたいといふ、智積の請ひとなるのである。であるから、次の經文、娑竭羅龍王の女、年始めて八歳といふよりが八王子に含まれた幽玄なる意義、即ち實相の演暢開闡となるのである。八王子の本位が無量意である、即ち無量壽佛である阿彌陀佛であることは、前卷に於て委しく御承知のことであらう。

百の天台あり千の荆溪あるも

法華の實相は八王子であるなどいふことを、從來の法華經學者が開かれたなら、殆んど私を狂人でもあるかの如く罵られるであらう。此の講録の如き一顧の價もなきものと排斥されるであらうが、百の天台あり千の荆溪あるも、前卷を熟讀せられたならば、八王子の無量意が阿彌陀佛であることに向つては、恐らく己が意に

六二

六三

疾しからざる、正堂堂の論陣を張つて、非難を加へらるゝことは出来まい。果して之が出来ないとすれば、法華經に對す從來の解釋は、既に根底に於て錯謬を來して居るのである、枝葉に於て彼此と一一議論を上下するの必要はないといふことになるのであるが、併しこの龍女成佛の一段が、八王子と相照應して居るといふの經緯は難問題である。此所は法界に於ける智慧の旗頭たる文殊菩薩、多寶佛の智囊たる智積菩薩、誰もが知つた智慧第一の舍利弗尊者、と揃ひも揃ふて智慧を絞らるゝ所である。であるから私もここでは、唯諸君に對し研究の參考に資するまでとして、自分の氣付いた二三を未成品としてお話しするものと心得られて、此上幾重にも諸君の御研究を望むのである。

文殊の偈

試に娑竭羅龍王の女、年始めて八歳なり、以下に於て、解釋を下して見よう、大切な所であるから經文を掲げる。

文殊師利言、有娑竭羅龍王女、年始八歳

智慧利根善知衆生諸根行業得陀羅尼

諸佛所説甚深秘藏悉能受持深入禪定了達諸法  
 於剎那頃發菩提心得不退轉辯才無礙  
 慈念衆生猶如赤子功德具足心念口演微妙廣大慈悲仁讓志意  
 和雅能至菩提

これは智慧利根以下は實は四字の偈頌となつて居るのである。此一節が四段に分たれる。

其第一段。

智慧利根より得陀羅尼までが第一段で、之は阿彌陀佛に約して、其本願を頌したものである。即ち阿彌陀佛は、最高利根の智慧を以て、衆生の根機と行業が各階級に分れたるを觀察せられて、十八十九二十と三願を建て、洩なく諸機を攝取せられ而して所信所行の目標としては、阿彌陀の三字、即ち無量壽なる名字の陀羅尼を以てせられたことを頌したものである。

其第二段。

次に諸佛所説より了達諸法までが第二段で、之は釋迦の設化に約して、其内證を頌したものである。甚深の秘藏悉く能く受持しとあるは、其甚深秘藏の要諦をい

へば彌陀法であるが、其輪廓は戒定慧の三學である。大無量壽經で法藏比丘が世自在王佛を讚頌されて、戒聞精進、三昧智慧、威徳無侶、殊勝希有と稱へられた如く、佛が甚深秘藏の要諦を受持せらるゝには、戒定慧の三學を以てせらるゝのである。すべて佛道の上に於ては、如何なる多數の名目が排列せられても、約りは悉く此の戒定慧の三學に攝せられぬものはないとしてある。又其の譯である。惟り佛道のみでない、世間法と雖も、向上的成果は悉く戒定慧が齋すのである。尙其齋した成果の維持は、苟且にも戒定慧の三を缺くことは出來ない、一と度之を缺がば、其處に直に一の瑕疵は生じて來るのである。誠に薄氷を履むが如く慎まねばならぬことである。深く禪定に入りて諸法を了達せりとは、佛は常に禪定に入居らるゝ、謂ゆる那伽行くも定にあり、那伽住するも定にありといふて、那伽とは龍のことであるが、之は龍を以て佛に喩へたもので、龍は行住ともに定意を失なはないとしてある。乃ち佛は行住坐臥禪定を失はるゝことなくして能く諸法を了達せられ、擇言も擇行もない、言行の上にも觀察の上にも中庸を外れることはない、誠に任運自在なるを示したものである。

次に於利那頃より辯才無礙なりまでが第三段で、信受及び其得益を頌したものである。是は法華經で見れば、分別功德品の佛の壽命の長遠なる是の如くなるを聞て、乃ち能く一念の信解を生ずるに至らん、得る所の功德限量あるとなからん、の所、大無量壽經で見れば、其れ彼佛の名號を聞くことを得るあつて、歡喜踊躍し乃ち一念に至らん、當に知るべし此人は大利を得と爲す、則是れ無上功德を具足するなり、の所に、由つたものであるはいふまでもないことであるが、無量壽の名號を聞て一念の信受の下に、此の不退轉無礙辯才の大利が得られる譯である。此事に付ては、そんな道理はない筈であると、後に智積も舍利弗も反問することゝなつて居るから、其場合に委しくお話することにする。

次に慈念衆生より能至菩提までが第四段で、受後の功德を頌したのである。此の信後の功德の至善至美なるを見ると、殆んど佛の化益と何の殊なる所を見出すことは出来ない。さればこそ法師品には、是の法華經を若くは見、若くは聞き、聞き己つて信解し受持せば、當に知るべし是人は阿耨多羅三藐三菩提に近づくとを得たりと、度度に説かれ、或は又大無量壽經には、其れ心を至して安樂國に生ぜん願

ずる有ん者は、智慧明達功德殊勝を得べしと説かれ、或は悉く諸佛無量の功德を獲、智慧聖明して不可思議なりとも記されてある。それで此の第四段は、信後の功德を頌したものと、いひ條實は彌陀本願の下、第一段釋迦設化の下、第二段及び此の信後の得益の下、第三段と上三段の下へ、何れへも入れて讀む氣持で見ることが宜しい。換言すれば、信受者の得益の不可思議あるを稱揚しつつ、三段を總結したものと見ると見るべきである。

以上文殊の所言を略解し終つたが、之に付てまだお話しねばならぬことが、殘つて居るようでもあるが、便宜の爲めこゝで龍女の偈讚をお話しよう。此の龍女の偈讚も文殊の所言と同じく、彼の八王子の象義に含まれたる、幽玄深遠なる意義を頌したのである。従つて文殊の所言と同じ順序が辿つてある。分り易からしめん爲めに、こゝに文殊龍女の兩偈を相聯ねて掲げることにする。此處も今經常套の把玩の一つで、孰らも同意味であるから、龍女が偈讚であると同様に、文殊も偈頌を以て答へられて然るべきであるが、一は長行となし、一は偈頌となつて居る、而して其實孰らも偈頌である。いつそのこと夫程ならば、文殊の方も立派に偈頌として

掲げられてあつたならば、我々が佛意を捜る上に、多少は手懸りが得易い邊もあるのであるが、態と斯様なことが(一)は長行一は偈頌試みられて居る。併し一面からいへば、斯様な把玩のある所は、夫が容易に素通する所でないといふ看板となつて、吾人に深き注意を與ゆるとなるのである。法華經を讀むの秘傳として御參考までにお話して置く。

兩頌聯揭。

文殊龍女の兩偈を相聯ねて掲げると斯ふなる。一段低く小文字なるは龍女の偈である。

深達罪福相

徧照於十方

微妙淨法身

具相三十二

以八十種好

用莊嚴法身

天人所戴仰

龍神咸恭敬

一切衆生類

無不宗奉者

又聞成菩提

唯佛當證知

我闍大乘教

度脫苦衆生

智慧利根善知衆生諸根行業得陀羅尼 (文殊)

深達罪福相徧照於十方 (龍女)

以上第一段。彌陀に約して其本願を頌したるもの。

諸佛所說甚深秘藏悉能受持深入禪定了達諸法 (文殊)

六八

微妙淨法身 具相三十二 以八十種好 用莊嚴法身  
天人所戴仰 龍神咸恭敬 一切衆生類 無不宗奉者 (龍女)

以上第二段。釋迦に約して其設化を頌したるもの。

於剎那頃發菩提心得不退轉辯才無礙 (文殊)

又聞成菩提 唯佛當證知 (龍女)

以上第三段。衆生に約して信受及び其得益を頌したるもの。

慈念衆生猶如赤子功德具足心念口演微妙廣大慈悲仁讓志意

和雅能至菩提 (文殊)

我闍大乘教 度脫苦衆生 (龍女)

以上第四段。衆生に約して信後の功德を頌したるもの。

扱て斯の如く文殊龍女の兩頌を聯載したに由つて、龍女の偈頌は殆んど解説するの必要もなく、お分りになつたことのように思ふが、簡略にお話をすれば、第一段、深く罪福の相に達して徧く十方を照し給ふとあるは、彌陀が衆生の根機を照察

兩頌比較略

文辭講演

二五五

されて、十八十九二十の三願を建てられ、無量壽無量光佛として、鑿に盡未來際、横に十方を照し給ふを頌したものである。第二段、微妙淨法身相を具すること三十二等とあるは主として釋迦設化の外表作用に付て、ものされたのである。文殊の方では、主として釋迦の内含内證に付て、頌せられたものであることは、前にお話した如くであるが、ここに歌はれてある三十二相も、八十種好も、悉く内含の戒定慧の現はれである。天人の戴仰も、衆生の宗奉も、又た内含の戒定慧の徳に基かざるものはないのである。第三段、又聞て菩提を成ずること、唯當に佛のみ證知し給ふべしとは無量壽佛の名字を聞き、菩提心を發し、不退轉を得ることは不可思議力の然らしむる所で、唯佛のみ當に證知し給ふ所である。尙文殊の頌下でお話したことを參照されたい。第四段、我れ大乘の教を闡て、苦の衆生を度脱せん、此亦説明までもない、文殊の方は字數は多いが、約り、大乘の教を闡て、苦の衆生を度脱せん、の所にあるのである。且つ此の終りの二句が、三段の歸結であること等までが、文殊の頌と同様である。

實相とは心

所で文殊龍女の二頌が、同じ旨趣を頌したものは分つたとして、併し是が謂ゆ

七〇

得難ひ

る實相とは心得難ひと思はるゝ方もあらうが、實相なるものは、是法は示すべからず言辭の相寂滅せり、佛と佛との知見に讓つておくの外はない。無量義經には「其一法とは即ち無相なり、是の如き無相は相なく相ならず、相ならずして相なきを名けて實相となす」と説かれ。又起信論には、當に知るべし眞如實相の自性は有相に非ず、無相に非ず、有相に非ざるにあらず、無相に非ざるにあらず、有無俱相に非ず、等と記されてある。如く、言語道斷、心行所滅の天地とする外はないが、吾人が一切世間を化益せんとするの大誓願の下に、邪念邪執を去り、我所の心なく、染著の心なく、一心專注粉骨碎身で懸つた所に、一分一分妙法の實相が打開さるのである。ここに打開さるゝといふは、其の體ではない、即ち妙法實相の相と用とである。彌陀の慈悲釋迦の設化は妙法實相の相と用とである。併し其相用は體を離れてのものではないから、強て分け隔てをする必要もないが、其本體に於て如何なる不思議が在すかは、吾人の境界では遺憾ながら無相不相で、言語思量の外のものであるとして置く外はないが、何に致せ不可思議力として、其所に彼の妙法實相を體驗するこゝとが出来るのである。而して遂には之を大空の如くに、明鏡の如くに體得する時

があるであらうが、其時こそ大般涅槃の妙境に入つた時といふべきであらう。そこで實相の義を助發されたる序品では、八王子に寓言して、臚氣の裏に妙法實相の相を助發せられたのであるが、こゝでは智積の所請に由つて、一步を進めて其大用を演暢されたのである。風を盡くことは出来ないから、柳の枝梢の靡けるを以て之を示したる如く、實相の體を示すことは出来ないから、之が相用を以てせられたのである。

以上は多少意に満たざる不了義もあると承知しつゝ、精精分り易く一往の話をした積りであるが、深くこゝを研究せんと思はるゝ方は、起信論に依つて見らるゝと、其第一義が會得せらるゝことゝ思ふのである。併し起信論にまで及ぼしてこれを解釋するといふことは、却てことを繁くするの嫌があるので、深入は避けておくことゝして、深く研究を望まらるゝ方の爲めに、簡單ながらお話しておきたい。それは彼の八王子の象義と、この文殊龍女二偈の義趣との經緯は、起信論の所謂三大と同關係を持つからのことである。

尤も之をお話する前に、起信論に對する愚見の一端をお話しておかねばならぬ。

起信論に依つて見らるゝと

起信論に對する愚見の一端

起信論は三界唯一心、心外無別法に立脚して、彌陀も釋迦も我が一心に取込んで論ずるのである。之に反して法華經は、起信論の所謂一心法を、宇宙法界の位置即ち對境において見るのである。即ち三大の如きも起信論では、我が一心の上に法爾として具有するの徳と見るを、法華經では宇宙法界に於ての、無始無終法爾として存在する不思議力と見るのである。起信論は一心を押擴げて、宇宙法界を一心に取入れるのであるが、法華經は宇宙法界を所對として、此に一心を融念せしむるを以て旨としたものである。併し結局は主觀客觀同し所に歸着するので、單に哲學として冷かに論ずれば、一心を押擴げて宇宙の一切法を一心に取入れることが出来ないこともなからうが、宗教として温かみを含ませ、一切衆生救濟の實を擧げんとするには、單に一心を押擴げるのみでは行詰る所が出来て、議論丈けは成立つたとしても、相變らず不安に鎖されて、宗教的安心立命は得られないことゝなる。

起信論と法華經

それで起信論を見るには、其腹を以て見ねばならぬのであるが、併し起信論と雖も一心法を標榜しながら、時として諸佛如來を向ふに廻して、即ち所對の境として見て居る。見て居りながら終局一心に取戻してある。所が法華經では徹頭徹尾

諸佛の慈悲尅していへば彌陀の本願を宣揚しつゝ、時として起信論の一心法と宗旨に落て居る所がある。斯くいふと甚だ要領を得ないことよふであるが、そこが至極要領を得た所である。約る所吾人は、宇宙大法界の大慈悲力大不思議力、即ち阿彌陀佛へ同化した所で、大光明を放つ佛となるのであるが、其同化し得る丈けの素質は我々誰もが持て居る譯であらねばならぬ。そこで此の素質に重きを措て立論すれば、起信論の一心法となり、又法界の不思議力に重を措て見れば、法華經の彌陀の威神力となるのである。威神力を説くのは法華經と雖も衆生の素質の向上を度外に措くことは出来ない。一心法を説くのは起信論と雖も、諸佛如來の慈悲誘液を勘定に入れないでは、宗教的に論旨を纏めることは出来ないこととなるのである。自然兩義に跨るの止むを得ないこととなるのであつて、自らこゝに吾人成佛の喫緊點が見出されることとなるのである。尙一言して置くが、法華經大無量壽經の二經と起信論の關係に付ては、佛教専門の方は深く研究さるゝの價值あるものではなからうか、起信論は支那に於ける偽作であるといふ如き論者もあるようであるが、此等に付ては尙更めて研究の余地あること、信ずるのである、此際

起信論と八王子と二頌

特に篤學の方の注意を喚起したのである。

扱て起信論に於ける三〇大とは、體大相大用大である。是は起信論に眞如を體、相、用の三に分けて、論じてあることをいふのであつて、體大即ち眞如の體は言説の範圍のものでないとして、相と用と付ては其義が示されてある。其示されてある義に由つて、序品の八王子の象義と、此の文殊龍女の二頌を見ると、起信論の所示と同一旨趣となるのである。即ち八王子の象義は眞如の相を寓したもので、此の文殊龍女の二頌は眞如の用を頌しものといふことが分るのである。以下起信論に對比して此の關係をお話しよう。こゝに眞如といふは、起信論の名に由つたのであるが、此の眞如が法華經の所謂實相である。尤も起信論に眞如と呼び、法華經に實相と稱するは、自ら其理由の存することであるが、其物體に異つた二つのものがある譯ではない。それで起信論のお話をする間は、眞如眞如と呼ぶは、約り實相のことであると思はれて宜しいのである。

相大と八王子

起信論に相大を釋しては曰く、

本より已來自性に一切の功德を満足す、所謂自體に大智慧光明の義あるが故に、



偏照法界の義の故に、眞實識知の義の故に、自性清淨心の義の故に、常樂我淨の義の故に、清涼不變自在の義の故に、是の如き恒沙に過ぎたる、不離不斷、不異不思議の佛法を具足す乃至満足して所少の義あること無きが故に、名けて如來藏と爲し、亦た如來法身と名く。

としてある。まだ此の釋文は之で盡きてはゐないが、以下は面倒なる義相となるから、態と載せないで置く。此の文中に、自性又は自體とあるは、眞如の自性、眞如の自體といふ意味である。こゝに相といふも眞如の體を外にしての相ではない眞如の自性、自體に具つて居る、性徳の顯はれに外ならざるの義を明にする爲めに、自性、自體の文字が用ひられてあるのである。之を法華經序品の如く、時紀變遷の上に約していへば、太初無爲の眞如的時代から、時の熟すると共に任運として八王子が生れて來るのである。八王子の象義は宇宙無始本有の自性自體の顯はれであつて、外から持て來た附燒及ではない、其宇宙本有の自體には、自ら阿彌陀佛となるの無量意の相も具はり、又従つては除疑意釋迦外六王子の相も具有して居るのである、具有して居る性徳の顯れである。こゝの所が起信論の釋文では、本より己來

(眞如の)自性に一功の功徳を満足す、所謂眞如の自體に大智慧光明の義あるが故に、偏照法界の義の故に(中略)名けて如來藏と爲す、亦名けて如來法身と名くとなるのである。眞如自體に大智慧光明の義、偏照法界の義あるのが、宇宙實相の自體から任運と生れて來た八王子の中に、法爾として無量意の即ち阿彌陀の一子あるに當るのである。されば起信論に相大を釋したるの文、即ち上に掲たる文節は、八王子の象義に含む幽玄なる意義を擧げて疏釋したものと見て然るべきである。前卷で八王子を周易に當儀めてお話した時に、八王子は先天的であると申したが、此の相大は悉く先天的眞如の自性自體の性徳其儘の顯れであるのである。

用大と二

次に用大を釋しては曰く、  
復次に眞如の用とは、所謂諸佛如來本と因位に在て大慈悲を發し、諸の波羅密を修し衆生を攝化す、大誓願を立て、盡く等しく衆生界を度脱せんと欲す、亦た劫數を限らず未來を盡す、一切の衆生を以て己身の如なるを以ての故に、  
としてある。此も同じく釋文はこれで盡きては居ないが、以下は面倒なる義相となるから、態と載せないで置く。此の起信論の釋文は、極て明白であつて、私が前に

文殊龍女の二頌を解した所を以て、此と比較せられたなら、彼の二頌と此の用大とが同旨趣であるといふことは一目瞭然たるものであらう。試に文殊の偈を以て比較せんが、文殊の偈に於て「智慧利根にして、善く衆生の諸根の行業を知り、陀羅尼を得たり」(第一段)諸佛所説の甚深の秘藏悉く能く受持し深く禪定に入つて諸法に了達せり(第二段)といへる所は、起信論の「所謂諸佛如來、本と因位に在て大慈悲を發し、諸の波羅密を修し衆生を攝化すと其旨趣を同じくし。又彼の偈に於て、衆生を慈念すること猶赤子の如し、功德是足して心に念ひ口に演ること微妙廣大なり、慈悲仁讓志意和雅にして能く菩提に至れり」(第四段)といへる所は此の「大誓願を立て、盡く等しく衆生界を度脱せんと欲す、亦た劫數を限らず未來を盡す、一切の衆生を取て己身の如なるを以ての故に」と其旨趣を同じくして居るのである。

尤もこゝで注意して置くは、文殊の偈に於ては、第四段は衆生に約して信後の功德を頌したるものとして一往の解釋を爲し、夫と同時に信後の功德の至善至美なる佛の化益と殆んど殊なる所を見出さないとして、一轉しては、彌陀の本願釋迦の設化を頌したるものとも見るべきである、といふに付て委細所見を述べて置たが、此

起信論と二頌との異同

の起信論では、心眞如の用大を釋したるに止まつて、衆生の解受には關係することはないのであるから、文殊の偈の第三段に當るものは自然あるべき筈がないのみならず、文殊の第四段が、此の大誓願を立て、云々の文に當るといふも、夫は文殊の第四段を佛の化益に取切つてのことであるから、念の爲め申副へて置く。

尙前に文殊龍女の二頌を解説する下で、八王子の象義と二頌とが同意義であつて約り二頌は八王子の象義を賦ふたものであると申したが、八王子の象義には、彌陀の本願と釋迦の設化が暗示されて居るのみで、衆生の解受に付ての義趣は見へて居ない。併し夫は自然、本願と設化の中に含まれて居るのである、といへばいふことも出来るのではあるが、若し衆生の解受までが、八王子の象義に暗示されてあるものとせられては、誤解となるのである。前の講演に足らざる所があつたように思ふから、こゝに補足しておく。

且つ翻つて大通智勝佛の十六王子を見ると、無量意が阿彌陀佛となり、度一切世間苦惱となり。除疑意が釋迦牟尼佛となり、壞一切世間怖畏となりて其の度一切世間苦惱及び壞一切世間怖畏の文字の意味が悉く起信論の用大の釋文とも、將た此の文殊龍女二頌とも旨趣を同じくすることゝなるのである。(此事は前卷講録

聯絡の微妙を究めたるところ

一〇九頁以下參照十六王子を周易の上からお話した時に、八王子の先天的なるに對して、後天的であると申したがこの二頌も亦八王子の先天的性徳なるに對して、後天的修徳であるのである。其聯絡の微妙を究めたるどころ何としても疑を容れるの余地のないものと思ふのである。

思を三たび致されし

そこで更めていふまでもないが、此の一段の文殊龍女の二頌が、孰れも實相を演暢したもので、この二頌が序品の八王子と聯絡したものである。即ち八王子の象義は實相の相を寓言し、この二頌は實相の用を示したのである、といふことが分かると同時に、此の一段に對する私の所見が謬でないのみならず、八王子に於ける無量意及び八王子と十六王子の關係如きに至るまでが、起信論に由つて裏書されたこととなるように思ふのである。此邊は一朝一夕に論盡することの出来ない、殆んど無量壽法華兩經の根本問題に觸れた所である、どうか篤學の方は思を三たび致されんことを切望して止まない所である。

龍女の寶珠は法華經なり

これから更に經文に付てお話をすれば、智積の間に對する文殊の答頌が終つた時に智積の不審、末尾經文二三頁六行以下及び龍女の偈頌の後に舍利弗の難問が

△

ある、(末尾經文六〇頁二行以下)其は法華經を聞て、須臾剎那の間に不退轉の位を得辯才無礙の力を得た、と云に對する不審疑問であるが、之に付ては別に答ふる所なくして、事實の上に龍女が南方無垢世界に飛往して成佛し說法するの有様が示されてある。尤も之より先き舍利弗が龍女に對して早速の成佛は信じ難い、殊に女人五障の身でそんなことの有ようがない、と難問したに對して、龍女は其理由を辯明しないで、一の寶珠を釋尊に奉上することが記されてある。此の寶珠といふが法華經のことである、或は無量壽佛の名號とするも可なりである、と同時に一念信解と見るも適切であらう、何れとするも結局の意味は同じ事に歸するのである。夫でこゝになぜ文殊龍女の答辯がないかといふに、コゝ容易ならざることであつて法華經全體がこれの答辯である、龍女が寶珠を奉上するの理由の一つはこゝにある、分ては下の安樂行品、又は分別功德品の如き、これが經緯の説明と見ることが出来る。

千古動きのないところ

併し結局の所を押へるには、前にあつた妙法華經の提婆達多品を聞て、淨心に信敬して疑惑を生ぜざらんものは、(中略)若し佛前に在らば蓮華より化生せん所の

落著するので、藥王菩薩の精進を以てするの外はない、智積菩薩が彼を以て法華經の終結と見て、本土に還り給ふべしと多寶佛を促されたは、千古動きのない所である。然にここで早速の成佛を談ぜらるゝは、早く言へば初發心時便成正覺、初發心の時便ち正覺を成ずの義邊に約してのことであるともいふべきで、大に出入自在の見地に坐して論ぜねばならぬ所であらう。

南方無垢世界は智慧波羅密。

ここで龍女が南方無垢世界に往て成佛するとしてあるのは、本來なれば西方彌陀佛國ともいひ度い所であるが、中心の十二品はいふまでもなく、法華廿八品中阿彌陀佛の名を出したは、化城喻品と藥王菩薩本事品とに於て、僅に一回宛のみであつて、他は悉く暗示に止められて、而して裏面は悉く彌陀法となつて居る。こゝが法師品に次で寶塔品を置き、多寶佛身即ち法華經の神髓を窺はんとするの、容易ならざるを示された所以であらう。今こゝで南方無垢世界とせられたは、一念信受の下に成佛するは、智慧波羅密に由ることを暗示されたものである。(南方は智である)。

全く一の謎である。

これに付てお話しして置きたいことがある、といふは彼の淨土三部經の一なる阿

彌陀經を讀んで見ると、終に至つて東西南北及上下の六方諸佛の證誠がある、即ち阿彌陀佛の大不思議力を保證せらるゝことが説かれてある。其佛の名前が東方では、阿閼鞞佛、須彌相佛等、恒河沙數の諸佛としてある。然るに前卷(一〇九頁)でお話をした、大通智勝佛の十六王子の成佛が、東方は阿閼、須彌頂となつて居るが、是が全く阿彌陀經の佛名と符合して居る。所で阿彌陀經の南方世界の佛名を見ると、日月燈佛、名聞光佛、大焰肩佛等、恒河沙數の諸佛としてある。此も前卷で日月燈佛の八王子は、南方から數へ始めねばならぬと申ておいたが、こゝに南方に日月燈佛の名前が見へて居るは、親子(日月燈佛は親、八王子は子)の相違はあるが、是亦一の符合である。且つ前にも申たかと思ふが、龍女の八歳は日月燈明佛の八王子と照應して居るのであるが、其八歳の龍女も南方(無垢世界)に往て成佛して居る、而して阿彌陀經の南方にある大焰肩佛といふは、即ち龍王佛のことである。此亦重ね重ねの暗合となつて居る。尙前卷で大無量壽經の十四佛國の往生者と、大通智勝佛の十六王子との關係をお話したが、此亦南方に當るのが龍照、勝力の二佛となつて居て、こゝにも亦龍照とあるは、此の龍女と聯絡があるように思へる、全く一の謎と

いふの外はないであらう。此の十四佛國のことは前卷の百廿五頁以下を参照されたい。

一方ならぬ苦心を重ねて。

斯様なことは、無意味の穿索であるといへば夫れまでいあるが、深く此等の些事から考へ合せて見ると、釋迦滅後經典編纂、即ち結集の折に、釋迦が究竟大乘として、將た出世本懐として説かれたる、彌陀法の深き佛意を錯りなく末世に傳へんとして、一方ならぬ苦心を重ねて、妙法華經、大無量壽經、阿彌陀經、及び觀無量壽經、觀無量壽經のことに付ては、まだ何事もお話しなないが、此亦大無量壽經と微妙の關係あるは申すまでもない、同一團の手に成就されたものであらうといふ事が想像され、又延ひては大乘起信論の著者馬鳴菩薩如きが、此關係を能く讀破せられてゐたものではなからうかとも想はるゝのである。何に致せ此等の研究は、法華門淨土門の流を汲む方に於て、片時も緩に附して置かるべきものではなからうと思ふのである。

一事の申残し。

文殊龍女の一段に付ては、種種の方面から愚見を縷述したのであるが、尙尤も大切なる一事の申残しがある。夫は外でない、前に文殊龍女の二頌は、燈明佛の八王

子の象義に含まれてゐる、幽玄なる意味を演暢したものであるといふことを申ししたが、如何なる邊から見て、右の如き斷案を下したかの一事である。然るに此の關係は、法華經中に於ける最も秘闕の宿る所であるかのようと思ふから、夫で此事は且らく諸君の御研究に委ねて、愚見の開陳は見合せて置きたい。尤も愚見の在る所は、文殊龍女の二頌の解釋を試るに際つて、略お分りになるように、其意向を以てして置いたのであるから、其含みで見られたいのである。實は膚受淺學の門外漢たる私に於て、意竊かに余りに剔抉に過ぎはしないかと思ふことまで申演べ、或は佛意に違ふようなことがありはしなかつたかと、大に懺愧に堪へないのと、一つは尙熟慮を重ねたいと思ふ邊もありて、旁々愚見の開陳を見合せて置く。

次品に移る。

まだ此品としてはお話ししたいことは多々ある、且つ餘りに複雑となつた爲め、前後辻棲の合はないことになつたこともあるようにおもすが、彌陀法として研究する上に付ては、略の所は一ト通り所見を説盡したように思ふので、こゝで打切て次品に移ることとする。

四 出世本懷 其十二 (勸持品)

勸持品。

次に勸持品である、此品も末尾に經の全文が抄録されてある。勸は獎勵又は悅從の義ある文字である、即ち萬難を排し悅從獎勵、以て法華經を受持弘宣すべき、僧の奮勵精進を示された一品である、そこで僧としての體得者藥王菩薩の舞臺となる。大樂說菩薩の名前が見へて居るのは、此の一品の勸持は、主として說法方面即ち口業に付て示されてあるからである。

鈎鐶聯結相牽ひて。

前の提婆品の後半からは、三寶の中の法寶を説れることとなつて居るに、此品で復た僧寶の範圍に屬することを説れるは、順序を爲してゐないようであるが、是即ち鈎鐶狀を爲した所で、重箱へ物を詰めた如く出來て居ない、此經の一特色である。夫は法華一經の文段組織の上に付て、工を弄した邊もあるであらうが、其主たる目的は各品を鈎鐶し、相聯結せしめ、相牽ひて藥王菩薩本事品の、彌陀淨土の往生の一段に歸納する、法華經一貫の大精神を顯すの手段として用ひられてゐることを知らねばならぬ。前の提婆達多品が、同品の中腹に於ける、淨心に信敬して疑惑を生

八六

八七

ぜず(中略)若し佛前に在らば蓮華より化生せん、の要節に於て、文殊龍女の法寶をも攝取しつゝ、大無量壽經とも聯絡を持ち、遂には藥王菩薩本事品に投込れてゐることは、委しく前品でお話して置いたが、此品も亦藥王菩薩を立たせて、聯絡を失なはないように仕組まれてゐる。加之、憍曇彌と耶輸陀羅との二尼女の授記があつて、是亦藥王菩薩本事品の、女人往生と離るべからざるものとなつて居る。

正客は五逆と五障。

授記のことは、法師品の前品に人記品といふがあつて、其品で終りを告げて居る筈であるのに、五逆の大罪を犯したる提婆と、成佛の縁の乏しい尼女の授記と、夫には畜類動物に過ぎざる龍女の成佛を加へて、悉く法師品以下の正宗中心分の中に組入られてゐる如き品の組合せが鈎鐶狀たると共に、法華經の救の網の正客は、即ち彌陀建願の第一義は、五逆の罪惡と五障の女人との如き、佛縁に乏しきものをも攝取するにあるを暗示された、一の巧手段とも見ねばならぬ。尤も大無量壽經に由つて見ると、彌陀の四十八願には、五逆の罪惡と誹謗正法のものを除くとしてゐるが、之は除くとしてゐるのが却て攝取せられたのである、此事は四十八願の講演に臨んだ時にお話する。

六八の数が  
見へて居

前の提婆達多品で、塔の高さのことに付て、六八の数は四十八願の暗示であると  
お話したが、此品で憍曇彌の授記の所にも、將來の世に、當に六萬八千億の諸佛の法  
中に於て、大法師と爲るべしとあつて、六八の数が見へて居る。此亦提婆品と同じ  
く四十八願の暗示と窺はねばならぬ、即ち四十八願の第三十五願に、設たひ我れ佛を  
得たらんに、十方無量不可思議の諸佛世界、其れ女人ありて我名字を聞き歡喜信樂  
し、菩提心を發して女身を厭惡せん、壽終の後復た女像とならば正覺を取らじとあ  
る、この菩提心を發して女身を厭惡せん以下の所が、此品の經文、當に六萬八千億の  
法中に於て大法師と爲るべし、及び六千の學無學の比丘尼も俱に法師と爲らんの  
所と照應するのである。

發菩提心  
は苦しめら  
れた。

私が曾て大無量壽經のみを見て、まだ此の法華經に付て深く注意することのな  
かつた折に、右の三十五願の願文の意味を解するに苦んで、如何にしても佛意を測  
ることが出來なかつたといふは彼の願に、菩提心を發し女身を厭惡せんの文字が  
ある。此の發菩提心は容易ならざる文字で、大無量壽經でも、僅に十九願と上輩往  
生とに使つてある丈けである、外にも或はあるかも知れない、能く調べては見ない

が、若しあつたとすれば、それは十九願又は上輩往生の範圍であつて、決して十八願  
二十願、及び中輩下輩の往生關係には使つてない、必ずあるべき譯のものではない。  
然るに三十五願の女人往生の願に、發菩提心の文字がある、實に此の發菩提心の四  
文字の爲めに、大無量壽經全體に對する私の所見が纏まらないで、一方ならず苦し  
められたが、法華經を熟讀して、稍默契する所があることゝなつて、此の憍曇彌の授  
記の一節を見ると、ここに、諸佛の法中に於て大法師となるべしの文字があり、又次  
に、他方の國に於て、廣く此經を宣んの文字があり、此等と三十五願の發菩提心と照  
應あるに氣付て、初めて氷解する所があつて、手を拍つて歡んだ譯であつた、御參考  
までに申して置く。

安樂行品。

次に安樂行品である、此品は古來法華經の四要品の一に數へられてあつて、編素  
の區ちなく精讀に價するものである。併し古來之を四要品の一に數へ擧げた筋  
は、何の意味もなして居ないこと、取るに足らざる見方である。此品は文文句句  
金言に滿されては居るが、彌陀法と暗示上の關係の見るべきものは少ない。尤も  
此の安樂行品は、彼の法師品の三軌即ち如來の室、如來の衣、及び如來の座以下を敷

演したものであるから、約りは前諸品の如く法師品を通じて、藥王菩薩本事品へ投  
込れることゝなるので、其邊から見れば彌陀法として研究する上に付ても、深き關  
係を持つて居るのである。

此品は法に  
屬し智慧に  
屬す。

安樂行品の如何なるものであるかは、詳は末尾經文六七頁以下を披かれたなら  
判る次第であるが、先づお話しして置きたいは、法師品の三軌以下を敷演したものな  
れば、法師品と同じく藥王菩薩を對告者とせらるべき筈なるに、此品は文殊菩薩の  
請問に應じて説かれたのである。是は如何なる理由に基くかといふに、要言すれ  
ば此品は法に屬し智慧に屬するからである。藥王菩薩の關係のものは精進奮勵  
に屬するのである。僧の本分は精進にある。法と雖も智慧と雖も、精進の神魂がなく  
ては、活きて用を爲すことは出来ないものであるから、結局の往生に直接するものは  
精進にある。併し精進は至極賞むべきことではあるが、其一面に法即ち智慧が伴  
はないと、勞して效なきのみならず、或は折角の精進も損害を來すことがないと限  
らない、そこで精進を第一として、此に法即ち智慧を副せることになるのである。  
併しこれは見方に由るので、精進をも智慧の中に取込んで智慧を第一として、更に

五〇

一念に次ぐ  
行は如説修

差支がないのみならず、現に大無量壽經でも如是三昧智慧を上と爲すとある位で  
ある。尤も智慧を第一とせらるゝ場合は、多く佛の上に付て説かれてある。僧の向  
上の修行には、精進を第一とせらるゝ場合が多いのである。少なくとも法華經大無量  
壽經の立前では、精進を先きとせらるゝことになつて居る。

夫にしても彼の龍女成佛の如きは、智慧に重きを置いたので、一念大利に約して  
の成佛を極端に顯はしたものである。併し龍女成佛なるものは、初發心時便成正  
覺の義相に準じて考へねばならぬのであるから、此の成佛の一念に次ぐには、悉く  
如説修行を以て繼續せねばならぬのである。此邊の法華經的大無量壽經的主張  
を顯す爲めにも、こゝへ文殊菩薩の安樂行品を置かれた、深意があるものと知らね  
ばならぬ。

智慧光明  
如日之照。

であるから、此の安樂行品の終りに至つて、斯様に頌説されてある。

是の經を讀まんものは、常に憂惱なく、又た病痛なく、顔色鮮白ならん、貧賤卑賤  
醜陋に生れず、衆生見んと樂ふこと賢聖を慕ふが如くならん、天の諸の童子以  
て給使を爲さん、刀杖も加はへず毒も害すること能はず、若し人惡罵せば口則



ち閉塞せん、遊行するに畏れなきこと師子王の如くならん、智慧の光明日の照すが如くならん。

此の一節の如き、法華經に於ける常套の文辭に過ぎないと見做して、不注意に意なく読み去るべきものでない、彼の提婆達多品に於て、智積菩薩及び舍利弗の兩者が龍女の速疾得果に付き、不審非難の矢を放ちたるに對し、同品に於ては一の説明も與へてなかつた。そこで例の鈎鏢狀に中間に藥王勸持の一品を挟ましめて、品品排列の上には、滅後の弘教宣傳の方法を請問せるの筋を辿らせつゝ、一面には提婆品の速疾得果に、委曲の註脚を加へられたものと見るべきであらう。此の經文の衆生見んと樂ふ以下の如き、全く佛如來の功德を説きたるものと異なる所なく、試に佛如來とは如何なるもの歟の問を設けて、之に對する答詞に此辭句を以てして、更に差支はないであらう。遂には、智慧の光明日の照すが如くならんと高調されてある、又た遊行するに畏れなきこと師子王の如くならんとある、佛の具へた三十二相、八十種好、十方四無所畏も、此の辭句に盡きてゐるではないか。衆生見んと樂ふこと賢聖を慕ふが如く、天の諸の童子以て給使を爲さんと稱へられたは、至徳

優美、佛如來ならずして誰かこの果報を得べきぞ、要之全く佛如來の功德を説きたるものと異なる所なきものとすべきであらう。即ち吾人が法華經を讀む下に、この利益があるものとすれば、八歳の龍女の早速の成佛、更に疑を懐くに及ばないこととなるであらう。とはいへここはなかなか安心立命の上に、深き關係のある所であるから、信受と修行の經緯に付ては、徐に研究せらるゝ價ある所と思ふのである。

初發心時  
便成正覺。

この經緯に付き愚見の一端をお話すれば、喩へば田舎に放逸の生活に慣れた一青年が、一トたび志を立て、笈を負ふて郷關を出たとする、其の發心の一念に、腦裡の舞臺はがらり變つて、宰相を夢み、大學者を夢み、大工業家を夢み、謂ゆる初發心時便成正覺である。夫からは順序を履んで、向上向上と精進に精進を重ねた所に、所志を達するのである。併し實をいへば、慣された放逸を捨て、青雲の志を發した時に、既に所志は達したので、如何なる苦學慘愴も、彼の爲めには金殿玉樓と夢見られて居るのである。下宿屋の下女に足で蹴散らかさるゝ待遇を甘受しつゝ、滿天下を睥睨するの氣宇に増減はないのである。否、既に業に滿天下を救濟し盡して、

天下一人の不幸を訴ふるものもないまでに、理想の實現が夢見られて居るであらう。これは極めて不完全な譬喩であるが、法華經及大無量壽經の一念信受と、精進と、成佛の關係は、其全分とはいはないが、其幾分は右の譬喩に似通ふて居る所があらうかと思ふのである。釋迦の如きも此氣宇のもとに、舍利弗當に知るべし、我れ本と誓願を立て、一切の衆をして我が如く等くして異なること無からしめんと欲しき、我が昔の所願の如く今は己に満足せり、一切衆生を化して皆な佛道に入らしめたり、方便品と高調されて居る。兎も角優柔不斷は、大乘的佛法とは相容れざるものとして奮勵を望むのである。其奮勵の下に安心立命は期せずして得らるゝことであらう、智慧の光明日の照すが如くなるであらう。前に提婆品に於て、龍女成佛の速疾に對するの答辯は、安樂行品にあると申したこともあるに由て、此品に於て聊か愚見を開陳して、御參考に供したのである。

人に能あり  
不能あり。

以上は深く隠れたる所に佛意を搜りつゝ、お話をしたことであるが、文殊菩薩が此品で、後の惡世に於て是の法華經を護持し讀説するには、如何なる心行を以てすれば宜しいのであるかと問はれて、夫に對して釋尊が四法に安住すべしとして、護

た。

持説法に付ての身の持かた、心の置場所、平素の修養等、極めて用意周到に、彼の法師品の三軌以下を細説演暢されたは、前品までに於て、藥王菩薩の範圍に屬する、積極的に精進を以てする邁往勇進の一條は至矣盡矣であるが、之と同時に消極的に居常安住する所の法がないと、人に能あり不能あり、又時代に適あり不適あり、其鹽梅料理の標準がないことゝなつて、折角の精進も一向に用を爲さないことゝなるの虞がある。そこで藥王菩薩の勸持に次で、文殊が文殊の受持に屬する法を問はれたのである。法師品では唯三軌として精進を以てする輪廓のみを示されたのを、此品では智慧を以てする内容條件を、委しく説かれたのであると見るは、經文の表面から見ての正當の解釋である。

化身と夢。

尙念の爲めにお話して置くは、此品の終りに至つて、夢に言寄せて法華經受持者の得益が説かれてある。これが法師品では、佛が化人化身を遣現されての保護となつて居る。化身と夢、身を以て犠牲とする精進には、之に配するに化身を以て保護することが説かれ。智慧を以て鹽梅する意業の安樂行には、夢に言寄せて得益が説かれてある。何處から何處までも佛意を取損なはぬように細に注意が拂は

れてある。

其淵源は法師品

夫れから法師品では、三軌の下に、諸の菩薩及び四衆の爲めに、廣く是の法華經を説くべしとあるを、此の安樂行品では、反顯的に、國王に親近するな、外道に親近するな、婦女子に親近するな等と、諸有階級を一一に擧げて、親近することの進退が示されてある。卒爾に見ると法師品の三軌以外に奔出して居るようでも、熟讀せられたならば、私の所見に首肯せらるゝことであらう。前に法師品と藥王菩薩本事品が、正宗中心分の淵源となり歸結をなして居ると申して置いたが、此品も同じく其淵源の法師品にあることを遺れてはならぬ。而して法師品を通じて、並に提婆達多品を通じて、結局は藥王菩薩本事品に投込まれることゝなるであらう。

#### 四 出世本懷 其十三 (從地涌出品) (如來壽量品)

從地涌出品

次に從地涌出品である、扱て法師品以來寶塔品、提婆品、勸持品、安樂行品と、法華經に一貫せる深き佛意を剔抉してお話したことであつたが、之を單に表面から見ると、法師品以下安樂行品に至るまでは、法華經の普及流通を圖られたもので、法師菩薩

九六

九七

薩に對してこの普及流通に従事すべきを、勸められたものと見ることが出来る。それで古來その表面に顯はれた所を捉へて、法師品以下安樂行品に至るまでは、流通分であるとして、科段を截つたものであるが、之は甚だ皮想に捉へられたことであつて、前にもいへる如く、法華經では阿彌陀佛の名號を開きての、一念信解を迷悟順逆の分水嶺として、其に次々には勇往邁進の菩薩行を以てしなければならぬこととなつて居る。菩薩行といふは、上み菩提を求め下も衆生を化益するにあるのであるが、何物を以て衆生を化益するかといへば、法華經の普及流通を以てする外はない。それで法師品以下に勸説されてある流通は、流通の爲めの流通ではない、菩薩行としての流通であると思ねばならぬ。されば古來此等を流通分としたのは、其枝末を捉へて之を本分と錯つて名けたので、其根幹を以てすれば菩薩行分とせねばならぬ。果して菩薩行分なれば、教菩薩法たる法華經に於ては、即ち中心正宗分でなければならぬことゝなる。私が多寶佛の出現と相待て、法師品以下を正宗分とするの理由の一つはここにあるのであるが、深く注意することなしに文の表面から見ると、如何にも流通を圖るに急なるものがあつて、其流通を以て塗潰

されて居る。此邊も例の法華經式とでもいふべきか、容易に眞意が見出し難いよ  
うに、態と人を傍路へ引込むような手段が施されてある。

我は久遠の昔に成佛せ  
る。佛であ  
る。

そこでこの從地涌出品の如きも、其流通から縁を引、法華經流通の任に當るべ  
く、大地が振裂して、無量千萬億の菩薩摩訶薩が同時に涌出することになつて居る。  
是を目撃した彌勒菩薩が、如何にしてこの喻へ方のない、大數の菩薩が居られるか  
と不審せられたに對し、我は久遠の昔に成道せる佛である、久遠の昔から教化開導  
したるが此の大數の菩薩である、四十餘年前尼連禪河邊の菩提樹下に、佛の悟を開  
いたと見るは凡夫低級の觀察である、と威丈け高になつて説かれるのが、此品に次  
ぐの壽量品である、併しこれは表を飾る紋様に過ぎないので、實は前品まで、藥王  
の僧寶、文殊の法寶が終了したので、これから佛寶の説法が始まるのである。夫で  
此品も解説するとなれば其價あることは多々あるが、彌陀法として研究する上か  
らいへば、今の場合強ての穿鑿を要しない、阿彌陀佛の名は隠してあるが、悉く其本  
願を宣揚さるゝのであるから、唯佛智の不思議として奉信するの外はないのであ  
る。惟り此品のみでない、今後の諸品は多くはそうである、尙此事は更めてお話し

る。

品。如來壽量

次に如來壽量品である、此は釋迦牟尼たる佛、如來の壽命無量を説かれた品であ  
る。或は伽耶城に誕生を現し、或は雙林樹下に死滅を示すは、一の方便たるに止ま  
つて、其實佛の壽命は無量壽であるとして、其事を細説されたのである。古來法華  
經中での最大要品と見做されて、高僧達が腦髓を絞つた所である。如何にも最要  
といへば最要である、佛の壽命が無量であり、佛の光明が無量であるので、始めて佛  
法は宗教ともなり、一切の問題を解決して、安心立命を與ゆる事が出来るのである。  
若し壽命と光明が比較的のものであつたなら、問題の解決も比較的のことたるに  
止まつて、絶對的に安心立命の與へられよう筈はない。絶大の力と絶大の熱を以  
て臨む所に、プラチナも黄金も、巖石も土壤も、悉く溶解し盡して油を流したような  
ものとなつて、金銀銅鐵、山河草木、そこには一の差別も高低も見ることの出来ない、  
トロ一平等の油を流したよふな世界が現出して、誠に最後の解決を與へることであ  
らう。即ち復た貪欲に惱まされず、亦復た瞋恚愚癡に惱まされず、亦復た憍慢嫉妬  
諸垢に惱まされず、菩薩の神通無生法忍を得んの、平等無差別の妙境界が現出する

更に理想的  
利土の造  
出。

併し如上は一分の譬喩である、まだこれが最後の解決ではない、更に理想的利土を造出するの問題が残つて居るが、差別高低を拂拭するを、理想的利土造出の第一著として、其所に無量壽無量光の、絶對的大威神不可思議の佛力に由つて、吾人妄執の疑塊が溶解さるゝと共に、又自ら上み菩提を求め、下も衆生を化益するの大慈悲の湧起するあつて、遂には三十二相、八十種好、十力四無所畏を具したる、佛果を贏得するの彼岸に達することであらう。

此等は信仰  
問題であ  
る。

右様の次第からして、佛の壽命の無際限なるを説かれたる、此の壽量品なるものは、極めて重要な一品とせらるゝので、惟り法華經に於て要品たるに止まらず、佛經を通じての第一義を説かれた要品と見ねばならぬ。其要品たるに於ては更に議論のなきことであるが、此等は悉く信仰問題に屬すること、學術としての研究問題ではない。天地宇宙の間に於て、法爾として大偉力不可思議力の阿彌陀佛の在すことは、信仰問題である。若し夫れ之が存在如何と、懷疑の下に研究の歩を進めんとせば、それは法華經の上に、將た大無量壽經の上に求むべきでない。進歩し

如何にして  
虚徹靈通し  
得る。

て息ざる現代の學術と交渉を持しつゝ、有神論無神論、神格神力論等の如き問題の下に、研究を重ねべきである、釋迦の經典の上、少なくとも無量壽、法華兩經の如きに於て、佛の神力即ち壽命無量、光明無邊を説かれてある如きに向つて、複雑を究めたる義相を編み作して、手に取て見たものでもあるかの如く、無暗に研究の態度あるは、今日の時代となつては、全く徒勞に屬することのようと思ふのである。

此邊の思想は、古昔の學僧達と私の考とは、大に距りがあるように思ふのである、従つて此の壽量品を見る上に於ても、其影響を免れないことであらう。是の如きは或は現代の教僧方とも、大に考を異にすることであらうとも思ふのである。又余りに思切の能さ過ぎる話となるかも知らないが、私が惟ふには、假りに法界宇宙の大偉力者、即ち阿彌陀佛に斷見を持し、疑を挟む人士があつたとすれば、此等はすべて斯經化益の範圍外の人として置いて、之を肯定する人のみを一團として、扱て吾人は如何にして其大偉力と虚徹靈通し得るか、光明懷裡の人となるには如何なる信仰を以てすれば能きか、と此事が斯經に向つて問ひたいのである、恐く佛意もここに在つたのであらうが、今日吾人の胸裡に往復するの喫緊問題は、こゝであら

うと思ふのである。先づ此の肯定者の一團に安心立命を興へ得る、大宗教が成立したならば、之に疑を懐く斷見者流も自ら勸化され、或は又た誘引することも出来るであらう。

五品に重き  
いが置きた

佛の經典を見るとして、余りに時代思想に捕はれ過ぎて居るかも知れないが、少くも私は如上の見地の下に立つて、法華無量壽兩經が見たいのである。従つて中心正宗分たる十四品に於ても、殊に法師品以下安樂行品に至る、五品に重きが置きたいのである。如何となれば、法界宇宙の大偉力者たる阿彌陀佛との交渉は、悉くとはいはないが、殆んど彼の五品に説き盡されて居ると思ふからなのである。本より常不輕、妙音及び普門品の如き、亦吾人日常の心得として大切なるものではあるが、此等は何れかといへば傍系に屬するもので、其中心根幹となるは上の五品であるといはねばならぬ。此の五品を信條として立つの宗教家があつて欲しいのである、恐く釋尊も此の意向を以て法華經は説かれたのであらう。前にもいへる如く、最後の普賢勸發品に於て、普賢が如何にして法華經を我物にすることが出来るかと問はれたるに對して、分別功德品に於ける一念信解を以て答へられずして、

1011

複雑なる點  
は少ない。

法師品に説かれてある、四法を以てせられた一條に由つて見るも、十分に佛意の所在は分つて居る。併し其四法を以てせられたが、實は一念信解を以てせられたのである、一念信解を叩き出すのも、一念信解を支持するのも、四法を勸勵する上にあるのである。度度申すようであるが、こゝが無量壽法華兩經の網格であるのである。それで前の涌出品以下此の壽量品はいふまでもなく、囑累品に至る八品は、主として佛寶に屬することが説かれてあつて従つて佛の不思議力、又は有り難ひ功德等が詳細に示されてあるが、大無量壽經との交渉及び藥王菩薩本事品との關係も、複雑なる點は少ないのである。唯經文の上に見へた義相を、法華經は彌陀法なり、と心底を固めての上から見れば、多く勞することなくして、彌陀法なることが瞭然たるものがあるのである。古來法華經が彌陀法と關係あることを稱道した人は澤山あるが、夫等の多くは先づ壽量品の上から見て居るのである。

其淵源は法  
師品。

併し法師品との關係が全然無くなつた譯ではない、法師品は中心正宗分の淵源をなして居るとは、前にもいふたことであるが、此の壽量品に於て、如來世尊として佛寶を高調さるゝのも、其の伏線は寶塔品に在る。寶塔品に於て釋尊が寶塔中に

多寶佛と座を分けて結伽趺坐せられた所に、佛高遠に坐し給へりの文字がある。此時釋尊の資格が平素の資格とは變つたので、即ち高遠なる彌陀の本地に合坐せられたのである。

諸佛如來は法皆な是の如し。

夫で此の壽量品は彌陀の本地に坐し、而して釋迦の職責ともいふべき、設化を説かれたものである。尤も釋迦の設化といふも諸佛の設化といふも、彌陀本地内の作用に過ぎざるは、いふまでもなきことではあるが、淨土に報身の姿を現はして、十方衆生を攝取せらるゝが彌陀であつて、各處に應現して、衆生を教化利導せらるゝのが、釋迦及諸佛の設化となるのである。此品に、諸佛如來は法皆な是の如し、(末尾經文八二頁八行)と説かれてあるは、こゝの次第を約言されたのである。

而して又た其寶塔品の淵源が、法師品にあることは、前に寶塔品に於て委しくお話ししたことである。されば涌出品以下佛寶を説かれる諸品も、辿り辿り溯つて見ると、其淵源は法師品にあることゝなつて居る。此亦法華經を彌陀法として研究するには、見逃すことの出来ない一要事である。

慧光照無量壽命無數劫

彌陀の本地に坐しつゝ、釋迦としての職責即ち設化に付て、縱横に説盡された後

に於て、我が智力是の如し、慧光照すこと無量に、壽命無數劫なり、久しく業を修して得る所なり、(末尾經文八五頁十一行)と説かれたは、彌陀の本地に歸結されたので、即ち無量壽無量光の阿彌陀佛となられたのである。古來法華經の本體は阿彌陀佛であるといふ説を立てたに付ては、此の偈頌を所據として見たものである、見方に間違はないが、單にこれだけでは羽翼が揃はないから、どうにも議論は出来る。尤もこれには藥王菩薩本事品の彌陀淨土の往生者、及び普門品の觀音の利益等も、取入れての立論であつたとしても、要之水掛論で、絶對の論結には遠き距離があるとせねばならなかつたのである。併し上の偈頌を阿彌陀佛と見るは、阿彌陀經に於て光明無量故に阿彌陀と號す、壽命無量故に阿彌陀と名く、と説かれたると相待て、阿彌陀佛なることは、無論疑ふの餘地はないのである。此の壽量品に於て釋尊は全く彌陀の本地に坐しつゝも、能く自らの職責は設化利導にあるの意義を失はせられざりしことは、前卷一三〇頁以下に於て述べた所を参照されたいのである。

感得觀想の淨土。

此の壽量品に於て、靈鷲山を釋迦の淨土とせられ、其淨土及己身の不滅を説かれる邊に於て、ややともすると勘違をして、大に熱度を高める如き虞れがあるが、此等

は信仰上の感得觀想の上から説かれたもので、何うの斯うのと深く攻究すべきものでない。次の分別功德品の深信解相の下を見ると。

善男子善女人、我が壽命長遠なるを説くを聞て、深心に信解せば、則ち爲れ佛常に者、閻嶠山に在て、大菩薩諸の聲聞衆の圍繞せると共に説法するを見、又た此の娑婆世界、其地瑠璃にして坦然平正に、閻浮檀金以て八道を界ひ、寶樹行列し、諸臺樓觀皆な悉く寶を以て成じて、其の菩薩衆咸く其中に處せるを見ん、若し能く是の如く觀ずること有らん者は、當に知るべし是を深信解の相と爲す。

と説いてある。此文と引合して考へられたなら思ひ半に過ぐるであらう、此邊のとは深く論議すべきものではないから、佛神通の不思議として慎重に諸君の判斷を望むものである。

#### 四 出世本懷 其十四 (分別功德品)

分別功德品

次に分別功德品である、此品は佛寶を説かる、諸品の中、注意すべき要品である。殊に彌陀法として法華經を見る上に於ては、此品に過ぎたるはない。或る意味を

以てすれば、大無量壽經の根本法は、此品にあるともいふことが出来るかと思ふ位である。即ち上の壽量品に於て、佛の無量壽無量光なるを説かれたのであるが、其佛の無量壽無量光なる名字を聞き、及び其名字の言趣に隨順して、如法に修行するの功德を分別し顯示されたのが此品である。

時間空間を拂拭して。

扱て其功德を説かる、に付て、佛眼を以て世相時間を拂拭し、平等大慧の下に此の功德を説れたが、時に世尊、彌勒菩薩摩訶薩に告げ給はく、阿逸多、我れ是の如來の壽命長遠なるを説く時、六百八十萬億那由他恒河沙の衆生無生法忍を得、復た千倍の菩薩摩訶薩ありて聞持陀羅尼を得と曰ふより、下、八世界微塵數の衆生ありて皆な阿耨多羅三藐三菩提心を發しつゝまで、ある。(末尾經文八七頁二行より同頁十

時間空間的に

次に衆生の一念信解に約して、時間空間的に如説修行の下に此の功德を説れたが、爾の時佛、彌勒菩薩摩訶薩に告げ給はく、阿逸多、其れ衆生あつて佛の壽命の長遠なることは是の如くなるを聞て、乃ち能く一念の信解を生ずるに至る、得る所の功德限量あることなけん」と曰ふより以下、最終の佛子此の地に住すれば、則ち是れ佛受



此所にも六八の数字。

用し給ふ、常に其の中に在して經行し、及び坐臥し給はんに至るまである。それで第一の世相時間を拂拭して、如來壽命の長遠を説かれたるの大法利を高く調された一段は、凡慮の及ぶ所に非ずとして、隨喜するの外ないことである。經文の上に於て注意すべきは、此所にも六百八十萬億と六八の数字がある、此亦た四十八願と聯絡を持つを暗示されたものである。大法利中無生法忍及び陀羅尼を得るは第三十四願に、不退の法輪及び清淨の法輪を轉ずるは第四十八願に、八生乃至一生に阿耨多羅三藐三菩提を得るは第三十六願に當るのである。ここには参考の爲めに、大無量壽經から其願文を抄録して置く、願文を見て疑を懐かる、方もあらうが、之が釋明は大無量壽經に復へりて、四十八願のお話をする時に於てすると、して今は省略する。

第三十四願に曰く、設ひ我れ佛を得たらんに、十方無量不可思議の諸佛世界の衆生の類、我名字を聞き菩薩の無生法忍、諸の深總持を得ずは正覺を取らじ。

第三十六願に曰く、設ひ我れ佛を得たらんに、十方無量の諸佛世界の諸菩薩衆、我名字を聞けば壽終の後、常に梵行を修し佛道を成ずるに至らん、若し爾らば正覺を取らじ。

第四十八願に曰く、設ひ我れ佛を得たらんに、他方國土の諸菩薩衆、我名字を聞き即ち第一、第二、第三法忍に至ることを得ず、諸佛の法に於て即ち不退轉を得ること能はずば、正覺を取らじ。

是の如き菩薩其國に充滿せん。

第二の一念信解の下に、如説修行を説れたの一段は、輕輕に看過すべからざる所で、吾人の淨土往生の心行を綜説されて餘すなきの要文である。但し此の法華經は教菩薩法であるから、法華の法門は我々の企及すべき所でない、と謂はる、方があるであらう、現に古來の解釋は多く此の傾きとなつて居るが、是は私の考は根本的に違ふので、今日の如く教育が普及し、労働が向上しつゝある時代となつては、僧侶の方はいふまでもなく、在俗信者と雖も其多は菩薩であるの、意氣を以て掛りたのである。今こゝで委しく論ずるの餘地を持たないは残念であるが、佛の正意は必ずこゝにあることを信じて疑はないのである。とはいへ如何なる凡愚底下も、彌陀佛の救の網に洩れはしない、寧ろこれが正客たることは無論であるが、佛の理想とせらるゝ所は、國民舉げて菩薩たり得る黄金世界にあるので、舍利弗の懸記(譬喩品)質直無偽にして志念堅固ならん、是の如き菩薩其國に充滿せん」と説かれた

は、其理想の實現を期せられたのである。九重雲深く天子を奉り上げて、庶民之を拜せば普とならんとしたる、階級時代の宗教ならばイザしらず、天子に招かれ天子に謁し、所見をも開陳すべく、向上思想に充ちたる今日に於ては、十信十住十行十廻向十地等覺の階級制は、佛法の上から撤去したいと思ふのである。

歡喜信樂受  
持讀誦

夫で今申した一念信解の下に分別顯示された功德は、一念彌陀佛に歸投した後  
に於ける、心行を説かれたものとして、法華無量壽兩經を奉ずる人士は、服膺せねば  
ならぬ事柄であるはいふまでもなきこととして、扱てこの、其れ衆生あつて、佛の壽  
命の長遠あることは是の如くなるを聞いて、乃ち能く一念の信解を生ずるに至る、得る  
所の功德限量あることなけん、の文節と、大無量壽經の、其れ彼の佛の名號を聞こと  
を得るあつて、歡喜踊躍し乃ち一念に至らん、當に知るべし此人は大利を得と爲す、  
則ち是れ無上の功德を具足するなりとある文節と、同旨趣のものであるは明白の  
ことであるが、大無量壽經には此文に次で、是の經法を聞き、歡喜信樂し、受持讀誦し、  
如說修行すべし」としてある。是れが僅かに十數の文字ではあるが、法華經に於て  
一念信解の下に細説された、功德の全體を略言されたので、法華經には細かく廣く

説かれてはあるが、要之、何かに況んや、廣く是の經を聞き、若は人をしても聞かしめ、  
若は自ら持ち、若は人をしても持たしめ、若は自ら書き、若は人をしても書しめ、若は  
華香蘇燈を以て經卷に供養せんをや、是人の功德無量無邊にして、能く一切種智を  
生ぜん、(末尾經文九二頁三行)の一節に歸するのである。而して又、も一つ之を要約  
すると、歡喜信樂、受持讀誦、如說修行の、無量壽經に於ける十二文字に過ぎないこと  
となるのである。試に末尾に掲げたる經文に依つて、能く前後を熟讀して見られ  
よ、ぐるぐる旋しに説かれてはあるが、約る所にここに歸著して居るは、議論の餘地の  
ないことである。

但此の信樂  
の二字は。

但此の信樂の二字は、法華經にも其意義がないではないが、大無量壽經に於て深  
き意義を爲すのである。此の事は、大無量壽經に立脚して法華經を見る人は、篤と  
心得て置かねばならぬことである。であるから、受持讀誦歡喜修行の文字は引切  
なしに遣はれてあるが、信樂の文字は見へてゐない。信樂の文字は、嚴格にいへば  
十八願に基いた文字であつて、十八願の機類と雖も、法華經の救の綱に洩れて居る  
譯ではないが、其意義の全きは、大無量壽經にある。併し前にもいふ如く、現代とし

ては民衆の多數は、十九願二十願の機類、即ち直接間接に衆生救済の大義務を盡すべき人達である、と見做して掛ることが、向上心潑刺たる時代適應の行方ではなからうかと思ふのである。尤も此邊は單純に論去すべきものでないことは、含まれて置かれたい。

世間諸有の法に超過

所で大無量壽經に見へて居る、受持讀誦の文字は、法華經と對照して見れば、主として他人の爲めに解説するに付て謂はれたものであり、又如説修行は主として六度修行であることが分かるとして、一念信解の後に於ける、信仰者の心行如何は、其委しきを知らんとせば、法華經に依るべきである。法華經を讀み了つた上で、大無量壽經を見れば、寸毫も意義に於て足りない所はないが、法華經は如何にも巧みに、大模様に、段取よく説かれてある。尤もこれは向上積極的に見ていふことであつて、若し消極的に即ち十八願の機類を主としていふ日には、凡愚底下をして登高自卑的に、度世泥洹を獲せしむるの大用は、法華經では見當ることは出来ないとせねばならぬ。大無量壽經の序分に之を贊して、世間諸の所有の法に超過し、心常に度世の道に誦住せりと記されたるは、誠に其所以あることであるのである。

殊の外なる精巧の紋

終に臨んでお話ししたいのは、此の品の最後の一段である。是は要文も要文であるが、如何にも説相が巧に仕組まれてあつて、彌陀法として研究する上に於て、見逃すことの出来ない所である。こゝに經文を掲げる。

况復持此經

兼布施持戒

恭敬於塔廟

常思惟智慧

若能行是行

忍辱樂禪定

謙下諸比丘

有問難不瞋

功德不可量

不瞋不惡口

遠離自高心

隨順爲解說

試に此の偈頌を解剖して見ると、首めの「況んや復た此經を持つての一句は、承上起下に過ぎないとして取去つて、兼て布施持戒し、忍辱にして禪定を樂ひ、瞋らず惡口せずの三句と、次次の「常に智慧を思惟し、問難することあらんに瞋らず、隨順して爲めに解説せん」の三句は、安樂行品に基きて、法軌として據るべき所を頌したのである。故に常に智慧を思惟すと、智慧に重きを指くの文字を入れて、文殊の安樂行品

なるを聯想せしむるに、注意が拂はれてある、約り安樂行品を頌したのである。而して右兩側に於ては精進の二字が除かれてあるが、布施持戒、忍辱精進、禪定、智慧と六度を擧ぐべき筈なるに、精進の二字が除かれてある、これは理由あることで、乃ち右の三句と三句との中間に、塔廟を恭敬し、諸の比丘に謙下して、自尊の心を遠離し、の三句がある。所で此の塔廟に恭敬し、の一句は、藥王菩薩の精進を頌したもので、藥王菩薩最終の精進は、臂を燃して塔廟を供養せられたのである。次に、諸の比丘に謙下し、は、常不輕菩薩の精進を頌したものである、常不輕菩薩品に、釋尊が宿世に於て常に諸の比丘を輕視せず、汝等當に作佛するを得べしと云て、諸の比丘に謙下されたことが説かれてある、即ち其事を指したのである。次に、自高の心を遠離しとは、提婆達多品の事實を頌せられたものである、之は提婆品で詳しくお話した如く、壽命無量の國王でありながら、一貧仙の爲めに自高の心を遠離して、汲水拾薪の苦行を敢てせられたのである。此等の事實が悉く僧としての精進の模範を示されたので、態と精進の二字を兩側の六句から除いて、中軸の三句に精進の事實を列擧された所に、大に精進の最も重んずべきを示されたこと、なつて居るのであ

る。而して精進の權化は藥王菩薩であるとして、其精進を中心の三句に措き、兩側を包むに文殊の智慧を以てし、茲に此の一節を佛寶の功德を宣揚せられたる、此の分別功德品の終結に措かれたるは、佛意の幽玄と相須つて、文章の巧緻亦た計るべからざるものあるに、驚かざるを得ないのである。そこで佛法僧の三寶、悉く擧げて藥王菩薩本事品に、投込まれたるものとも解せられ。又或は各品擧げて此品に取込みて、慧光照すこと、無量に、壽命無數劫の阿彌陀佛に、歸還せしめたと見らるゝであらう。要之法華一經、悉く彌陀法なるを、文字の外に於て、闡明ならしめんとして、殊の外なる精工の紋様を織出されたるは、轉た佛意の深大を感謝するの外ないことで、あらう。

四十八願に  
落著いて。

而して次句に、若し能く是の行を行ぜば、功德量るべからずと一念信解の下に精進智慧を結ばれあるが、此の功德の現はれの上から、世相時間を拂拭して見ると、此品の劈頭に説かれた大法利となるのである。其大法利は如何なる所へ落ち著くかといへば、即ち彌陀の四十八願に落著いて、彌陀淨土の往生者となるのである。六百八十億那由他衆生云々の六八の文字に、四十八願が寓してあることは、前に詳

しくお話しした如くである。

以上此品に顯はれたる所を綜合して佛意を窺ふて見ると、佛壽の長遠即ち無量壽無量光の御名を聞き、從來差別と疑惑の念にのみ鎖されたる我等が、我等の前に大偉力不可思議力無量壽無量光博厚高明悠久無疆の、天地の大道が横はれるに氣付いては、從來久しく徒らに差別疑惑にのみ心慮を悩したりし事の、甚だ價値なかりしことに思ひ到り、一念信解と彌陀部内に一步、足を踏み入れた、其一念の刹那を分水嶺として、今まで差別疑惑の妄執の谿へ流れて、鬼畜の海にのみ注いだ邪見の心水が、爾後は局面一變、平等信解の智慧の淵を辿つて、其濫觴は見へつ隠れつ、木の葉下た這ふ溪溜ながらも、佛の慈潤の加はるに從ふて、やがては舸をも浮べ人も渡すの大河となり、遂には佛の大智海に轉入するの順序となり。扱て其心行はと問ふものあらば、一念信解の後に於ては、法師品(僧)安樂行品(法)及び此の分別功德品(佛)を主要なる目標として、委しくいへば法華二十八品撓まず亂れず、一步一步踏みしめ、踏みしめ進取すべきを教訓された、佛意の深い所を測ることが出来るよふに思ふのである。度度申すようであるが、私が見る無量壽法華の兩經は、どこどこ

までも此外に出ないのである。但し不幸にして修行の資格なき境遇にある人は、佛の名字を唱念しつゝ、佛恩の深きを歡喜信樂しつゝ、光明懷裡の人となるは、此亦平等大慧の働きである、救の網の正客である。

一切法等。

尙心に銘して忘れてならぬは、修行進取の人と雖も、常に一切法空に坐することである、之を極めて低級に引下げて謂へば、善導の所謂「自身は現に是れ罪惡の凡夫、曠劫より己來常に没し常に流轉して、出離の縁あることなし」と捨て身で掛る所にあると思ふのである。之と同時に提婆達多品に。

此の諸の菩薩、皆是れ文殊師利の化度せる所なり、菩薩の行を具して、皆共に六波羅密を論説す。本と聲聞なりし人は、虚空の中に在て聲聞の行を説く、今は皆な大乘の空の義を修行す。

と説かれたるは、之を極めて高く引上げて本筋に説かれたものと考へるのである。此の國家多事の際に處するの宗教家は、三省に吝ならざらんを希望して止まざる所である。

御苦勞でも  
今一と廻り  
は。

所で此品の上に付てお話しすることも、此位で止めておきたいのであるが、此次に

隨喜功德品、法師功德品、常不輕菩薩品、如來神力品、及び囑累品の諸品が残つて居る、此等に付ては特に指摘してお話する程の要關を認めない、蓋し佛意に於ても此品に於て、微妙甚深の彌陀法は宣揚し高調し盡されたのであらうと思ふ。今後の品は、唯彌陀法なりとの確信の下に、翻見せらるれば宜しいので、上來の釋明に拘はらず、此上尙法華經を彌陀法とするに付て疑ある人は、徒に因襲の見惑に捕はれて、未だ宿善の開發せざる、即ち宿王華菩薩とならざる不定聚の人として、御苦勞でも今一ト廻りは、諸有に流轉の身とならるゝ外はないものと見るべきであらう。夫で中心正宗分の各品に付ての研究は、次に藥王菩薩本事品に付て少のお話をするに止めて、後段よりは第二卷の話が、りに復りて、化城喻品に付て愚見を開陳することにしよう。

#### 四 出世本懷 其十五 (藥王菩薩本事品)

藥王菩薩本事品

藥王菩薩本事品であるが、此品は此の法華一經の歸結となるべきもので、法華經を受持した衆生が、阿彌陀佛國へ往生を遂ぐべきことを説かれたる要品である。

毎にお話した如く、法華無量壽兩經の網格は精進奮勵にあるので、萬事の解決を努力の上に求めんとするのである。宇宙に磅礴たる無量壽無量光の大偉力は、我他彼此の差別疑念を去り、大道に隨順し、精進奮勵以て休息せざるの處に、救ひの御手を下げらるゝのである。分けてこの法華經は、教菩薩法として題せられて居る程であるから、徹頭徹尾精進を勸獎され、精進を以て法華一經の生命とせられてある。而して其生命たる精進の結晶體は、藥王菩薩であるから、自然此の藥王菩薩本事品は、此經の生命此經の歸結とせらるゝ譯となるのである。

果して然らば、即ち法華經の生命ともいふべき要品であるならば、多寶佛の現身中にこそ説かるべき筈ならんに、閉扉後に至て説かれたるは如何といふに、法華經に於る中心正宗の説相は、或る必要上から(此事は前にお話した)其第一義を顯すには、専ら微言暗示を以てせられることになつて居るので、其爲めに多寶塔を開て、多寶佛身を現すの寓意、即ち大信力專注の寓意が入用であつたのであるが、單に暗示のみで、以て此經が終らるゝことゝなつては、末世に至り遂に佛意の深玄を知ることなしに、看過するの<sup>不</sup>手際を<sup>主</sup>せんことを虞れられて、こゝに暗示を啓いて、阿彌

單に暗示の  
みでは。

陀佛國の往生を顯説されたのである。そこで暗示は多寶佛現身中の説相であるとすれば、顯説は多寶佛身閉扉後ならざるべからざる譯となるのである。

法華一國を  
擧げて

夫にしても、釋迦所説の法華經が眞實なるを證明するの役目を擔ふの多寶佛であつて、殊に此の彌陀法の顯示には、滿腔の共鳴を保持して居らるゝ多寶佛であるから、其責任を果す爲め、且つは共鳴を表する爲めに、此の藥王品を説き終られた時に於て、寶塔扉裡奥深く、善哉善哉宿王華、汝ぢ不可思議の功德を成就して、乃ち能く釋迦牟尼佛に此の如きの事を問ひ上りて、無量の衆生を利益すと讃言を發せられたのである。前に多寶品で委しくお話しした如く、多寶塔は法華經である、多寶佛は法華經の神髓であるとしての、多寶佛の讃言は甚だ重き意味を爲すであらう。即ち法華經を擧げての讃言である、法華一國を擧げて彌陀佛に殉じた容ちとなるの、讃言であるとせねばならぬのである。

羊頭を掲げ  
る。狗肉を賣

此の藥王菩薩本事品は、古來大に粗略に取扱はれて、天台の文句初め、其他の註疏家か皆な牽連れて、殆んど全品を素通りして居るのであるが、實以て言語道斷なる譯で、何の爲めに學問されたのか、何の爲めに信仰せらるゝのか、靈山聽法とか法華

世紀の變遷  
を背景とさ  
れてある。

三昧とか、道具立の堂々たるに似もやらず、法華經を見るの粗漏放漫なる、唯徒らに曲解に汲々として、自己の主觀に引き著けんことをのみ努め、洵に羊頭を掲げて狗肉を賣るとは、此事ではなからうかと思ふのである。

此品は大に意味深長なるものがあつて、菩薩としての心行は此品に盡きて居るはいふまでもなきことであるが、大信力を持ち、眼光を紙背に透して視ると、其菩薩の心行、即ち上み菩提を求め下も衆生を化益するに付て、世紀の變遷を背景とされてある。即ち衆生を化益する上に於て、時代思想を考慮すべきに付き、剴切なる教訓が與へられてあるに氣付かるゝのである。

不思議業相  
と智淨相。

夫が又起信論の義相と歩調を同じくして、體相用の三大に當嵌ることが出来るのであつて、爾の時に一切衆生喜見菩薩佛の滅度を見て、前卷經文二〇頁十行といふより以下は、同論に於ける心生滅門の隨染本覺と義趣を同くしたものである。即ち、八萬四千の塔の前に於て、百福莊嚴の臂を然すこと、七萬二千歳にして以て供養す、とある邊は、不思議業相に當り、我れ兩の臂を捨て、必ず當に佛の金色の身を得べし、若し實にして虚しからざれば、我が兩の臂をして還復すること故の如くな

ら合めん、是の誓を作し已つて自然に還復しぬ斯の菩薩の福德智慧の淳厚なるに由つてなり」とある邊は智淨相に當るのである。

起信論の義相と歩調を同じくすることは、斯くお話したのみで、之に解説を附せずしては、諸君に於て會得し兼ねられること、思ふが、之に解説を附するとなれば、又復た此卷でも兩經の比較研究を終ることが出来ないこと、なる。實は斯ふまで長くなるものであつたならば、前へつ方に於て少し注意するのであつたが、今となつては致方がない。併し此の法華經と大無量壽經との研究に付ては、尙黙止すべからざることが多々あるのであるから、近き將來に於て如何なる方法を以て、愚見を詳にしたいと思ふのであるから、今回は起信論との交渉は上述した所に止めておいて、他の點に移つてお話ししよう。素養のある方は、少し御研究になつたら、講演までもなく合點せらるゝ所があるであらうと思ふのである。

但し是丈けの事は承知して置かれたい、此品に於て菩薩の心行を説かれたに付て、世紀の變遷を背景とせられ、起信論の緣起法と歩調が同じくなつて居る如きの大模様が此品の裏に藉かれてあるのは、只の徒事ではない、此品が即ち法華經全體

是丈けの事は承知して  
い。おっ、れ、た

であるからなのである、約り此の一幕の中に、三番叟から大切まで、缺くる所なく調へられてあつて、其調へられてある藥王品に於て彌陀の淨土往生を宣揚するの容ちは、取も直さず此の法華經を提げて、彌陀の淨土へ歸投するの、佛意に他ならざること承知しておかれたい。

夫が又た奇の至りといふは、提婆達多品と趣きを同じくしておるのである。提婆達多品の文殊龍女の段が、序品に於ける八王子の言葉を取入れて、起信論の心生滅門の三大と歩調を同じくして居ることは、同品に於て委しくお話ししたが、又此の藥王品の藥王菩薩の精進供養の模様が、起信論を以て標尺として解釋することが出来るように、仕組まれてあるといふは何事であらうか。而して提婆達多品に於て、妙法蓮華經の提婆達多品を聞いて、淨心に信敬して疑惑を生ぜず(中略)若し佛前にあらば蓮華より化生せん」として、彌陀佛國の往生が説かれてあると同じく、又た此品に於て、是の藥王菩薩本事品を聞かんものは(中略)蓮華の中の寶座の上に生ぜん」として、彌陀佛國の往生が説かれてある。前に提婆品に於て、提婆達多品が法華經の全體であると申したが、夫と同様に此の藥王菩薩本事品が、又た法華經の全體で

夫が佛意の表徴である。



あるといふことになる。且つ提婆品が文殊、智積、舍利弗の三大智囊に由つて彩られてあるに對して、此品には五百七十言の大文章を以て、斯經の絶妙優秀なることが高調されてある。而して全く文字の上からは隠れたる義趣に於て、提婆品が起信論と關係を持つて居ると同様に、此品も亦起信論と緣起の次第を同じくして、始中終の順序が整ふて居る。どう考へて見ても此等のこと、奇縁といふべきか、奇遇といふべきか、全く一の謎であるといふの外なきものであらう。併し奇縁ではなからう、奇遇でもなからう、又謎でもなからう、藥王品と提婆品に於て此の繡紋が織出されてあるは、斯經の全體が彌陀佛國の往生法を説いたものであつて、分けて彼此兩品に於て、彌陀法を宣揚せられしことの、夫が佛意の表徴であるのであると、鑽仰するの外ないことであらう。

二三の注意  
すべきこと

所で此品が彌陀佛國の往生に歸結されてあることは、明明地に顯説されてあるから、前卷の末尾に抄録されてある經文を讀まれたなら一目瞭然である。これは必ず熟讀されんことを望むのであるが、極めて淺蕪な所に於て、經文の上に二三の注意すべきことを指摘して、此段の終りとしよう。

其一。

其一は此の藥王菩薩本事品が、法華經全體であるの佛意を知らしめんが爲めに

「宿王華若し人あつて是の藥王菩薩本事品を聞かんものは前卷經文三四頁二行以下は、藥王菩薩本事品と呼び、或は是の經と呼び、交互參差相用ひて本事品と是の經と其區別をなさざるものゝ如き容ちとなつて居る。試に前卷末尾の經文を披見せられよ、初めに、藥王菩薩本事品を聞かんものは、とは總標であるとして。次に、是の藥王品(略言)を聞てといふて、之に次々に、是の經典を聞て如説に修行せばとして、藥王品と是の經の區別をなからしめ。又次に、是の經を受持し讀誦し思惟し他人の爲めに説けりといふて、之に次々に、是の藥王品を聞て、能く隨喜讀善せば(中略)所得の功德は上に説く所の如しとし其區別をなからしめ、殊にこゝでは、所得の功德は上に説く所の如しとしてあるがその上に説くといふは、是の經を受持し讀誦しと呼て説きたる下の功德を指したものであつて、約り是の經の功德も藥王品の功德も敢て差異する所なきことが、示されてあるともいふべき容ちとなつて居る。又次に、此の藥王品を以て汝に囑累す(前卷經文三五頁四行)といふて、之に次々に、汝が神通の力を以て是の經を守護すべしとし其區別をなからしめ。而して此の以

下に至りては藥王品の名を用ゆる事を止めて、専ら此の經なる代名詞を用ひ、而して其の代名詞が藥王品を指すの意味を以て充たされて居る。例へば、此の經は則ちこれ閻浮提の人の病の良藥藥王なりといひ、若し人病あらんに是の經を聞くことを得ば、病即ち消滅して(藥王)不老不死ならんといふ、此等悉く此の經なる代名詞は藥王品を指すものゝ如き意味あるものであるといふことが出来る。又次に、是經を受持すること有らん者を見ては、青蓮華を以て抹香を盛り満て、其上に供散すべしといふてあるが、之は前に、是の藥王品を聞て能く隨喜せば、常に青蓮華の香を出し、牛頭栴檀の香を出さん云云といふ所に應じて、藥王品と是の經とを比較し、却て藥王品に奇瑞を附して其優れるを示したるものゝ如く、最後に至りて是の經を受持するあらん人を見ては、應當に是の如く恭敬の心を生ずべしと結んで、初めに宿王華若し人あつて、是の藥王菩薩本品を聞かんものは、亦無量無邊の功德を得んと總標したる、藥王菩薩本品の文字に應じて居る。誠に面白き趣向を以て、細心の注意が拂はれて、藥王品は法華經全體である、法華經全體は藥王品であるの佛意が顯されてある。

其二。

一三七

其二は是の經の囑累である、之は委しくお話をすれば、殊の外面倒なる問題となるから、其表面丈けをお話して置く。最初日月淨明德佛が、一切衆生喜見菩薩へ、佛法も、三菩提も、寶樹寶臺、給侍諸天、佛の身代を舉げて讓付され、殊に又滅後の舍利即ち佛骨までも委附されたのである。所でここで手短にいへば、舍利と云が問題となるのである。舍利といふは約り佛法の要諦を寓したものである、尅していへば彌陀法である。そこで日月淨明德佛が舍利を委附された旨趣の極意を搜つて見ると、佛法の要諦たる彌陀法を以て、廣く世間に流布し、普く衆生に饒益を得せしめよ、夫には能く世諦を觀察し、衆生各階級の根機に従ひ、無數の方便法門を設け、誘導引入以て最後の佛果を成就せしめよ、との旨趣の下に囑累されたといふこととなるのである。經文には(前卷經文三〇頁八行)

我が滅度の後の所有の舍利亦た汝に付囑す、當に流布せしめ廣く供養を設くべし、應さに若干の千の塔を起つべし。

と記されてある、この若干の千の塔を起つべしとあるが、根機に従ひ無數の方便法門を設けよと、囑累されたことに當るのである。

この義相を起信論を標尺として見ると、相大から用大に移る所で、日月淨明德佛が相大に當つて、滅後の舍利起塔から用大となるのである。尤も此事は御參考までに一言申て置くに止め、今はそんな面倒なことは一切抜去ることとして、一切衆生喜見菩薩は佛身を荼毗(火葬)に付し、佛舍利を拾ひ取て、八萬四千の寶瓶を作つて、八萬四千の塔を起てらるゝことゝなるのである、こゝを經文には

火滅へて已後舍利を收取つて、八萬四千の寶瓶を作つて、以て八萬四千の塔を起ること三世界より高く、表刹莊嚴して諸の幡蓋を垂れ、衆の寶鈴を懸けたり。

と記されあるが、この八萬四千の寶瓶、八萬四千の塔といふが、八萬四千の衆生の機類に應ずる、八萬四千の法門を意味したことゝなるのである。又三世界より高く表刹莊嚴して諸の幡蓋を垂れ、衆の寶鈴を懸けたりといふが、八萬四千の法門を藏するの經々となるのである。そこで此邊を能く思案して見ると、一切衆生喜見菩薩即ち藥王菩薩なるものは、全く釋迦自身を謂はれたものであるといふことが分るのである。夫と同時に又藥王菩薩は、阿彌陀佛となるのであるが、そこまで延長しないで、藥王は釋迦であるとして、前佛の日月淨明德佛から、有らん限りの佛の身

代を讓付された藥王の釋迦は、又た佛の身代の有らん限りを含まれて居る、此の藥王菩薩本事品を、宿王華菩薩に付囑さるゝのである。ここの所を經文には

是故に宿王華、此の藥王菩薩本事品を以て汝に囑累す、我滅度の後ち、後の五百歳の中に、閻浮提に廣宣流布して斷絶せしむるなかれ。宿王華汝ち當に神通の力を以て、是の經を守護すべし。所以は何ん、此經は則ちこれ閻浮提の人の病の良藥なり、若人病あらんに、是の經を聞くことを得ば、病即ち消滅して不老不死ならん。宿王華、汝若し是の經を受持すること有らん者を見ては、青蓮華を以て、抹香を盛り満てて、其の上に供散すべし、散し己て是の念言を作すべし、此人久からずして必ず當に艸を取て、道場に坐して諸の魔軍を破すべし。當に法螺を吹き、大法鼓を撃て、一切衆生の老病死の海を度脱すべし。是故に佛道を求めんものは、是の經典を受持すること有らん人を見ては、應當に是のごとく恭敬の心を生ずべし。

と説かてある。此の文節に於ける深長なる佛意は別に説明を要しないであらう、而して此品の中心中軸が、彌陀佛國の往生にあることは、經文を見られたならば炳

其三。

然として疑を容るゝの餘地はないのである。

尙お話しして置くは、此品の對手となつて居られるは宿王華菩薩である、此の宿王華なる名前の由つて来る所は、宿善の華の開發を意味したものである。彌陀法を信受するは、宿善の開發に待つべきであるから、宿王華菩薩を對手として説かれるのである。大無量壽經には、若し人善本なくんば此經を聞くことを得ず、會更世尊を見しもの則ち能く此事を信ず、宿世に諸佛を見しもの是の如き教を樂聽せん」と説かれてある。即ち難信難解の彌陀法であるから、宿善開發の人に非ざれば、容易に解入することは出来ない、そこで釋尊は此の藥王品を宿王華に囑累さるゝとあるは、即ち釋迦滅後に於ける宿善開發の人に囑累さるゝのである。又滅度の後、後の五百歳云々とある、此の「五百歳」といふは、何時の五百歳と限られた譯のものではない、彌陀法が縁あつて廣宣流布して居る間は、無限に後の五百歳の中と見るべきである。

三世諸佛説法の歸結。

其他お話ししたいことはまだ種々と残つて居るが、今回は遺憾ながらこゝで打止めて置く。最要たる此品に来て、却て粗略の講演となつたは多謝する外はないが、

上來述べた所で、過去の日月淨明德佛より、現在の藥王即ち釋尊へ佛法を擧げて付囑せられ、釋尊亦た佛法を擧げての藥王品を、滅後の宿善開發の人へ付囑さるゝ邊は、冀くば能く玩味されて、三世諸佛の説法の歸結は、法華經の彌陀法にあることを承知されたい。

粉骨碎身深大の佛恩を報謝せよ。

我が妙法華經が諸經の王として、釋迦出世の本懷として、彌増に閻浮に廣宣流布することに於て、阿彌陀佛の威神功德は、一切衆生を饒益し、寒きものゝ火を得たるが如く、裸なるものゝ衣を得たるが如く、子の母を得たるが如く、渡に船を得たるが如く、病に醫を得たるが如く、闇に燈を得たるが如く、貧きに寶を得たるが如くであつて、能く衆生をして一切の苦、一切の病痛を離れ、能く一切の生死の縛を解かしめ給ふの大法益あるものであらう。冀くは有縁の道俗、上み菩提を求め下も衆生を化益するの大悲心に坐せられ、隨喜鑽仰粉骨碎身、以て深大の佛恩を報謝されんことを、切望して止む能はざるものである。

#### 四 出世本懷 其十六（化城喻品の一）

假設的法界  
歴史

扱てこれから前卷に次いでお話をする。前卷で序品に於ける文殊菩薩の答詞の上に、時代の變遷が三紀に劃せられてあることをお話したと共に、大無量壽經に於ける阿彌陀佛の因位法藏比丘の發達にも、三紀あることを述べたことであつたが、之は三紀であらうが四紀であらうが、今その穿鑿は構ひのないことのようにであるが、此の穿鑿は深い意義があるので、大きくいへば佛法の根本義に觸れた所である。即ち古往今來三世十方に亘りて、佛法なるものの究意點は、彌陀一佛乘の外に出でざること、佛眼に映じたる假設的法界歴史とでも名くべきもの、上に切組みて、暗示されたのである。

秘關の大城  
門を開いた  
以上は

前卷より引續いて、殊に此卷に入りては、法華經の中心要品に就て、彌陀法との關係を荒増お話したが、何分にも經文を前に控へての法華經の講演でないから、第一に自己の淺學と不慣とが先に立つての事ではあるけれども、相當骨を折つた積りでお話したことも、後に講録を讀んで見ると誠に徹底しないことに終つて居るは遺憾千萬である。夫にしても懇に愚意を迎へ、愚見を育成しつゝ見て下さつたらば、多少は理解せらるゝ所があるであらう、そして一と通り講録へ眼を通された

1111

1111

上で、試に大無量壽經を披見せられたならば、何所にか大無量壽經の舞臺が宏潤に爲つて居るではなからうかと思ふの自負はあるのである。法華經を見損つてゐた過去の事は議して詮なきとであるが、法華經に此の事實あるを知つた以上は、法華經を外にして大無量壽經を解釋せんとするは、恰も裏門から怖る怖る大邸宅の内部の結構を揣摩すると一般で、奥深き庭園の趣向、參差たる間取の排班の分りようがない。前卷に於て法華經と大無量壽經の比較研究は、大無量壽經の眞義を探知するの基礎工事であるといふたは此事で、從來の如く砂上に樓閣を築いたような解釋で濟まして置くのならば、斯んな穿鑿は無用であるが、既に法華經秘關の大城門を開いた以上は、法華經を理解することなしには、大無量壽經を釋明する事は出来ない譯となつたものと思ふのである。

無漏實相の  
救の光

釋迦が王太子の榮祿を棄て、までも懸命に志念凝慮せられたは、一切世間の衆生の苦惱を度するの法を知見せんとするにあつたのである。されば六年苦行の末に於て、菩提樹下に豁然として虚徹靈通された妙境は、如何なるものであつたであらうか、必ずや此の目的を達するに可能性ある或物であつた事であらねばなら

ぬ。而して其可能性なるものは、法華經の上から見る限りでは所謂無漏實相の救の光であつたのである。

戒定慧の三諦を以て。

所謂實相の本體の如何なるものであるかは、言辭の及ぶ所のものでない。思慮の及ぶ所のものでないとしてあるから、吾人論議の範圍の外に措くの外はないが、責めては其輪廓丈けなりともとして私の知見の限に於て、試にこゝに筆舌に顯すならば、釋迦は久しく人世の皮相に捉へられ、生老病死榮枯盛衰の如き、今日眼前に表現する事のみ没頭して悶絶せられたのであつた、全く其皮相のみに執着しての迷妄に鎖されたのであつた、一切法の根底には必ずや常に救の光の炳然たるものがあるに、氣付かれなかつたことの結果であつた。所が苦行の末に於ける豁然爆發の下に、表に現はるゝ生老病死榮枯盛衰は皮相假幻に過ぎないもので、其實に至りては宇宙に於ける一微片塵、介魚昆蟲の末に至るまでも、其自體に於て救の光のないものはない、但夫れ問題は、如何にして之を打開し得るか、の點にあるのであると解入せられ、更に進んでこれぞ即ち戒定慧の三諦を以て鍵鑰として、打開すべきものであると大悟せられたのであつた。

十如是。

ここに言ふ救の光なるものが、即ち法華經の謂ゆる諸法實相である。是の如き性は、是の如き體に於ては、是の如き相あり。是の如き因、是の如き緣に於ては、是の如き力あり。是の如き果、是の如き報に於ては、是の如き作あり。是の如き本末究竟等。其現像は差別の事由に基きて千萬無量其品を異にするも、其根底には必ず恒に一貫する所の救の光の實相があるとせらるゝのである、何處を押へても何處を引張つても、夫が儼在せざる所はない、實相ならざるものはないとせらるゝのである。之を方便品には

唯佛と佛とのみ、乃ち能く諸法實相を究盡し給へり。所謂諸法とは如是相、如是性、如是體、如是力、如是作、如是因、如是緣、如是果、如是報、如是本末究竟等

と説かれてある。之が法華經で有名な十如是といふので、古來八ヶ間敷力瘤を入れた所である、但し其多くは曲解に陥つて居る。

大智慧たる救の光。

尙進んでの釋迦の觀察感得は、夫が介魚昆蟲は介魚昆蟲丈けの實相があると同時に、天地日月森羅萬象各機各類を包容する、無限無邊の宇宙大法界には、之と量を等しくするの無限無邊の大智慧たる救の光の存在がなければならぬ、且は散つて

萬有に普徧せる實相の中核たる、無漏實相の本地なるものがなければならぬ、之を具體的にいへば、即ち無量壽無壽光なる阿彌陀佛なるものがあらねばならぬとせられたのであらう。觀察し感得し、而して遂に夫と融念同化し、虚徹靈通し、其本地に入られたのであらう。又之を無漏實相の本地、救の光の中核に還歸していへば、釋迦の贏得したる如是相、如是性、如是體、如是力、如是作、如是因、如是緣、如是果、如是報は、阿彌陀佛なる救の光の帝郷よりの天使として得られたのであつて、釋迦其物は宇宙大法界の自然の相、自然の力、自然の作の現はれであるとするべきであらう。

單獨に起作するものではない。

然るに物悉く單獨に起作するものではない、必ず因縁和合を待て始めて發働するのである、即ち大光明無漏實相なるもの、具體的にいへば阿彌陀佛なる救の光の力用も、亦一の緣に催されて之が發働を爲すのであつて、其緣なるものは即ち衆生の罪福にあるのであるから、時紀の推移に伴ふ所の衆生の罪福の模様に応じて、此の救の網の目も粗より細に入る譯とならねばならぬのである。

罪福機根に適應して。

孰らかといへば我々の身心は、罪惡の暗黒方面が大部分を占めて居る、即ち無明に鎖されて居るのであるから、救の網の目が余程巧妙に仕組まれ、此の媒介役とな

る教法なるものが、極めて根機に適應するように織出されてないと、假令何かの緣に催されて、無始以來潜在する實相が頭を擡げても、無明の風に翻弄されて、大智慧光明の義ある、阿彌陀佛の無漏實相の電流線に、繋ぎ合せて貫うことが出来ないであらう、よし又繋ぎ合せて貫うても、宿善の開發なくして、再び絶緣の浮目を見ることゝもなるであらう。夫には第一先きに立つ教法なるものが、衆生の罪福機根に適應して、繁簡難易其度を得たるものでなければならぬ、といふ事に歸著するであらう。本より吾人に潜在する實相は、幾微纖弱のものであるとはいへ、之を進めてゆけば、大智慧光明たるの可能性は、無始已來斷へず持續して居るのであるから、媒介教法其宜しきを得たならば、必ず効果あるべきは、力強く思ひ做すべきであつて、我々が自暴自棄に陥つてはならぬと同時に、能救者たる阿彌陀佛が骨を折らるゝも、此邊を見込んでの事であらう。

大通智勝佛の願末となつて。

そこで五濁現代の衆生の機根のうちうらを一から十まで經驗され熟知され、酔いも甘いも噛み分け、苦勞し抜かせられての上の正覺者たる、釋迦牟尼佛の佛眼に映じたる、時紀の變遷即ち假設的法界歴史、及び之に伴なふ宇宙法界に於ける、無漏

實相の阿彌陀佛の大智慧光明の働きたる、衆生救済の網の目の組方が、此の化城喻品の大通智勝佛の顛末となつて顯現したのである。

所が法華經に於てこの假説的法界歴史が二様に暗示されてある、其一は此の化城喻品であると、他は序品の文殊の答詞に由つて顯された日月燈明佛の顛末である。序品の方の事は前卷に於てお話したことであるが、何故斯様に二様に暗示されてあるかといふに、此には幾多の理由のあることで、總まくりにかくして言へば、容易に其真相を窺測することの出來難いように、八幡の竹藪へ追入れて出路を分らなくした如くに、態と傍路へ引張り込むの、法華經式に組み立てられたのだともいへるが、一段深く入込んで考へると、其法華經式組立なるものが、冗談半分にもせられたのではなくて、法華經を讀むに大信力を以てすべきの大教誡であると同時に、此の序品と化城喻品と二様に示されたに付ても、深き理由あるものとせねばならぬ。今夫等の一は數へ立つるの煩を避けて棚に上げて置くとして、目下入用のこと丈けをお話すれば、第一に互顯の方法を取られたのである、此事は後に至りて委くお話するとして、第二には法華經の法門即ち無漏實相の救の光なる彌陀

二つの潮流となつて居る。

法なるものが、二つの潮流となつて居るのである、夫れは即ち智慧門と精進門とである。

主觀的禪宗流の解決。

元來大乘佛法の純理からいへば、即身成佛を談ぜねばならぬもので、修行が何うの信心が斯うのと、無暗にお經を引張り廻して研究するの必要のないことである。其の立方を略言すれば、無始以來持續の我々の實相其物が、眼前直に佛なのである、天の一方を眺めて、救の光なる無漏實相の中核の有無を論ずるの必要はない、假令夫等の物があつたとしても、其實體に於ては何等我々持續の實相と異なる所はない筈のものである、鈍栗の背比べで、揉みに揉まれて居ればこそ、我他彼此の差別邪見で惱まされて居るようなものゝ、心頭を一段高く表出せしめ、一切の心慮を拂拭して、無念の寂滅に還元せしめよ、そこに吾人の心識は初て無明の鎖しを脱出して、無漏實相の大智慧光明の赫灼たるものが顯現するのである。と斯う立る立方が、即ち智慧門の一つで、是は自己の心識を本に立てゝの言は、主觀的禪宗流の解決といふべきである。

又同じ智慧門であつて斯ういふ筋もある、宇宙法界の中核たる、無量無邊の壽光

觀禪の眞宗如きが夫である。



の本體たる阿彌陀佛を客觀に措いて、之に融念同化する、即ち信心する憑托する、此の一念歸命の刹那に於て、換言すれば彌陀威神力の電流線に、繋ぎ合せて貰うた刹那瞬間に於て成佛を談するのである。夫は直に物質的身體の組織までを變ずることは出来ないまでも、我が心識に於ては、佛たるの確定を受け、即ち正定聚位に入るのであると談するのである。現在行なはれて居る宗門でいへば、念佛門の多くが夫れ若くば夫れに似寄つた立方となつて居て、是れの尤も際立つて居るのは親鸞の眞宗の如きが夫れである。日蓮の法華宗の如きも正意はここにあるのであらう、但法華經の解釋を間違へて居らるゝので、日蓮としては阿彌陀佛を談ずることが出来ないのみである。

禪宗と念佛門との立方の相違は、救主を客觀に見るか主觀に見るかの相違に止まるのである(救主の語は禪宗には當嵌り兼ねるけれども)。この場合に於て、佛法の純理からいへば、罪惡が何うの業障が斯うのといふは、更に問題とならないので、縁に催されて犯した罪惡であつて、何も罪惡其物に動すべからざる根據があるのではない、即ち罪惡は吾人中心の實相ではない、然らば又縁に催されこれの消滅す

罪惡は吾人  
中心の實相  
ではない。

智慧門に當  
る。

べきは當前の成行で、更に不思議とすべきでないと會通して行くのである。

斯様なことを委しくお話すれば際限のないことであるが、要之此の純理の上に立つ潮流が、主觀(禪)客觀(念佛)の相違はあるとしても孰れも前に申した二門(智慧、精進)では智慧門に當る譯となるのである。

次に精進門

次に精進門といふは、純理は純理として腹に入れておいて、兎も角宇宙の森羅萬象に見ても、苟も秩序を失うといふとは容されて居ない、是ぞ千古不磨の大經典である、大なる平和は大なる血を以て購なうの外はない、彼の提婆品に見るも、五逆讎敵の提婆の膝下に屈し、千歳拾薪汲水の勞を辭せずして、初めて三十二相八十種好の大智慧光明の佛體を贏得せられたのであると立て、此の奮闘努力を以て唯一の信條とするのが、即ち精進門に當る譯となるのである。法華經にこの智慧門と精進門との二門があるとして、智慧門を司るのが文殊菩薩であつて、精進門を承るが藥王菩薩である、釋迦は佛であるから此二門を統括せらるゝ譯であるが、系統を言へば智慧門をも攝取しての、精進門に屬する人であるといはねばならぬ。夫は提婆達多品を見ても、常不輕菩薩品を見ても分る譯であつて、且つ佛寶を説かれた分

別功德品に於ても、一念信解の智慧を説かれたと同時に、受持讀誦、如説修行(大無量壽經も亦同じ、一念大利無上功德に次ぐに、歡喜信樂、受持讀誦、如説修行を以てしてある)の精進を委曲せられ、而して其結末の偈頌に於て

恭敬於塔廟(藥王品) 謙下諸比丘(常不輕品) 遠離自高心(提婆品)

を以てせられてある。のみならず又藥王菩薩本事品に於て、法華經の全體である所の精進の權化たる同品を、宿王華菩薩に委付して、此經は、則ちこれ、閻浮提の人の病の良藥なりとして、滅度の後の後の五百歳に於て、廣宣流布を懇囑された所から見ても、釋尊が精進系統に屬せらるゝといふ事は分るであらう。尤も精進系統に屬する方かたであるといふたは、表面の義相に捕へられた言であつて、實は現代の如き衆生の機根では、純智慧門を以てするといふことは、夫には種種の弊害をも生じ、一進一退結局正定聚不退轉位を支持することが出來ないであらう、約り之は時代不適當のことである、苟も現代に於て向上的成果を收めんとするには、智慧に加ふるに精進を以て邁往勇進するの外ない、と見込まれての事であつたのであるとせねばならぬ。

強ち精進を無視したるはなし

但し前にお話した智慧門の行方ゆきかたである禪宗であつても、念佛門殊に親鸞の眞宗であつても、眞宗の方では一念の信後に於ては、報謝行と名けて修行を奨励するのであり。禪宗と雖も慈悲行に一身を犠牲として、研きたる上にも磨き上げる工夫を凝すのであるから、要約する所は現行はれてゐる智慧門の上に立つ宗門と雖も、強ち精進を無視し佛意に戻つたものであるとは論決すべきものではない。但惜しいことには、古來佛の聖典中に於て、衆生の安心立命の上に尤も交渉繁き、法華經大無量壽經如き經典文義を、如何なる動機から斯んなことになつたかは不思議の一つであるが、高僧と謂はれる程の高僧が、事實相牽ひて全く解釋を間違へてゐたことであるから、私の所見からいへば、大無量壽經若くは法華經を正依の經として成立つて居る、現在の宗門の立方は、其所に多少の無理の出來て居るは、止むを得ないこととなるのである。併し又ここは時代思想との關係もあつてのことである、かなか一朝一夕に批判し去るべき所でないことは一言申添て置く。

夫で其所には種々の經緯はあるとしても、要するに法華經の法門の上には二潮流があるとして、智慧門は文殊から流れ、精進門は藥王菩薩から流れて居る。而し

智慧門は文殊王、精進門は藥王

て文殊の智慧門は文殊を以て終始して居るが、藥王菩薩の精進は釋尊を以て終始して居る、即ち釋尊に取入れられて居る。そこで文殊の智慧門の潮流は、序品の日月燈明佛の顛末を以て發端となし、釋尊に取入れられたる藥王の精進門は、此の化城喻品の大通智勝佛の顛末を以て、緒序とすることになつて居る。前に法華經は佛法僧の三段に分たれるといふておいたが、今の話が、りていふと、法華經は智慧門、精進門及智慧精進並行門の三様に分たれるとなつて、智慧門(法)は文殊精進門(僧)は藥王、並行門(佛)は彌勒となることゝなるのである。ここで興味あり、且つ吾人の胸に響くは、文殊藥王の二菩薩の成佛は説かれてないが、智慧精進並行門の彌勒菩薩は釋迦の嗣佛となつて、遠からず成道せられることゝなつて居る一事である。是れ誠に以て、教家諸君に向つて三省を請はねばならぬ所であらうではないか、彌陀法は奇特不共の法であるなど空ら嘯きつゝ、精進を棄て、只管に龍袖に匿れる事のみ圖らるゝことは容さない。

そこで話を進めるとして、序品の日月燈明佛の顛末を發端としての文殊の智慧門は、直ぐに次品の方便品に續く次第となつて、品品を経て、提婆達多品の龍女成佛

龍女成佛が總勘定。

を以て大圓團とせられて居る。であるから方便品の首めに

爾の時に世尊、三昧より安詳として起て舍利弗に告げ給はく、諸佛の智慧は甚深無量なり、其智慧門は難解難入なり、一切の聲聞辟支佛の知ること能はざる所なり。

と説かれて、智慧(文殊)を以て承けてある。そして序品に次ぐの方便品を始めとして譬喻品、信解品、藥草喻品、授記品(化城喻品を除く)五百弟子授記品、人記品の八品は智慧門を土臺として説かれたものである(此等の委曲は方便品以下を講ぜざれば分り兼ねることであるが今は其理由は省略して置くの外はない)。而して此智慧門は、提婆達多品に至つて、彼の文殊出現龍女成佛が夫の總勘定となつて居る。試みに提婆達多品の結末末尾經文六〇頁十二行を披見せられよ、爾の時娑婆世界の菩薩聲聞といふより、最尾の默然として信受すといふまで、正に一經の結末文であるが如きの形を爲して居るであらう。

ここに面白いのは、序品には現に文殊の姿が見へて、種々と働いて御座るが、方便品から此の提婆達多品までの間、何時のまにか消えてなくなられて、龍宮に往つて居

法華經的興味の津々たるところ。

られたことになつて居る。コハ能く考へて見ると甚だ怪しいことで、随分と人惑せのことを記されたものである。古來から種々の説を爲して居るが、一向に佛意の真相を穿ち獲たものはない、之は何の事はない只釋迦と一體となつて居られたのである、其所を龍宮に往かれたことに假説したものである。龍を以て佛の代名詞とする事は度々見ゆることで、ここでは釋迦牟尼佛が、無量義處三昧から安詳として起られたと同時に、今の今まで働いて御座つた、文殊菩薩の姿は消えて佛に一體となられたのである、其所を龍宮に往かれたこと、せられたのである。つまらな  
い些事のようにあるが、なかなか些事でない、其理由を述ぶるの餘地なきを遺憾とするが、ほんの緒序丈けをお話すれば、文殊なるものは佛の理想の化現である、而して智慧門なるものは佛の理想である、所が俗世界も悟境界も同じことで、實際は悉く理想の如く行くものではない、精進は實際である。そこで方便品以下は、釋迦が釋迦の理想に基いて説かれるから、理想の化現の文殊は釋迦へ合體せらるゝ譯となる。尙進んでいへば、龍女成佛の如きも一の理想であるといふことに歸著する。此所は智慧門精進門即ち理想と實際との關係に付て、大に凝慮せねばならぬ要關

であり、實に法華經的興味の津々たる所である。

尙申添ておくは、品品の排列方が錯綜してゐて、化城喩品の後に授記品があつたり、又は龍女成佛の前に釋迦の昔話があつたりするのは、兼てお話のしてある如く、鉤鏢的に出來て居る法華經の一特色である。併し此鉤鏢的に出來て居る中に、大教訓が含まれて居るので、今の話懸りからいへば、例へば提婆達多品の如き、釋迦の精進と文殊の智慧とを組合せて、其接合地點に彼の淨心に信敬して、疑惑を生ぜず、中略若し佛前に在らば、蓮華より化生せん、の要文を置いて、智慧精進並行の下に、成佛得道あるを示されたる如き其一つである。

次に此の化城喩品の、大通智勝佛の顛末を緒序としての藥王の精進門は、授記、人記の二品を隔て、法師品に續く次第となつて、中に佛寶を説かれたる從地涌出品、如來壽量品其他を取り入れて、藥王菩薩本事品に至りて大圓團となつて居る。であるから之は化城喩品の結頌に、佛の一切智の爲めに、大精進を發すべし、等の句を作されて、之に續くべき法師品は、御承知の如く、爾の時、世尊、藥王菩薩精進に因せて、云云と説き出されて、自から化城喩品の大精進の文字が承けてある、そして化城喩

品の終りに説れたる、謂ゆる化城喩なるものが、前にある諸譬喩と違つて、精進の意味が織込まれてある。且つ綿密に注意すると、法華經中阿彌陀佛の名が二回出て居るのであるが、其一つが緒序たる化城喩品に出てゐて、其一つが大圓團の藥王菩薩本事品に出て居る。又た化城喩品で阿彌陀佛に隨伴する佛名が、度一切世間苦惱となつて居るが、此の文字を藥王品へ持出して、宿王華、此經は能く一切衆生を救ひ給ふ、此經は能く一切衆生をして諸の苦惱を離れしめ給ふと記されてある。何處から何處までも、法華經が彌陀法なるを識らしめんが爲めに、阿彌陀佛の名字を匿しつゝ、極めて細心の注意が拂はれてある。

轉た羽化登仙の想ひ。

上來法華經に二潮流があるといふこと、其他種々とお話をしたが、約りは法華經を彌陀法として見る上に於ては、輕輕に看過すべき所でない、と思ふからしてのことであつたのであるが、まだまだお話をすれば、際限はない、此經を結集した人達は、如何なる腦漿の所持者であつたか、能くも是程の錦繡を織出されたものであると敬服しつゝ、靈山會座に於ける佛の説法の微妙を究められたらんことさへ想像され、知らず識らず佛智の測るべからざるに恍惚として、轉た羽化登仙の想ひあらし

むるものがある。

四 出世本懷 其十七 (化城喩品の二)

化城喩品。

これから化城喩品に付てお話をする、此品も三紀に分れて居ることは序品の文殊の答詞に同事であるが、序品が上紀に委しく下に略されて居るに反して、此品は下紀に委くして上紀に略されて居る。といふが、序品の日月燈明佛の顛末は、智慧門の緒序を爲して居るのであつて、智慧法は主として理想上代を饒益するの教法である、とせられてある邊から自然上に委しくなつて居る。又此品の大通智勝佛の顛末は精進門の發端を爲して居るのであつて、精進行は濁惡末代に適應するの教法としてある邊から、自然下に委しくなつて居るものと見るべきである。

約りは六段。

三紀といふが一紀に前後の差があること、なつて居るので、約りは六段となる譯である。其中第一紀は茫邈の太古であり、純一無雜の折であるから、明かに前後の區別が見へて居らぬ、日月燈明佛の同一名の二萬佛が前後の二段に亘つて居るとも見られ、又其前半は湛然空寂、無佛無生の如體として、こゝに劃線を措いて、日月

第二紀の前  
分後分。

燈明佛と佛名を出してからは、既に其後半に當るのであるとも見られる。但し八王子を生れたる日月燈明佛の最後の「一佛丈」は、第二紀の前半に屬するので、此事は前巻でも述べておいたが、彼の六十小劫の間に於ける法華經の說法なるものが、即ち第二期の前半を填めて居る譯となるのである。そして此の六十小劫の說法の終つた所に次ぐのが、大通智勝佛の說法の始まりとなるのである。前巻では最後の燈明佛は單に第二紀であるとして置いたが、委しくいへば今申た如く第二紀の前半とせねばならぬ、そして此の智勝佛が第二紀の後半を嗣がれる譯となる。所で第二紀前分の燈明佛の說法は、甚しく第一紀の太古淳朴の氣分が漂ふて居つて、寧ろ第一紀に屬して見るべき程のものであるが、之に反して第二紀後分の智勝佛の成道以後の出來事は、第三紀の近代執疑の氣分が濃厚で、或は第三紀に屬して見るべき程のものがある。

十劫坐道  
場。

文殊の答詞は上紀に委しいといふは、第一紀に於ける二萬佛の日月燈明佛の說法の模様(初善中善後善)から、最後の日月燈明佛の說法の順序等までが、一と通り記されてあるをいふたのであるが、此間の事は大通智勝佛の方では一向に記事が見

へて居ない。併し釋迦が佛眼を以て見らるゝ所も、矢張第一紀の前分即ち茫邈空寂の太古にまで究達して居らねばならぬ譯なので、夫が大通智勝佛の方では如何に顯はされて居るかといふに、十劫坐道場なるものが夫に當つて居る、それで今此品のお話をするには、此の十劫坐道場の事から始める事として、そして傍ら序品の文殊の答詞と、大無量壽經の法藏比丘の三紀とに、聯絡を持ちつゝ、お話を進める事とするであらう。

頭を突込ま  
ないで考へ  
ればならぬ。

此の十劫坐道場なるものは意なく見ると如何にも難解のことを説かれたもので、柯山の科註には、

大通十劫佛法不現とは、禪門に昔より此を將て以て極則と爲るの談あるは其故何ぞ哉。彼れ此は昔の佛坐して機を伺ふことを知らざるを以てなり。

と註してある。禪宗の公案にも爲つて居る程のものと見ゆるので、私に於ては其經緯は如何なるものであるか、其落著は如何になつて居るか想像も付きかねたので、禪門のことに付ては心得のある打魚翁前巻の江畔漫錄に載せたる慧遠傳を書かれたに問合せて見た所が、早速返事に接したので略のことは分つた、翁の返書は

末尾に附せる江畔漫録に載せてあるから見て下さい。有繫の天台も之に對しては好思案も浮ばなかつたものと見へて、文句には縁、宜、の、賒、促、に、長、短、を、應、示、す、の、みとして、僅に釋迦と彌勒を例に引て場塞ぎがしてあるに過ぎないが、孰にして法華經の根本義が判らないで替、搜、り、を、す、る、の、で、あ、る、か、ら、本、當、に、解、釋、す、る、こ、の、出、來、な、い、は、無、理、か、ら、ぬ、こ、と、で、あ、る、。經、文、は、前、卷、に、附、し、て、あ、る、法、華、經、文、十、一、百、八、行、以下を披見されるれば分ることであるが、こゝに其一節を摘録すれば、

其佛もと道場に坐して魔軍を破し已つて、阿耨多羅三藐三菩提を得給ふに垂んとするに、而も諸佛の法現在前せず、是の如く一小劫乃至十小劫、結跏趺坐して心身動じ給はず、而も諸佛の法猶ほ在前せざりき。

とあるのである。成程如何にも難解である、併しこれはそんなに頭を突込まないで考へねばならぬ、約り例の法華經式を試みられたのである。こゝの經文は唯外見上に於ける、佛成道の一般儀例に準由して誌せられたので、智勝佛の内證は此の外觀とは大に異なるものがある、何も佛法が現前しない譯でもなければ、衆生の機根を測つて居られた譯でもない、將又禪家の公案とする程のものでもない、一ト皮

智勝佛の内證。

剝いて見れば何でもないことである。

では智勝佛の内證は何んなるものであつたかといふに、此事は後の十六王子の偈讚から見ると判るのである、(前卷法華經文二百十一行)。

世尊は甚だ希有なり、一たび坐して十小劫、身體及び手足、靜然として安じて動ぜず、其の心常に憺怕にして、未だ曾て散亂おらず、究竟して永く寂滅し、無漏の法に安住し給へり。

とある。この其、心、常、に、憺、怕、に、し、て、以下が智勝佛の内證である、即ち相念を離れたる如體にて在らせられたのである、澹然空寂なのである。ここでも起信論の體相用の三大を以て参考とするとハッキリする、即ち彼の眞如の體大に當るのである、此の三大に三紀を割當ると、體大が第一紀となり、相大が第二紀となり、用大が第三紀となるのである、前に提婆品の龍女成佛の所でお話したことゝ参照して見られたなら、略お分りになるであらう、ここでは此の解説は省略して置く。要之智勝佛の十劫坐道場は、序品に於ける二萬の日月燈明佛の時代に當るので、第一紀の前後兩段をこれで以て填める譯となつて居るのである。偈讚に見へて居る、其心常に

懼怖にして、未だ曾て散亂あらず、究竟して永く寂滅し、無漏の法に安住し給へりといふが、第一紀の純一無雜、淳朴澹然の如體、即ち空寂に在らせらるゝ所を歌ふたのである(第一紀の模様は前卷一六七頁以下に詳なり)。十小劫といふは、十は成數であるから、即ち一紀の始終を意味して居るのである。夫でこゝで故らに一、小劫乃至十小劫と一の始から十の終まで、始終を擧げて記されてある。

智勝佛が成道せられて最先の出來事は、十六王子の偈讚となり、又一方に於ては十方各五百萬億の諸佛世界が六種に震動し、全宇宙を擧げて振古未曾有の活劇を演ずることゝなつたのである。智勝佛の大光明は、下は從來日月の威光も、照すこと能はざりし幽瞑の屏所に及び、上は梵天の宮殿までが常の光に倍し、赫灼止むなさに至つた。そこで梵天の驚駭は一ト通りでない、東は東、東南は東南、乃至西も北も八方上下の梵天が、最寄々々で大集會を開いて、其光明の由來する所に付て評定する如きの大事件となつて、而して評議の結局は、此の大光明の在る所以は世に超へ優りたる佛の出世し給ふたのであらう、實に天下の幸慶喩ゆるに物なき事である。此秋に際つて我々梵天たるもの、有らん限りの力を擧げて、供養を致さねばなら

大宮殿を山車に仕立て

ぬ、それには我々は從來輪奐の美を極めたる宮殿を所有して居るのであるから、之を一切擧げて奉上了たがよからう、と八方上下の梵天が、期せずして同じ決議をなした事となつたのである。夫から先づ東方を筆頭として、大宮殿を山車に仕立て、大光明の光脚を便りに、音頭の節も面白く、笛と太鼓で練り行くといふ騒ぎとなつた。それが各方面に於て、五百萬億の諸佛世界の梵天といふのであるから、其混雜と賑はしさば、筆にも口にも及ばないことであつたであらう、詳しくは前卷法華經文十三頁十二行以下を披見されたい。

奇想天外より落つ

所で右の各梵天の宮殿奉上の時間が、序品では燈明佛の六十小劫間の法華經說法の時に當るのである、三紀に割振れば第二紀の前半に當ることゝなる。之は隨分奇想天外より落ちた話で、先づ抱腹せらるゝ方もあらうが、冀すらくば頭を冷やかにして説き下すを聞かれよ。宮殿奉上に六十小劫を費したとあつては、餘りに時間のかゝりが長過ぎるようであるが、すべて時間空間の長短遠近を論ずることには、大乘佛典を讀む上に於ては一切取除てかゝらねばならぬ、凡情の固執を拂除せしめんが爲めの方便にも、態と時間空間に於て桁外れのとが説かれてあるように



思う。現に釋迦靈鷲山の法華説法でもそうである。從地涌出品を見ると、六萬恒河沙の菩薩摩訶薩を集めらるゝに五十小劫の時間を費されてある(隨分思ひ切つた時間空間の拂拭の爲方ではないか)。尤も之には六萬恒河沙の菩薩摩訶薩に、各六萬恒河沙の眷屬があるので、其混雜の名狀すべからざりしは想像に餘りあるとではあるが、これは他方佛國から招かれたのでない孰れも娑婆世界の地下空中に居られた菩薩である。然るに此の梵天の宮殿奉上是、一方面ですら五百萬億の諸佛世界の梵天とある、それが八方上下の十方に亘つて居るのであるから、從地涌出品の菩薩招集に比較すると、六十小劫の間に之が總ての落著を見んとするには特別急行で餘程の早手廻しを演ぜねば出來得ることではないであらう。右様の次第であるから、こゝの宮殿奉上が燈明佛の六十小劫法華説法の時に當るといふことは、一寸も無理のないことで、勝手に理屈を著けて言へば、從地涌出品の菩薩招集の五十小劫云云は此所の理解に資する爲めの指南車であつたとも、いふに言はれないことはないと思ふのである。毛端に利海を容れ、芥裏に須彌を納む佛の自在の境界は我々差別の小見から見では、どうしても算數は合はないことゝなる。

時間空間の  
凡情を取去つて。

尙お話するが、この大通智勝佛の成道が、大無量壽經では無上正覺之心を起されて、之の醇熟した時に當る。其最初をいへば、最後の日月燈明佛の六十小劫の説法からが夫である、而して智勝佛がまだ國王在位中、十六王子の在つたといふ所が、無上正覺道意を起された時に當る。大無量壽經で見ると、序品や化城喻品で見るとは反對に、それからそれと續きさまに滑進して居る、此亦時間空間の凡情を取去つて考へられたいたのである(前卷一八二頁以下參照)。

法界歴史の  
大革命

次いで大通智勝佛は、十方の諸梵天王及び十六王子の請を受けて説法せらるゝことゝなる、之れからが三紀へ割振れば第二紀の後半となるのである。説法は二段に分れて、先づ最初に四諦十二因縁と序を逐ふて説かれてある、夫が終つて次に十六王子の請に由つて、八千劫の長きに亘つて法華經を説かれることになつて居る、而して八萬四千劫の間入定せらるゝ、如何にも大模様の段取であるが、これや一つには謂ゆる無上正覺なるものゝ現れで、法界歴史の上の大革命の場合であるから、この事である。

二大主眼が  
説かれてあ

夫にしても釋迦の如く方等般若及び華嚴は説れてない、唯佛としての二大主眼

が説かれてある、二大主眼といふは四諦十二因縁と、彌陀法たるの法華經である、四諦十二因縁は倫理哲學的宗教の上に踞して妄執の離脱を説いたものである、純宗教の基礎を爲すはここにある、方便品に、我が此の九部の法は衆生に隨順して説く、大乘に入るこれ本なりと説かれたるが此事である。而して結局の所、人世總ての勘定たる所に至ると、宇宙法界の大偉力、不可思議力に憑托しての、最善を盡すの外はないものである、之が即ち大宗教たるの彌陀法の法華經である。夫で無上正覺の現れの大通智勝佛であるから、此の二大主眼を説いたものである。之に由て見ると、釋迦の説法でも五時八教種々あるにはあつても、其根本主眼は、倫理哲學的宗教門の四諦十二因縁を主として説いた阿含部と、純宗教門の法華經の二とせねばならぬ。而して釋迦の抱負は哲學者として、はなはだない、大宗教家として、はなはだあるから、自然法華經が出世本懐となるのである。

之が序品では燈明佛入滅後、妙光菩薩が妙法華經を受持解説せられる以下の時に當る。序品の經文には、前卷法華經文五頁十一行以下)

佛の滅度の後、妙光菩薩妙法蓮華經を持ち、八十小劫を滿て、人の爲めに演説

五顯。

す、日月燈明佛の八子皆な妙光を師とす、妙光教化して其れをして阿耨多羅三藐三菩提に堅固ならしむ。

斯く説かれてある。ここで氣を付けねばならぬ、此の經文を熟讀すると如何にも物足りないことで、如何なる佛になられたか、何の時に成道せられたか、判明を缺いで極めて簡略に説了されてある。前に序品は比較の上に委しく下に略してあり、化城喻品は之に反して居るといひたるは此等の事で、第一紀より第二紀の前半までの説法の模様は、序品に委しく説かれてあつて、化城喻品の方では十劫坐道場と梵天參賀で事済となつて居る。之に反して第二紀の後半より第三紀の前半に至るまでの説法の模様は、化城喻品に委しく説かれて、序品の方では今掲録した經文の一節のみで、之に彌勒の不行跡のことが附加されてあるに止まつて居る。前に序品と化城喻品は、互顯の方法を取られた邊もあるといふたは、すべて斯んな工合に出來て居るをいふたので、到る處照應と組合せの巧みに説述されてあるには驚くの外はない。

而して妙光菩薩の八十劫の演説に對しては、智勝佛は八千劫の説法となり、八王

數字の對

子に對しては、轉輪聖王の供奉の八萬億人の出家を以て配合となし日月燈明佛の二萬の數に對しては、これには二萬劫を過ぎ已つてと記され、八王子の四天下を領せられたに對しては、四衆の中に於ての說法を以てし、最後燈明佛の八王子なるに對して、智勝佛は十六王子となつて、時代が一と滑り滑り下つて居ることが示されてある(前卷法華經文二三頁四行以下參照)。

第三紀の前  
半後半

大通智勝佛が八千劫の說法を終られて、直に八萬四千劫の間、靜室に入つて禪定に住せられ、是の時十六王子の十六沙彌が各法座に升られて、智勝佛の入定の八萬四千劫の間、法華經を説かれることとなつて居るが、これを三紀に割振ると、第三紀の前半に當ることとなるので、第二紀は八千劫說法を終られた所に盡きて居る譯である。申すまでもなく第三紀の前半といふが、大無量壽經の無上殊勝の願を起發される所に當るのである、而して第三期の後半は現代の釋迦靈鷲山、法華無量壽兩經說法の時となるのである。

#### 四 出世本懷 其十八 (化城喻品の三)

大無量壽經  
との比較研  
究

講演の順序からいへば、此邊から一度後戻りをして、梵天の偈讚等の上から法華經を彌陀法として見るに付ての注意すべき事柄を指摘しつゝ、お話を進むべき筈であるが、前後の顛倒に拘はらず、偈讚などのことは後廻しとして、今の話し掛りに附隨して、智勝佛の八萬四千劫の入定の事から始めて大無量壽經との比較研究を試みよう。是も元來なら、大無量壽經の(經文九頁九行以下)法藏比丘が、無上正真道意を發せられた所から比較したいと思ふなれども、余りに事が長くなるのと、又少しは大無量壽經の講演の時へも殘しておいて、緩々法華經との比較研究も興味あることと思ふので、ここでは法藏比丘の無上正覺の心を發されたる下、是に於て世自在王佛即ち爲めに廣く二百一十億の諸佛刹土云々の所から始める、こゝが法華經では智勝佛八萬四千劫入定の時に當るのである。尤も法藏比丘が無上正真道意を發された所が、法華經序品に於ける文殊の答詞の一節に照應することは、前卷で簡略ながらお話がしてある(前卷一八一頁其第一紀以下參照)。

但しこの經文の比較といふ事は無上正真道意、無上正覺の心及び無上殊勝の願の三紀に限ること、經文の全體に亘つて斯んな工合になつて居るといふのでは

シツクリ符  
合するの  
てある。

ない、此の三紀のことだけが序品と、化城喻品と、大無量壽經の法藏因位の物語の段と、經文の文節の上に於てシツクリ符合するのである。其中でも殊に此邊が緊切に抱合して居る所であるから、兩經比較研究に於て一要關となるのである。

此間の經文を四段に區ちて

今比較の經文は、大無量壽經では經文十三頁二行の是に於て、世自在王佛といふより、十四頁三行の當に、具に之を説くべしといふに至り、法華經では前卷法華經文二三頁九行の此の經を説き己つてといふより、二四頁四行の如來の慧を得べしといふに至るまである。此間の經文をいふは、此の四段に區つて聯載しつゝ、お話をする、大無量壽經の世自在王佛が法華經では大通智勝佛となり、大無量壽經の法藏比丘が法華經では十六沙彌となつて居る、立場立場で種々と名は變つて居るか、約りは一。無漏實相の救の光の顯れであるといふまでもない。

緩い多少の緩は免れない

先づ(い)から聯載する、豫めお斷りしておくが、之が同一人の手に翻譯された經でないものであるから、多少の緩のあるは免れないから、其含みで見られたい。

(妙法華經)此の經を説き已つて、即ち靜室に入つて禪定に住し給ふこと八萬四千劫、是の時十六の菩薩の沙彌、佛の室に入つて寂然として禪定し給ふを知つて、各法座に升つて亦た八萬四千劫に於て、四部衆の爲めに妙法華經を廣く説き分別す。

(大無量壽經)是に於て世自在王佛、即ち爲めに廣く二百一十億の諸佛刹土、天人の善惡、國土の塵妙を説き、其の心願に應じて悉く現じて之を與へ給ふ、時に彼の比丘佛の所説を聞き、嚴淨の國土皆な悉く觀見して、無上殊勝の願を超發せり。

此所で智勝佛の八萬四千劫の入定は、何の必要から起つたかといふに、八千劫に亘り力を盡して法華經を説かれたが、千萬億種の衆生は疑を生じて、之を信解することが出来なかつた(前卷法華經文二三頁八行参照)。そこで諸有衆生を救済し盡さんとする無上正覺の上には、自然の順序として更に一步を進めなければならぬ事となつた、夫には先づ精密に衆生の根機を調査するの必要が起つたので、そこで八萬四千劫の入定となつたのである。八萬四千劫は八萬四千の衆生の機類に應じた數である、釋迦一代の諸教が、八萬四千の法門に分れて居るといふも同じ理由である。そこでこの八萬四千劫の入定といふは、八萬四千の衆生の機類を精査觀察されるのであると解すべきである。

此所が大無量壽經では、世自在王佛が法藏比丘に對して、二百一十億の諸佛刹土等の事を説き、且つ其心願に應じ神通力を以て、悉く實地を現見せしめらるゝこと

二百一十億と八萬四千

なつて顯されてある、此二百一十億の諸佛刹土等といふが、即ち八萬四千の衆生の機類のことである。諸佛刹土が衆生機類のことであるといふは雲泥の相違で變に聞へるが、すべて經文の上で諸佛といふ稱呼は、多くの場合衆生に引下げて見た方が分りが早い、例へば無量千萬億の諸佛を供養するなどいふ語が、度々使はれてあるは、無量千萬億の衆生を濟度したの意味と見るべきである。衆生の機類が無量千萬億あれば、之に對する諸佛も無量千萬億なければならぬ、諸佛が無量千萬億あれば、諸佛刹土も無量千萬億なければならぬ、夫で二百一十億の諸佛刹土の天人の善惡、國土の龜妙を現じて與へられたのは、取も直さず二百一十億と分かれたる、衆生の根機を現じ示されたと同じ効果となるのである。

尙二百一十億の諸佛刹土が、八萬四千の衆生の機類のことであるとは、二百一十億としてあるは、八萬四千の四分の一である、二百一十億と八萬四千は、數の位が違ふなど、細く考へてはいけない。八萬四千の數は二萬一千(即ち二百一十億)の根本數に多食、多瞋、多癡、及び等分の四を掛けて生じた數である(八萬四千の計算方は、近くは三藏法數如きを披見せらるべし、詳細は又の機會に譲る)。現に大無量壽經

大乘莊嚴經に

でも、法賢譯の大乘莊嚴經には、八十四百千俱胝那由他(八萬四千と同數)の佛刹、功德莊嚴の所行の行願、我今成就せりとある位で、大無量壽經の二百一十億の諸佛刹土を八萬四千の衆生の機類と見るは、決して理由なきことではない。

これは單に表面の様

所で大無量壽經では、法藏比丘が世自在王佛の說法を聞き、二百一十億の諸佛刹土の善惡を觀見せられて、無上殊勝の願を起されたことになつて居るが、法華經ではこの刹土觀見に當る、八萬四千劫の入定は智勝佛がせられて、十六王子は八萬四千劫の間、四部衆の爲めに妙法華經を廣說分別せらるゝ事となつて、兩經に顯れて居る模様が齟齬して居るようである。即ち大無量壽經に於ける法藏比丘は、世自在王佛と能所の聯絡あるに反して、此の智勝佛と十六沙彌は、一は入定、一は說法と別々の歩みとなつて、一向交渉がないように見へて居る、併しこれは單に表面の模様で、其内證は決してそうでない。此所でも一寸お話しして置くが、一方で佛の入定が説かれてあると、其入定中に起る一方の出來事は、總じて其入定佛の影響即ち働きとなるのである。例へば釋尊が法華經を説くの前に、無量義處三昧に入定せられると、其結果として眉間の白毫から光を放つて、東方萬八千の土を照されること、

なる、そこで夫が資材となつて文殊彌勒の問答が始つて、遂には八王子の如き法華經の根本義が助顯される、是れ他なし、悉く釋迦無量義處三昧入定中の影響である。すべて斯ういふ工合に一方に入定されると一方に偉大なる働きが顯はれて居るのである。

此の一段の文節を搦き交ぜて

右様の理由で、世自在王と法藏も、入定の智勝佛と十六沙彌も、同じ關係同じ聯絡となるのである。即ち十六沙彌が八萬四千劫に亘つて、四部衆の爲めに各機類を救済すべく、妙法華經を廣く説き、分別さるゝの其資料は、大通智勝佛の入定の影響から得らるゝのである。夫で此邊の義相は、兩經に於ける此の一段の文節を搦交ぜて見ると能く分る、講演に代ゆるに試に搦交ぜてお目に懸けよう、讀下す便宜の爲めに、大無量壽經の世自在王佛を大通智勝佛に、法藏比丘を十六沙彌に書き更め、又た法華經の是の時に十六の菩薩云云は、大無量壽經と重複するので括弧内に入れて置く。

(妙經) 此の經を説き已つて、即ち靜室に入つて禪定に住し給ふこと八萬四千劫、(大經) 是に於て大通智勝佛、即ち爲めに廣く二百一十の諸佛刹土、天人の善

惡國土の麤妙を説き、其心願に應じて悉く現じて之を與へ給ふ、時に彼の十六沙彌佛の所説を聞き、(是の時に十六の菩薩の沙彌佛の室に入つて寂然として禪定し給ふを知つて) 嚴淨の國土皆な悉く觀見し、無上殊勝の願を超發し、(妙法) 各法座に升つて亦た八萬四千劫に於て、四部衆の爲めに妙法華經を廣く説き分別すと斯うなるのである、少し行過ぎたことではあるが、斯うして見ると意味が能く分るであらう、何としても畢竟此の意味に外ならないのである。

次は(ろ)の段を聯載する

(ろ)悉く十六沙彌へ影響す

(妙法華經) 一一に皆な六百萬億那由他恒河沙等の衆生を度し、示教利喜して阿耨多羅三藐三菩提の心を發さしむ。

(大無量壽經) 其心寂靜にして志、所著無し、一切世間に能く及ぶものなし、五劫を具足して莊嚴佛國清淨の行を思惟し攝取せり。

此段が即ち智勝佛八萬四千劫入定中、衆生の根機に付て精密なる調査が行はれ、その智勝佛の胸の裏は悉く十六沙彌へ影響するのであるから、十六沙彌が四部衆の爲めに妙法華經を廣説分別された結果は、前に智勝佛の説法で皆な疑惑を生じたるに引替へて、著しく示教利喜の効果が顯はれたのである。此一段の經文が法

華經では利他の作用に付て記されてあるが、大無量壽經では五劫思惟の自利意業に約して説れてある、即ち五劫を具足して莊嚴佛國、清淨の行を思惟し攝取せられたから、其思惟し攝取せられた所で示教利喜し、三菩提の心を發せしむの効果が顯れたのである。

此所も亦兩經を一束して讀で見ると能く分るが、これは別に能と一束して示すの手續を要しない、大無量壽經の方を讀み始めとして、法華經の方へ續けて讀でられると好都合に聯絡して意味が明瞭する。

次は(は)の段を聯載する。

(妙法華經)大通智勝佛八萬四千劫を過ぎ已つて、三昧より起つて法座に往詣し、安詳として坐して普く大衆に告げ給はく、是の十六の菩薩沙彌は甚だこれ希有なり、諸根通利にして智慧明了なり、已に曾て無量千萬億數の諸佛を供養し、諸佛の所に於て常に梵行を修し、佛智を受持し衆生に開示して其中に入らしむ。

(大無量壽經)阿難、佛に白さく、彼の佛國土の壽量幾何ぞや、佛言く其佛の壽命四十二劫なり、時に法藏比丘二百一十億諸佛妙土の清淨の行を攝取し、是の如く修し已りて彼の佛所に詣て、稽首禮足し繞佛三匝し合掌して、住して佛に白して言さく、世尊我已に莊嚴佛土清淨の行を攝取せり。

(は)餘音に富んだ所がある。

好都合に聯絡

此の段は、法華經の方は出定せられた智勝佛が十六沙彌を讚嘆せらるゝことゝなつて居るが、大無量壽經の方では、法藏比丘が自己の立場から、自己の修行の満足物語らるゝことゝなつて居る。ここでも文節の照應を求むれば、可なり獲られぬことはない、並べ掲げて經意の理解を容易ならしむる便りとしよう。但兩經とも立場立場で、承上起下の接續詞、或は疑問或は舉動記事等が記されてあるから、夫等は除くこととして置く、こゝは玩味せらるゝとなかなかに餘音に富だ所である。

(妙經) 是の十六の菩薩沙彌は甚だこれ希有なり、諸根通利にして智慧明了なり。

(大經) 時に法藏比丘。

(妙經) 己に曾て無量千萬億數の諸佛を供養し、諸佛の所に於て常に梵行を修し。

(大經) 二百一十億諸佛妙土の清淨の行を攝取し、是の如く修し已りて。

(妙經) 佛智を受持し、衆生に開示し、其中に入らしむ。

(大經) 世尊、我已に莊嚴佛土、清淨の行を攝取せり。

此中注意すべきは終節の照應である、これが即ち十八十九二十の三願を建立し、

諸の劇難と諸閑と不閑とを濟ひ、眞實の際を分別し顯示し、十分衆生救濟打盡の本願成就の事を説示されたのである。

(二)は勸信一は勸説

次は(二)の段を聯載する。

(妙法華經)汝等皆な當に數々親近して之を供養すべし、所以は何ん若し聲聞辟支佛及び諸の菩薩、能く是の十六の菩薩の所説の經法を信じ、受持して毀らざらんもの、是の人は皆な當に阿耨多羅三藐三菩提の如來の慧を得べし。

(大無量壽經)佛比丘に告げ給はく、汝、今説くべし宜しく知るべし是れ時なり、一切の大衆を發起し悦可せしめよ、菩薩聞き已りて此の法を修行せば、據つて無量の願を満足すること、を致さん。

此の段は法華經では、智勝佛が四衆に對して、十六沙彌の説法を信受すべきを勸められることになつて居るに對して、大無量壽經では、世自在王佛が法藏比丘に對して四衆の爲めに説法すべきを勸められて居る。此所は文節が悉く照應し抱合して居る、同じく掲げて經意理解の材に供しよう。

(妙經) 汝等皆な當に數々親近して之を供養すべし。

(天經) 佛比丘に告げ給はく、汝、今説くべし宜しく知るべし是れ時なり。

(妙經) 所以は何ん、若し聲聞辟支佛及び諸の菩薩、能く是の十六の菩薩の所説の經法を信じ、受持して毀らざらんもの。

(天經) 一切の大衆を發起し悦可せしめよ、菩薩聞き已りて此法を修行せば。

(妙經) 是の人は、皆な當に阿耨多羅三藐三菩提の如來の慧を得べし。

(天經) 緣つて無量の願を満足することを致さん。

之が照應抱合の委曲は殆んど説明を要しない、即ち一方に説法せよと勸めらるれば、一方には親近して供養せよと教へられ(第一對)。一方に説法して大衆を悦ばしめよ、其教法を聞いて修行するなればといはるれば、一方には所説の教法を信じ、受持して悦ぶもの、毀らざらんものはといはれ(第二對)。一方に皆が無量の願を満足するであらうといはるれば、一方には阿耨多羅三藐三菩薩の如來の慧を得るであらうといはれてある。尙熟玩されたならば必ず合點せらるゝ所があるであらう。

確信することである。

以上は或は淺薄なることの穿鑿であるとの、批難を蒙るやも計られないと思ひ



なしつゝお話をした譯である、且つ私の講演にも多少無理な所があつたであらう  
 大無量壽經と法華經とが同一人の手に翻譯されざるのみならず、彼の翻譯と此の  
 翻譯とは、時代も約一百五十年の星霜を隔てゝ居るのであるから、假令原本では暗  
 示式の下に、如何に嚴格に照應と抱合が企畫されてあつたにしても、夫が時代を隔  
 てた翻譯本の上に、一一筋目正しく顯れて居る譯のものでないは、當前の成行とせ  
 ねばならぬ。其正しく顯れて居ないものを以て、成るべく照應と抱合を搜り求  
 めんと企てたのであるから、多少の強會は免れなかつたかも知れない。夫にも拘  
 はらず照應と抱合の穿鑿を敢てしたのは、佛意がここに在ると同時に、兩經の原本  
 に於ては、必ず照應と抱合の動すべからざるものゝあつたことを確信するからの  
 ことである。之に付き遺憾遺瀨なきは法華經の原本は存するも、大無量壽經の原  
 本は今日之を見ることの出来ない事の一事であるが、幸に大無量壽經は今日尙五  
 種の翻譯本が残つて居るので、其の五種を照合して見ると、自ら其完全はこの康僧  
 鑑本の大無量壽經なることが分るので、其所を力草として私の確信する所に由つ  
 て、上來の如く穿鑿を試みたのである。

會心の微笑

多少の強會があつたにせよ、幾干の無理があつたにせよ、無量壽法華の兩經が犬  
 牙參差、左右に齟齬して居る裡に、シツクリ照應と抱合との妙を究めて居る如き、大  
 に興味ある所で、彌陀法として法華經を研究する上に於て、會心の微笑を漏さる  
 を得ない所である。

こゝが分岐  
點となつて

以上の所まで法華無量壽兩經が巧みに纏れ合ふて來て居るが、こゝが分岐點となつて、大無量壽經は無上殊勝の願の下に成立した四十八願の開示となり、法華經は無上正覺の下に其根本法を宣揚することゝなるのである。根本法と云が即ち一念信解の上に於ける精進である、前卷法華經文二四頁四行の佛、諸の比丘に告げ給はくといふ以下が夫である、冀くば熟讀なれたい、古來の學匠達が此邊の深い意義あることを更に見て居ない。而して其中に一切世間の苦惱を度する阿彌陀の成佛及び一切世間の怖畏を壊する釋迦の成佛を説き入れ、委曲を盡し唯彌陀一佛乘を以て滅度を得べきを諷示され、更に進んで謂ゆる化城喻を設けて、寶處は近きにあり、佛の一切智の爲めに大精進を爲すべきを策勵され、以て此品を終り、授記人記の二品を隔て、法師品に入り、法師品以下藥王菩薩本事品に至る十四品の中心

方便品が第一に措かれてある。

正宗分となるの次第である。  
尤も前にも述べた如く、智慧門に付ては方便品なるものがあるけれども、彼の普賢菩薩が、若し善男子善女人如來の滅後に於て、云何してか能く是の法華經を得ると問はれたに對し、法師品に於ける四法を以て答へられたる如く、若も之が衆生の根機の淳淨なる理想的時代であつたならば、或は智慧門なるものが根本法となることもあるであらうが、此の法華經は久しからずして涅槃に入るの時に於ける説法であるから、偏に滅度の後の衆生の爲に計らるゝの譯で、從つて其根本法なるものは法師品を淵源としての以下の十四品でなければならぬこととなる。但し精進と雖も智慧を攝取しての上の事ではなければならぬのであるから、今は精進に入るの方便としての智慧信解を説かれた方便品が第一に措かれてある。且つ根本中心の正宗分中に於ても、提婆品の後半の如き要部もあれば、又た安樂行品も入れられてある、此邊の經緯は能く考察せねばならぬ所である。

四 出世本懷 其十九 (化城喻品の四)

梵天の偈讚に就て。

上來三紀關係等に付ては、序品、化城喻品及大無量壽經を比較し、一往の所見を盡したのであるが、ここで後戻して梵天の偈讚に付て、二三の注意すべきことをお話しよう。大通知勝佛成道後、各梵天が從來所有の宮殿を奉上すると同時に、心を込めた偈頌を以て、大通智勝佛を讃嘆することとなつて居るが、この偈頌の上に大に彌陀法との關係が顯はされて居るのである(前卷法華經文十三頁十二行以下披見すべし)。扱て二三の注意すべき點の指摘といふは、梵天の名前及び其偈頌中の文句等に付てゝある。

一大梵天の名が救一切

先づ其第一は、東方五百萬億の國土に於ける、多くの梵天の總取締ともいふべき、一大梵天の名が救一切と呼ばれてあることである。之が暗に十六沙彌の成佛に於ける、阿彌陀佛の脇立の度一切世間苦惱なる佛名を指して、先づ注意を喚起して居るのである。能く氣を付けて見ると、其の救一切と名付くる、東方大梵天の第一の偈に、而も此の大光明徧く十方を照すとして、無量光なるを頌し。第二の偈に、能く一切を救護し、天人の大師として世間を哀愍し等と頌して、度一切世間苦惱に涉りを著け。更に第三偈に至り、大慈悲力を以て苦惱の衆生を度し給へと頌して、復

た度一切世間苦惱の佛名に觸れて居る。梵天の名前で阿彌陀佛なることを顯すといふは變に聞へるが例せば多寶の寶塔が法華經に擬せられたものなる事を顯す爲めに、對手の菩薩の名前が大樂説となつて居る如きで、法華經の慣用手段である。

名を大悲と呼ばれてゐる。

第二には、右の梵天の東南方の總取締の一大梵天である名を大悲と呼ばれてゐるが、此亦大悲の名を以て阿彌陀佛なることを助顯して居るのである。此一段は主として阿彌陀佛の無上正覺を顯すことに意が用ひられてゐる。そこで第一の偈に「光明昔より未だ有らず未だ曾て此相を見ず」と頌して、空前の無上なるを顯し、而して第二の偈に至り「世尊は甚だ希有にして、久遠に乃し一トたび現れ給ふ、八十劫空しく過て佛有すことなし」と頌して、更に進んで空前無上を顯して居る。

此の百八十劫といふが、

此の百八十劫といふが、何から割出された數であるかといふに、日月燈明佛の六十小劫に亘る法華經の説法の時間に基いたのである。前卷に於ての六十小劫のお話の下で申した如く、六の數は物の進行に於て一半一段を示すの數で、例へば六の陽と六の陰とで十二支が成立ち、六ヶ月と六ヶ月で一歲が滿了する如きである。

即ち日月燈明佛の法華説法が、第二紀の前半に當るのであるから、第一紀を百二十劫として前半が六十劫後半が六十劫、それに燈明佛の六十劫を加へると、百八十劫となるのである。そこで「百八十劫空しく過て佛有すことなし」と頌したる意味は、宇宙法界の開闢已來初めて佛といふべき佛が出られた、といふことになるのである。即ち無上正覺の所以である。梵天の分際で佛の正覺を批評するとは、怪しからぬ事のようなのであるが、釋迦と雖も成道當時は、大に梵天の保護と指導とを受けられたこととなつて居る。是は時代思想と關係のあることで、今委しく説明する暇はないが、別に怪むべきことではない。尙申して置くが、此段も亦此以下に於て度一切世間苦惱の文字には到る所觸れて居る、例へば第三の偈に於て、苦惱の衆生を度して大歡喜を得せしめ給へ等と、頌されてゐる如きである。

名が妙法となつて居る。

第三には南方であるが、此一大梵天の名が妙法となつて居る。妙法は即ち彌陀法である。此梵天の偈讚も亦阿彌陀佛の無上正覺を顯し、且つ劫數を以て無上正覺の大通智勝佛は、即ち阿彌陀佛なることを顯して居るのである。

百三十劫を過ぎて。

と云は第二の偈に「百三十劫を過ぎて、今乃ち一トたび見上るを得」としてゐるが、

この百三十劫を勘定して見ると、阿彌陀佛に當ることゝなるのである。前の百八十劫は、日月燈明佛の六十劫の法華經說法から起算して、太古へ遡つて百八十劫となつたのであるが、この百三十劫は燈明佛入滅後、妙光菩薩が八王子を薰陶せらるゝの初際から起算して、下へ數へて下がるのである。夫は妙光菩薩が法華經の演説をされるのは、八十小劫の間のことゝなつてゐて、而して此間に八王子を薰陶せられるのであるから、一王子に十小劫あての割合となるのである。所で大通智勝佛の十六王子なるものが、約りこの八王子の開展であるから、十六王子とは言ひながら、之は八組のものとせねばならぬ、現に化城喻品にては、八方に割振て八組に分たれてゐる、而して此の八組に分たれた所では、阿彌陀佛は第五組に當る次第となつて居る、前卷法華經文二四頁十行以下披見すべし。そうすると妙光菩薩の、八王子八十劫の割合から勘定すると、阿彌陀佛はこの第五組に當るから、初組の佛から數へれば、五十小劫目の成佛となる譯である、則ちこの五十小劫と、妙光説法の八十小劫と合せると、百三十小劫となるのである。そこでこの南方梵天の偈の、百三十劫を過ぎて今乃ち一トたび見上ることを得といへるは、前の百八十劫と比べ

宇宙法界の  
はらん限の佛

見る上に於て、全く十六王子の阿彌陀佛を指した譯となる。

茲に於て大通智勝佛を偈讚するに、阿彌陀佛を指して云云するといふは、事が當らないではないかといふ不審が起るであらうが、要之大通智勝佛も、日月燈明佛も、阿閼佛も、釋迦牟尼佛も、宇宙法界有らん限りの佛は、悉く阿彌陀佛に歸還すべきものとす、本來法華經の根本佛意であるのであるから、此等のことも其根本佛意を發足點としての、佛意の顯はれであると思ねばならぬものである。之はなかなか一般佛教の上に於て大切なる義門で、釋迦が一代を通じて種々に對機説法をせられ、八萬四千とも分れたといはれる法門が、ここに於て統一されるのである、ここに於て滅後の我々が、信仰の標的を把握することが出来るのである。法界宇宙彌陀一佛の佛意は、法華經を一貫して種々と顯されてゐるとはいひながら、此の梵天の偈の暗示に於て、尤も瞭かに顯されて居るように思ふのである。

第四に上方である、上來東、東南及南の三方の大梵天に於て、大通智勝佛を偈讚するの頌中に於て、法界宇宙の佛は阿彌陀一佛である、大通智勝佛亦た阿彌陀佛に他ならざるの、深遠なる佛意を暗示闡明ならしめられたことであつたが、この上方で

上方では之  
を總結し